秘伝の声 下

池波正太郎



新潮文庫

新潮文庫

秘伝の声

下巻

池波正太郎著



新潮社

新潮文庫

秘伝の声

下巻

池波正太郎著



新潮社版

4581

目次

おたか……七
赤い糸……二九
蝙蝠……四八
梅雨空……九五
炎……一三〇
流星……一五九
初雪の夜……二一〇
良夜……二三七
解説　影山勲

秘伝の声 下巻

おたか

坪内惣市が玉井与平治へいった言葉は、単なる脅しとはおもわれなかった。
少なくとも、阿部又七郎は坪内などと共に、何かたくらみごとをしているに相違ない。
だが、何事もないうちに、桜花の蕾がふくらむ季節となった。梅の花はすでに散った。
そうした或夜のことであったが、白根岩蔵は、まだ居間にいて、道場のほうへ寝みに行かぬ時刻に、
「先生……もし、大久保先生」
つぎの間へ入って来た女中の伊佐が、
「入って、よろしゅうございましょうか？」
「よいとも」
伊佐が入って来た。顔色が少し変わっていたが、声も態度も落ちついている。
「どうした？」

「いま、忠六さんが門の締りをあらために行きましたところ、門の前に女がひとり、行き倒れになっているそうなんでございます」

忠六とは下男のひとりで、四十も半すぎの、まことに実直な男だ。

「女が、行き倒れ……」

「はい。見たところ、捨てておいては死んでしまうにちがいない、と、忠六さんが申しますので……」

それなら交番へ行け、警察に知らせよ、というわけに、その当時では簡単にまいらない。まして夜のことだ。見捨ててしまえば、どうなるか知れたものではなかった。

「よし。行って見よう」

白根岩蔵は、すぐに立ちあがった。この夜は、鳥飼松之助が泊っていなかった。

台所の外に、下男の忠六が立っていて、

「おさわがせをいたしまして申しわけもございませんが、何しろ、息も絶え絶えのありさまなので……」

「ともかくも、門内へ入れるがよい」

「はい」

忠六が駆け去り、伊佐が提灯の用意をして、これを岩蔵へわたし、自分も後からついて来た。

忠六と、もう一人の下男・作造が、行き倒れの女を門内へ運び入れ、門を締めた。
岩蔵が提灯をさしつけて見ると、女は二十七、八で、身につけているものも垢じみているし、顔色は生気をうしない、痩せ細っている。
「これ、しっかりしろ」
忠六が声をかけても、女は光りのない、虚ろな眼を向けるのみで、こたえるちからもない。
「このようなとき、亡き水野鉄斎先生は、どうなされた？」
岩蔵が三人の顔を見まわすと、伊佐が即座に、
「いうまでもございません。お見捨てにはなりませぬ」
という。
下男ふたりも、同時にうなずいた。
「では、女を内へ運び、介抱をしてやろう」
「はい」
三人が、女を抱きあげた。
女の躰が、異臭をはなっている。何日も入浴などしていないのであろう。
伊佐は、すぐにも女を湯殿に入れ、躰を洗おうとしたが、
「それはいけない。このように躰が弱っていては、先ず、何か口へ入れてやらなくてはならぬ。それも、重湯のようなものがよい」

「あ……そうでございました」

女は、伊佐の部屋へ運び込まれ、蒲団へ寝かされ、伊佐は重湯の仕度に取りかかった。

ぐったりと横たわった女の枕元へ坐った岩蔵は、行燈のあかりに、あらためて女の顔を見た。

埃と垢に汚れつくしてはいるが、目鼻立ちも尋常だ。見たところより、もっと若い年齢なのやも知れぬ。

女は、昏睡状態になっている。

重湯ができたところで、岩蔵は女を抱き起し、

「さ、重湯を啜ってみるがよい」

伊佐が散蓮華（陶製の小さじ）で重湯を女の口へもっていってやると、女は、さもうまそうに重湯を啜り込んだ。

岩蔵は見ていて、

（このぶんなら、医者に診せずとも回復するだろう）

と、おもった。

重湯を啜ってから、女は、またしても深い眠りに落ちた。

「何かあったら、私を起せ。よいな」

いいおいて、白根岩蔵は道場へ入った。

岩蔵は、道場の一段高くなっている見所へ蒲団を敷きのべ、まわりを屏風で囲い、眠ることにしていた。

例の八角棒を抱き、大小の刀は、わざと居間のほうに置いてある。もしも、曲者が襲いかかったとして、そのためには先ず、道場の戸締りを打ち破らなくてはならぬ。その物音に岩蔵が気づかぬはずはないのだから、眠るときは、ぐっすりと眠れる。

この夜も、そうであった。

翌朝、目ざめた岩蔵が、

（あの女、どうしたろう？）

渡り廊下へ出ると、下男の忠六が庭から、

「先生。おはようございます。女は、まだ、寝ておりますよ」

「そうか。別に、変わったことはなかったようだな」

「大したものでございますね。昨夜、重湯を啜っただけで、顔の血色がちがってきたと、お伊佐さんが申しております」

「ほう、そうか」

母屋へ行き、伊佐の部屋へ行くと、女はまだ眠っていた。

伊佐が、手足と顔を湯で洗ってやったらしく、昨夜とは見ちがえるほどになっていて、なるほど、女の顔には微かながら血の色が浮いて見えた。

けれども安心はできなかった。
女の躰は、ひどく衰弱しているし、岩蔵が脈搏をはかってみても、尋常ではなかった。
女は、その日の夕暮れに高熱を発して、ふたたび昏睡状態となった。
「お医者さまを、よんで来たらいかがでしょう」
伊佐は、しきりにいったが、
「いや、大丈夫だろう。熱が出るほうが出ぬよりはいいのだ」
と、岩蔵は自信をもっていた。
果して、翌日の午後になると熱も下り、翌々日には、またも重湯を口にすることができるようになった。
それからは、日を重ねるにしたがって、女は、めきめきと回復した。
桜花が咲き、そして散りはじめた。
白根岩蔵の日常に変わりはない。毎日、朝早くから日暮れまで、道場に出て、門人たちへ稽古をつけ、倦むことを知らぬ。
女の世話は、伊佐にまかせていたが、或日、伊佐の問いかけにこたえて、女は、
「おたか、と申します」
と、名乗ったそうな。
自分の名前は、どうにかおもい出せたようだが、その他のことは、一切わからないようだ。

何か、強烈な衝撃を受け、そのために、この道場へ運び込まれる前の記憶を、すべて失ってしまったらしい。
「躰や頭などに、傷を受けてはいないか？」
岩蔵は、伊佐に尋ねた。
伊佐が、おたかと共に入浴をしているからであった。
「そんなものは、ございませんよ、先生」
「そうか……」
「おもったより、躰は若くて、肌理もこまかいのですが、一度、子供を産んでいますね」
「子供……」
「はい」
「その子供のことも、おもい出せぬのか!!」
「そのようでございます」
伊佐も一度、結婚をして男の子を産んだが、何でも幼児のうちに病気で死なせてしまったことがあり、夫とも死別している。
「先生。これから先、おたかさんをどういたしましょうか？」
「どうといって、以前のことを、すべて忘れてしまったというのでは、仕方もないことだな」

「そうなんでございます」

おたかは、起きあがれるようになってから、伊佐の仕事を手つだって、よくはたらくそうな。

しかし、外へ出ることを、非常に怖れるので、伊佐も外へ使いに出すようなことはしない。

島田九兵衛の屋敷から来た喜乃が、

「うちの旦那様へ申しあげてみましょうか。きっと、引き取ってもよいと、おっしゃいますよ。そうなさいまし」

岩蔵にすすめたが、何しろ、おたかは外へ出ることを嫌がる。いまは一途に、伊佐をたよりきっているのだ。

いかに強く激しい衝撃を受けたとしても、それまでの自分の過去をすべて忘れてしまい、ただ自分の名前だけをおぼえている。

「そんなことって、あるものでございましょうか？」

伊佐は、不審げに岩蔵へいったが、

「それが、あるのだ」

「まあ……」

むかし、白根岩蔵が少年のころ、故郷で、村の若い人妻が旅人に犯され、過去の記憶をすべて失ってしまったことがあった。

医者にも診せたが、ついに記憶はもどらなかった。けれども、前年に自分が産んだ女の子の名前と顔だけはおぼえていた。

その後、岩蔵は日影一念の道場へ引き取られて以来、故郷へは帰っていないので、人妻の記憶がもどったかどうか、それは知らぬ。

手短かに、そのことを岩蔵が語るや、

「やはり、あるものなんでございますね。おたかさんも可哀相に……」

伊佐は、ひとしお、おたかへの同情と不憫をかきたてられたようだ。

「ま、当分は、此処へ置いておくより仕方があるまい。お喜乃さんが折角にいってくれても、当人が外へ出たがらないのでは、な」

「何か、外で、よほど、怖い目に合ったのでございますね」

「そうらしいな」

躰が回復してからの、おたかも必死であった。

（此処を、追い出されたら、私は、どうなってしまうか、知れたものではない）

そこで、必死なのだ。

一所懸命にはたらき、そのはたらきぶりを、みんなにみとめてもらおうとする。

桜花が散り、陽光の輝きが増すころになると、おたかは外出の使い以外のことなら、骨身を惜しまずにやるようになった。

「これでは、私のすることが、なくなってしまいます」
伊佐は、苦笑をした。
おたかのよいところは、決して、出すぎないことであった。
たとえば、岩蔵の食事の仕度などについては絶対に手を出さず、伊佐にまかせている。
また、岩蔵の衣類や、つくろいものにも手を出さぬ。
どこまでも、伊佐の下ばたらきというかたちをくずさず、なりふりかまわずにはたらく。
「よくやってくれます」
伊佐も、つくづくと、
「よほど、苦労をしていたらしく、何をやらせても嫌な顔をいたしません。もうしばらく、置いてやって下さいまし」
岩蔵に、たのむようになった。
「それはかまわぬ。そのように便利にはたらいてくれるのならば、尚更のことだ」

四月になった。当時の四月は現代の五月とおもえばよい。日に日に、初夏の匂いが近づいて来て、おたかの肌には血色がよみがえった。
たまさかに、おたかを見かける白根岩蔵が、
（おたかは、見ちがえるほどに、肥えてきた。行き倒れていたときは、二十七にも八にも見

えたが、回復したところを見ると、二十三か、四か……）

目をみはったほどである。

岩蔵は、いまも、道場で寝ているが、眠るとき以外は、故水野鉄斎の居間にいる。そこへ、伊佐が食膳の仕度をしてあらわれても、おたかは顔を見せない。食事の給仕も伊佐にまかせている。

朝は岩蔵に挨拶をするが、それも部屋の外なり、道場の廊下なりから、

「おはようございます」

つつましく、声を送ってよこすのみだ。

もしも顔が合って、岩蔵から、何処か他所へ行け、とでもいわれはせぬかと、恐れているようにも感じられたので、

「お伊佐。おたかへ、此処にいてよいと申してやったのか？」

「はい。おことばをつたえましたところ、おたかさんは泪ぐんで、よろこびましてございますよ」

「そうか。ならばよい」

阿部又七郎や神保左門が蠢動をしている気配は、まったく感じられなかったけれども、白根岩蔵は寸時の油断もしなかった。岩蔵は、それが自分の修行の一つだとおもっている。

四月に入って間もなく、成子雪丸が様子を見に来て、すこやかに稽古をつけている白根岩

蔵を見るや、
「この春先のころにくらべると、岩蔵どのの顔つきが、まるで変わってしまいました」
「そうか。あのころは、私も、ずいぶんと悩んだ。いまは、それが嘘のようにおもわれる」
「阿部とか神保とか申すやつどもは、その後、何も？」
「何の気配もない。あの連中とて、私などに、いつまでもこだわってはいられぬだろうよ」
「そうだといいが……いや、きっと、そうなのでしょう」
「おぬしにも心配をかけて、すまなかったな」
「見なれぬ女のひとがいますね」
「そうなのだ。実は……」
と、おたかのことを語っておいて、
「ときに雪丸。まだ、子は生まれぬのか？」
「それが、いよいよ……」
「そうか。よかった、それは何よりだ。日影道場の跡つぎが、これで出来た。いつごろに生まれるのだ？」
わが事のようによろこび、身を乗り出した白根岩蔵へ、成子雪丸は顔をあからめ、
「来年の一月ごろと、おもいます」
と、こたえた。

ところで、この春ごろから、水野道場へ新しい門人が八名ほど入門をした。
あれから、道場をやめた者はいないので、門人の総数は七十六名になったわけだ。
それを聞いた牛堀九万之助は、
「何よりも、めでたいことだ。これは水野道場の、よい評判がひろまっているからにちがいない」
鳥飼松之助へ、そういったという。
松之助から、これを聞いた白根岩蔵は、
「まさかに、さようなこともあるまいが……」
つぶやいたが、悪い気持ちではない。
新しい門人は、いずれも身分の低い者たちだが、何しろ道場主の岩蔵が朝から日暮れまで、道場へ詰めきり、つぎからつぎへあらわれる門人たちへ稽古をつける熱心さに、
「このような道場は、はじめてだ」
「前に通っていた道場では、三年もいたのに、先生から直に稽古をしてもらったのは、数えるほどだった」
「それも、申しわけのような、短かい稽古だったのだろう?」
「さよう。そのとおり」
口々に、よろこんでいるらしい。

岩蔵に張り合いが出たのは、いうまでもない。そうなると、尚も稽古に精を出すようになった。

水野道場に、新しい活気がみなぎりはじめた。

その夜……。

白根岩蔵は夕餉の後も居間へ残り、故水野鉄斎の遺品を調べていた。鉄斎の遺品は、日影一念同様に数少ないが、さすがに刀剣だけは立派なものがそろっている。

これまでは、変事がつづき、その中で道場へは一日もやすまずに出ていただけに、遺品の整理もしていなかった。

鉄斎の遺品は、居間の向うの細長い納戸にある。

この夜は、鳥飼松之助が泊っていなかった。

居間から納戸へ、そしてまた居間へ、行ったり来たりしながら、岩蔵は鉄斎の遺品を刀剣から衣類に至るまで書きとめていった。

これらの遺品は、牛堀九万之助に相談をして、しかるべき人びとへ形見分けにするつもりであった。

区切りがついたので、

（あとは、明日のことにしよう）

岩蔵は居間を出て、いつものように道場へ向った。

縁側から廊下へ出て、渡り廊下への戸口へさしかかったとき、正面の湯殿から、おたかが出て来た。

岩蔵は、夕餉の前に入浴をする。そして最後に湯をつかうのが、おたかだ。

「あ……」

おたかは跪き、

「おやすみでございますか?」

「今夜は、遅くなった」

岩蔵は渡り廊下の戸を開け、

「後の戸締りをたのむ」

「はい。おやすみなさいませ」

「うむ」

うなずいて、岩蔵は渡り廊下へ出た。

渡り廊下は屋根だけで、戸も何もない。

戸外の闇は、あたたかかった。庭の木々の若葉の香りが濃厚にたちこめている。

岩蔵の背後で、おたかが戸を締める音がきこえた。

岩蔵は足を停め　その音に振り向いた。

おたかも戸を締めてからも、すぐには自分の部屋へもどらず、戸口に佇んでいるらしい。

おたかの足音は起らない。

（おたかが、凝っとしている……）

われにもなく、白根岩蔵の胸がときめいてきた。

いま、廊下で擦れちがったときおたかの躰から匂う香りに、岩蔵は激しい衝動を受けた。

このようなことは生まれて、はじめてといってよかったろう。

おたかは、別に化粧をしていたわけではないが、湯あがりの、成熟した女の躰から自ずと発する香りは、なまあたたかい廊下の闇に、ことさら強く感じられた。

岩蔵は立ち停まったまま、しばらくの間、うごかなかった。

戸口の向うでも、おたかはうごかぬ。

岩蔵は、動悸が激しくなるのを知ったとき、躰に汗がふきあがってきた。

どれほどの時間がすぎたろう。

と……。

おたかの足音が微かにきこえ、遠去かって行くのを、岩蔵の耳はとらえた。

「う……」

わずかに呻き、岩蔵が、よろめくように渡り廊下をわたりきって、

「作造……作造、忠六」

下男たちをよんだ。

忠六が出て来て、岩蔵を迎え入れ、渡り廊下の戸を締めた。

この夜、ついに、岩蔵は眠れなかった。

翌朝、いつもより遅く目ざめた岩蔵は起きぬけに湯殿へ飛び込み、何杯も水を浴びた。

昨夜の湯を落したあとの浴槽へ、作造が汲み込んだばかりの水であった。

躰をふいて、湯殿から出たとき、おたかが台所のほうからあらわれ、跪き、

「おはようございます」

朝の挨拶をした。

「うむ……」

うなずいて、岩蔵は眼を逸らした。

その岩蔵の顔を、跪いたままで、おたかが凝っと見あげた。

かつてないことではある。

昨日の朝の二人と、今朝の二人は、たった一夜のうちに、まるでちがった二人になってしまったかのようだ。

このときの、おたかの目差しを、どのように形容したらよいであろう。

うったえるような、白根岩蔵に、たよりきったような……なまなましい女の情感が素直にあらわれた眼の色であった。

あわてて、岩蔵は廊下から縁側へ出た。

そして振り向くと、おたかは、まだ、こちらを見まもっているではないか。
岩蔵は居間へ入り、坐って両眼を閉じた。
庭先の桐の花が、筒状の淡い紫色の花をつけている。
「おはようございます」
挨拶をして、つぎの間から伊佐が朝の食膳を運んできた。
香の物に味噌汁という、いつもの朝餉であったが、今朝は蚕豆を塩茹でにした小鉢がついている。
「どうかなさいましたか？」
「いや、別に……」
「お顔の色が……」
「よくないか？」
「はい」
「昨夜、よく眠れなんだので……」
「まあ……」
「いろいろと、その……亡き鉄斎先生のことどもを考えたりしているうち、つい、寝そびれてしまった」
岩蔵は、嘘をついた。

本当の胸の内を、たとえ成子雪丸にも、そのままに語るわけにはまいらぬ。そもそも、岩蔵自身が、おのれの胸の内がよくわからなかった。言葉にも筆にもつくせぬような、熱い情感に岩蔵は困惑している。困惑しつつ、そのおもいに酔っていた。

「先生も、いろいろと、大変でございますねえ」

「む……」

「さ、どうぞ」

「あ……」

箸を手にして、食事をするのも上の空であった。

朝餉を終えると、いつもは半刻（一時間）ほど食やすみをしてから、道場へ出るのだが、今朝は、すぐさま居間を出た。

伊佐が、いぶかしげに岩蔵を見送ってから、台所へ食膳を下げに来て、

「おたかさん。今朝の先生は、どうかしていなさる」

「どうかなすったので？」

「何だか、ぼんやりとして……昨夜は、よくお寝みになれなかったらしい」

「まあ……」

おたかは、こちらに背を向け、洗い物をしている。

すぐに、伊佐は台所を出た。

道場では、すでに朝の稽古がはじまっていた。

いつもなら、すぐに、岩蔵も木太刀を手にして稽古をはじめるのだが、この朝は、稽古着も身につけず、見所へ坐って、とりとめもない視線を、稽古する門人たちへ向けているのみだ。

白根岩蔵は、いつまでも見所に坐り込んでいたわけではない。

ややあって稽古着に着替え、木太刀をつかみ、門人たちへ稽古をつけはじめると、岩蔵は一切の雑念を忘れ、稽古に没頭することができた。

そうなると、たった一夜の寝不足なぞ、岩蔵にとって、いささかの影響もあたえない。

島田屋敷にいたころ、島田九兵衛の身をまもろうとして、徹夜に近い日々を送ったときも、身にこたえなかったほどの白根岩蔵である。

門人たちも、はじめのうちは、見所に坐り込んだまま茫然としている岩蔵を見やって、

「今朝の先生は、どうも変だ。そうおもわぬか？」

「たしかに、おかしい」

「またしても、阿部や神保が、何ぞ難題をもちかけてきたのだろうか？」

「あるいは、な……」

などと、ささやきかわしていたようだが、岩蔵が稽古に立つと、門人たちも、そうした不安を忘れて熱中した。

稽古を終え、岩蔵は、いつものように湯殿へ向った。
めっきりと日足がのびて、夕闇が明るかった。
汗をながし、居間へ入ると、伊佐が来て岩蔵の髪をととのえてくれる。これは、いつものことであった。
夕餉を終え、昨夜につづいて、水野鉄斎の遺品の整理に取りかかったが、さすがに疲れが浮きあがってきた。
島田屋敷での徹夜のときの岩蔵は、牛堀道場へ稽古に行く身であったが、いまはちがう。
何十人もの門人へ、たゆみなく稽古をつけるのだから、疲れが出るのは当然だ。
この夜は早目に、岩蔵は居間を出た。
縁側から廊下へ……。
そこに、おたかはいなかった。
ためいきが出るほどに、岩蔵は気落ちがした。
それはつまり、渡り廊下の戸口に、おたかが立っていることを期待していたからにほかならぬ。
渡り廊下の戸を開け、岩蔵は歩み出した。
この戸口の締りは、いつも後で、伊佐が点検をすることになっている。
渡り廊下を歩みつつ、岩蔵は二度、振り返った。

ついに、おたかは出て来ない。
やむなく道場へ入り、蒲団へ身を横たえた。
（今夜も、眠れぬような……）
気がしたけれども、いつの間にか岩蔵は深い眠りに落ちていた。
翌朝、目ざめて、
（あ……ぐっすりと眠れたぞ）
白根岩蔵は、みちたりたおもいになって、起きあがった。

赤い糸

（おれは、どうかしていた……）

考え直してみると、何から何まで、自分のおもいすごしだったような気がする。

（おれが勝手に、おたかの胸の内を推し量っていたのではあるまいか。それにちがいない）

このようなことで、道場の稽古にさしつかえができたら、それこそ取り返しがつかなくなる。

「おはようございます」

下男・忠六の声を聞いて、岩蔵はうなずきつつ、渡り廊下を居間へ向った。おたかの姿を何処（どこ）にも見かけなかった。

岩蔵は、何となく、寂しかった。

朝餉（あさげ）を終え、食休みをしてから道場へ向うと、おたかのことは気にならなくなっていた。

見所の裏手に、岩蔵の着替えの小部屋がある。

稽古着は、毎夜、下男から伊佐なり、おたかなりにわたされ、朝になると洗濯されたものが置かれてある。岩蔵の稽古着は五枚もあった。

今朝も、洗いたての紺木綿の稽古着をひろげると、ほころびていた刺子が同じ紺糸で、きれいにつくろわれていたが、

（……？）

その、つくろった箇所に、一すじの赤い糸がさりげなく横たわっているのを、岩蔵は見た。

岩蔵は、その赤い糸を摘みあげた。

糸を見つめる白根岩蔵のくびすじから顔面にかけて、急に強い酒でも呷ったような血の色が見る見る浮きあがってきた。

この稽古着をつくろったのは、

（伊佐ではない）

と、岩蔵は直感した。

一すじの赤い糸は、岩蔵の指にはさまれ、微かにふるえている。

いや、糸がふるえているのではない。

岩蔵の指が、ふるえているのだ。

そのとき、

「や、やあっ……」

ひときわ高い門人の気合声が、ひびきわたった。
はっと、われに返った岩蔵は、まだ、ものをいいたげにふるえている赤い糸を懐紙に包み、ふところの奥深くへ仕舞い込んでから、着替えにかかった。
胸がときめいている。
来年は三十歳になる白根岩蔵だが、まだ、一度も女の躰を知らぬ。
女の手をにぎったこともない岩蔵であった。
現代の男女から見れば、白根岩蔵のような男は、すこぶる奇異に感じられるであろうし、理解もできまいが、特殊な環境にある男、ことに武芸の修行に心身を打ち込んでいる男にとって、本能も性欲も、すべて苛烈な修行に転化されてしまうのだ。
日影一念、水野鉄斎、牛堀九万之助の例を引くまでもなく、これらの男たちにとって、女は不用なのである。むしろ、邪魔であった。
何故、邪魔か、ということになれば、現代人にも少しはわかるであろう。
仕事をもつ男や女にとって、ときに、共に棲む異性が、わずらわしくなることは、めずらしいことではない。
武芸者の修行は、ときに、ではない。毎日が修行なのである。そこへ、女にからみつかれる生活が入って来ると、どうにもならぬ。
その一方で、たとえば成子雪丸のように、二十をこえたばかりで結婚をし、子までもうけ

る若者もいる。

つまるところは、武芸者も一様ではない。

人間という矛盾の生きものは、理屈で解決できるものではないのだ。

この日、道場へ出た白根岩蔵の稽古ぶりは、生気にみちていて、門人たちへかける声も、ほがらかにひびきわたった。

稽古が終り、岩蔵は着替えをすますと、湯殿へおもむいた。

懐紙に包んだ赤い糸は、そのまま、湯殿へ持ち込んだ。

湯殿には、洗いたての肌着が用意してあり、躰を洗って出るときに、これと着替える。

これらのならわしは故水野鉄斎のころからのもので、それを、伊佐がそのままに岩蔵へ、つたえのこしているのである。

入浴し、衣類を身につけたとき、岩蔵は赤い糸の包みを懐中に入れた。

湯殿を出たとき、渡り廊下の下の庭先へ、おたかがあらわれた。裏手の物置小屋にでも用事があったらしい。

岩蔵と、おたかはぴたりと足を停めて眼と眼を合わせた。

岩蔵は、ほとんど無意識のうちに、ふところから、例の赤い糸を包んだ懐紙を取り出し、廊下からおたかへ手わたした。

受け取って、おたかが微笑した。

何ともいえぬ微笑であった。
自分が一すじの赤糸に托したおもいを、
（先生が、わかって下された……）
その、うれしさを押さえきれぬかのような微笑であった。
さらに、おたかは、岩蔵にうなずいて見せた。
（おわかりになって下さいましたね）
とでも、いうように……。
岩蔵も、うなずき返し、居間へ入って行った。
この夜、白根岩蔵は、得もいわれぬ幸福感に包まれ、ぐっすりと眠った。
その幸福感とは、どのようなものかと問われれば、ひとくちにいうことはむずかしい。
むずかしいが、だれにもわかるおもいといってよい。
二十九歳になって、剣客としても立派に成長した岩蔵だが、このような感情が胸に生じたのは初めてであった。
女に対しての岩蔵は、心身ともに、二十前の若者である。
さりとて、いま、おたかと夫婦になりたいとか、おたかをどうしようとか、考えているわけではないのだ。
けれども、四日、五日と日を重ねるうちに、庭や廊下で顔を合わせる岩蔵とおたかの目差

しには、他の奉公人や門人たちの目をはばかりながら、しだいに、無言の会話をかわすようになってきた。

それは、どのような会話かといわれても困る。

男女の胸の内を語るに、言葉はあまり必要ではない。

しかし、現代の男女ならば「愛している」の一言を吐くべきであろう。それでなくては、たがいに相手の心が読みとれなくなってしまったのだ。

現代は、人の眼のちからが失せた。そのかわり、理屈が多くなり、言葉が増えたのである。

道場は、依然、安泰であった。

或日の朝、白根岩蔵は伊佐に、

「今夜から、こちらで寝むことにしよう。もう、大丈夫だとおもう」

と、いい出た。

伊佐は、その言葉を待っていたかのように、

「それがよろしゅうございます。私も、先生に申しあげようとおもっていたところでございました」

「だが、万一ということもある。いざとなったとき、女たちの逃げる場所はわきまえていような」

「心得ておりますよ。先生の、おっしゃるとおりにいたします」

「私にかまわず、逃げてくれなくては、かえって足手まといになる」
「わかりました」
「おたかさんにも、作造や忠六にも、このことをつたえておいてもらいたい」
「承知いたしました」
岩蔵が、このようにいい出たのは、無意識のうちに、母屋で寝起きするようになれば、おたかを見る機会も増える、というおもいがあったからではなかろうか。
この日、稽古を終えた白根岩蔵が渡り廊下へかかると、庭先にいた下男・忠六が、
「先生。今夜から母屋へもどられるそうで……」
「うむ。いつまでも、道場の見所に寝ているわけにもゆくまい」
「さぞ、御不自由なことだろうと、作造とも、はなし合っていたのでございます」

その夜、おもいもかけぬことが起った。
女中の伊佐の弟の妻が、心臓の発作で倒れたという知らせが来たのである。
伊佐の弟は、芳太郎といって、京橋の北一丁目で錫の細工師をしている。弟子が三人いるが、妻がはたらきもので、女中は使っていない。
知らせに駆けつけたのは若い弟子だ。芳太郎は倒れた妻につきっきりなので、
「すぐ、姉に来てもらうよう、たのんで来てくれ」

と、弟子を走らせてよこしたのだ。
「どういたしましょう？」
伊佐が顔色を変え、このことを告げたので、岩蔵は、
「どうこういっている場合ではない。その、弟ごのところの弟子は待っているのか？」
「裏口に……」
「それなら、すぐに仕度をして行きなさい。駕籠をたのむがよい」
「いえ、そのような……」
岩蔵は縁側へ出て、作造をよび、町駕籠の手配を命じた。
姉は弟を可愛がり、兄は妹が可愛いという。伊佐も弟の嫁の急病とあっては、すぐにも駆けつけ、弟のちからになってやりたかったにちがいない。
「先生。ありがとう存じます。ありがとう存じ……」
泪声で何度も礼をのべ、伊佐は仕度もそこそこに、作造が〔駕籠松〕へ行き、たのんで来た町駕籠に乗り、若い弟子につきそわれて弟の家へ向った。
それを見送って居間へもどると、おたかが、つぎの間から、
「あの、御膳を下げて、よろしゅうございましょうか？」
「あ……そうしてくれ」
「はい」

音もなく、おたかが入って来た。
「あの……お伊佐さん、大変なことに……」
「かわりをしてもらわねばならぬ」
「一所懸命にいたします」
「外の使いには、作造なり忠六なりへ、遠慮なく、たのむがよい。私からも、そのようにいっておこう」
「ありがとう存じます」
二人ともに、たがいの顔を見ようとはしなかった。
今夜から、伊佐がいなくなった母屋で、岩蔵とおたかは暮すことになる。
下男たちの部屋は、渡り廊下の向うなのだ。
うれしいような、気づまりのような、胸の高鳴りを、岩蔵はどうしようもない。
「あの……」
「う……」
「明日より、私が、御膳ごしらえをいたします。ふつつかでございますが、何なりと、お申しつけ下さいまし」
「わ、私に、好き嫌いはない……」
痰が喉へからんだような、岩蔵の声であった。

その後で、白根岩蔵は納戸へ入り、水野鉄斎の遺品の整理をはじめた。
これから夜が更けて、岩蔵は眠るわけだが、前には、居間へ入ってきた伊佐が、
「お床をとりましょう」
「たのむ」
と、何でもなかったことが、今夜からは、おたかがそれをすることになる。
（困った……）
自分で床をとればよいのだが、蒲団の類が何処にしまってあるのか、岩蔵は知らなかった。
遺品を書きつけていても上の空で、何をしているのだか、自分でもわからぬ。
「ああ……」
ためいきを吐き、岩蔵は居間へもどって、目をみはった。
いつの間に入って来たのであろう。そこには、岩蔵の寝具が敷きのべられていたのである。
納戸は居間のとなりで、板戸一枚をへだてたきりなのだ。おたかが入って来れば、その気配がわからぬはずはない。
それとも、頭に血がのぼり、気配に気づかなかったのか。
（いかぬ。これでは、万一のとき、何の役にも立たぬ。おれとしたことが……）
その反省の念よりも、岩蔵はほっとした。
ほっとしたが、さびしかった。

夜が更けて……。

つぎの間へ、おたかが入って来た。今度は、わかった。岩蔵は身をかたくした。

「あの……」

襖の向うで、おたかの低い声が、

「おやすみでございますか？」

「う……いや……」

「御用は、ございませんでしょうか？」

「あ……おたかさんも、寝むがよい」

「はい。ではそうさせていただきます」

沈黙がきた。

襖の向うで、あきらかに、おたかは片膝をついたまま、こちらの気配をうかがっているかのようだ。

岩蔵は、どうしたらよいか、わからなくなってきた。

獣のように叫び何処かへ飛び出したくなってきた。

その瞬間、おたかの声が沈黙を破った。

「おやすみなさいまし」

「……」

おたかが、つぎの間から出て行った。
白根岩蔵は気抜けがしたようになり、両の拳で自分の頭を何度も叩いた。
音がする。
微かな雨音であった。
岩蔵は納戸へ行き、亡き日影一念が形見にくれた和泉守国貞の脇差を出し、居間へもどった。
岩蔵は端座し、懐紙を口にくわえ、しずかに国貞の一刀を抜きはなち、眼を凝らした。
大坂の刀工として世に知られた和泉守国貞が鍛えた一尺五寸の脇差は地刃ともにすぐれていて、すこやかな刃文を見つめているうちに、白根岩蔵のこころは、しだいに鎮まってきた。
灯下に青白い刀身は冴えわたって、岩蔵の身も心も吸い込んでしまうかのようであった。
岩蔵は、身じろぎもせぬ。
おたかのことも、何も彼も忘れ、刀身に、いつまでも、いつまでも見入っている。
この夜、岩蔵は夢も見ずに寝入った。
翌朝、目ざめると、あたたかい雨が霧の幕をおろしたように降りけむっていた。
湯殿で顔を洗い、居間へもどると、おたかが朝餉の膳を運んで来た。
「おはようございます」
「おはよう」

二人とも、声に乱れはない。
おたかは、淡々として給仕をしながら、
「お伊佐さんの弟さんのところでは、どうなりましたろう?」
「そのうちに、様子を知らせてくるとおもう」
「はあ……」
今朝の岩蔵は、われながら平静でいられた。
おたかも、平静である。
しかし、二人とも無意識のうちに、たがいに眼と眼が合わぬようにしていた。
眼が合わなければ、
(こころも乱れぬ)
このことであった。
おたかも、あるいは同じように考えているのやも知れぬ。
「この雨、熄みそうにもないな」
「はい」
午後になり、伊佐が、弟の若い弟子へ手紙をもたせてよこした。
弟の妻は、一応、落ちついているが、まだまだ、到底、起きあがることはできないので、もうしばらく、こちらへ置いていただきたい。御不自由をおかけ申して、まことに申しわけ

もないが、おたかさんがいるので、心強くおもっている……と、およそ、このような文面だ。
昼餉をとりに居間へもどったとき、岩蔵は、伊佐の手紙をおたかへ見せた。
「しばらくは、もどれぬらしい」
「はい」
昼餉は、いつも白粥と梅干にしていた。これも水野鉄斎が生きていたころのならわしを、岩蔵はくずさぬようにしている。
箸を置いたとき、岩蔵が、
「おたかさん……」
「はい？」
「まだ、以前のことを、おもい出さぬか？」
「……」
雨音が、強くなってきた。
「私、いつまでもこうして、御厄介になっては、いられませんのでございますが……」
口ごもりつつ、おたかはいった。
「いや、そうではない。そのことではない」
あわてて岩蔵は、かぶりを振って見せた。
いつまでも、おたかには居てもらいたいが、そのために自分の修行がおろそかになっては

困る。

今日のように、二人がうまくやって行ければよいが、おたかが、また前のように岩蔵を、物いいたげに見つめたりすれば、

（おれの胸が、また、騒いでくるにちがいない……）

のである。

それが、怖かった。

しかし、おたかが、この道場を去ることをおもえば、それもまた残念なのだ。

おたかは、いまも外出をしない。買物を紙へ書き、下男へたのんでいるらしい。

「私が悪かった。二度と、このことを口に出すまい」

結局、岩蔵がこういって、うつむいたまま沈黙しているおたかをなぐさめた。

「どうして私は……私は、このような僻(ひが)みを……」

おたかの声が、ふるえている。

「もうよい。もうよい」

「は……」

稽古(けいこ)を終えて入浴し、居間へ入ると、おたかが来て、伊佐がするように、岩蔵の髪をととのえてくれた。伊佐のようにはいかぬが、背後に密着した、おたかの息づかいに、岩蔵の胸は少し波立ってきたようだ。

「これで、よろしゅうございましょうか。とても、お伊佐さんのようにはまいりませんが……」

「結構だ。さっぱりとした」

「まあ、よかった……」

おたかの視線を背中に感じながらも、岩蔵は振り向かなかった。

雨音は弱くなったが、まだ熄まぬ。

明日もまだ、降りつづくにちがいない。

夜になった。

夕餉の後で、岩蔵は遺品の整理に納戸へ入った。

この間に、おたかは岩蔵の夜具を敷きのべる。

この夜は、さすがに、その気配を知った岩蔵だが、落ちついていたし、おたかも手早く仕度をして自室へ引き取った。

夜ふけて寝むときの挨拶も、つぎの間の襖を開けず、すぐに立ち去った。

（このぶんなら、うまく、やって行けるだろう）

白根岩蔵は夜具へ入って間もなく、眠りに落ちた。

どれほど眠っていたろう。

（……？）

岩蔵は、はっと目ざめた。
つぎの間に、人の気配を感じたからだ。
岩蔵は抱くようにしている例の八角棒を、つかみ直した。
忍びやかな人の気配が、襖へ近寄って来る。
（ひとりだ……）
と、わかったとき、白根岩蔵の五体が、かっと熱くなった。
（ひとり……ならば、おたか……）
人の気配は、襖の向うで、うごかなくなった。
曲者（くせもの）ならば、襖を開けて襲いかかって来るはずだ。
岩蔵は両脚を曲げ、いざというときは夜具を蹴（け）って飛び起きる体勢のまま、息をのんだ。
襖の向うで、息づかいがする。
女だ。
おたかに相違ない。
岩蔵の手が、八角棒からはなれた。
かなり強い雨音が、部屋の内にこもっている。
有明行燈（ありあけあんどん）のあかりはあっても、襖のあたりは暗い。
暗いが、見えないことはない。

部屋の中央に敷きのべられた岩蔵の夜具から襖までは、約二間ほどある。
微かに、襖が音をたてた。
岩蔵は、襖のほうへ躰を向け、食い入るように見つめていた。
襖が、一寸ほど開いた。
岩蔵の喉が鳴った。生唾をのみこんだのである。
また襖が、少し開いた。
岩蔵は何かいいかけたが、声にならなかった。
ついに、襖が三尺ほど開き、黒い人影が部屋へ足を踏み入れた。
おたかである。
しずかに、ゆっくりと、おたかが近寄って来る。
岩蔵は、かたく眼を閉ざした。
おたかは、岩蔵の枕元へ来て、坐った。
そのとき、白根岩蔵は飛び起きて、おたかを抱きしめていた。
おたかは、あえぎはじめた。
強く抱きしめたままで、どうしてよいかわからぬ岩蔵のくびすじへ、おたかの双腕が巻きついてきた。
「おたかさん……」

「先生……」
女とはおもえぬちからが、おたかの双腕にこもってきた。
「こ、このような……いけない、いけない」
呻くようにいいながら、わずかに岩蔵は身を跼いた。
おたかは、こたえなかった。
顔を寄せてきて、岩蔵の胸へもたれかかり、その双腕は、くびすじから背中へ下った。
岩蔵の寝間着の上から、その胸のあたりへ、おたかの熱い唇が押しあてられた。
たまりかねた岩蔵は、おたかの顔をあげさせ、自分の顔を押しつけた。
おたかの唇は、岩蔵の唇を探りあてて、はげしく吸いはじめた。

蝙蝠（こうもり）

この夜、白根岩蔵とおたかが結ばれたことは、だれにもわからなかった。
朝になって岩蔵が目ざめたとき……いや、岩蔵が眠る前に、おたかは居間を出て行った。
その日も、おたかは平常通りにはたらき、下男たちに違和感を抱かせなかった。
岩蔵も、つとめて平常と変わりなく一日を終えたが、稽古を終えて居間へ入ると、落ちつかぬ自分をどうしようもなくなっていた。
やがて、おたかが夕餉（ゆうげ）の膳（ぜん）を運んで来た。
おたかは、岩蔵を見ぬようにして給仕をする。
岩蔵は、その横顔を食い入るように見つめている。
おたかは、平静であった。
昨夜、女体を知らぬ岩蔵を翻弄（ほんろう）するかのようにふるまった女とは、別人のようだ。いや、昨夜以前のおたかとも、ちがって見える。

岩蔵よりも、ずっと年上の女に見えた。
食事をしていて、岩蔵は味がわからなかった。
ついに、たまりかねて箸を置くや、
「おたか……」
手をつかむと、おたかは、しずかに岩蔵の手を解き、このときはじめて岩蔵を見て、かぶりを振った。
おたかの眼が光っている。
にらむがごとく、そして怨ずるがごとく、万感のおもいをこめて岩蔵を見返しているのだ。
「お、おたか……」
「……」
こたえず、おたかは、またかぶりを振って見せ、膳を下げて行った。
「ああ……」
岩蔵は、ためいきを吐き、頭を抱えた。
おたかは、どうしたのであろう。
雨は夕刻まで降りつづいていたが、いまは熄んだ。
それから夜更けまでの間、自分が何をしてすごしたか、わからなかった。
落ちつかぬままに納戸へ入ったり出たりしたことだけは、おぼえている。

そして、おたかが夜具を運んで来るのを、熱い期待をもって待った。
おたかは、なかなかにあらわれなかった。
岩蔵は、ついに廊下へ出た。
以前、伊佐が寝起きしていた部屋が、おたかの部屋になっていた。
伊佐も、自分の衣類は、その部屋に置いてあるが、寝むときは居間のつぎの間で眠る。
伊佐はいない。
岩蔵は縁側で、ためらったあげく、台所に接した、その部屋の前に立った。
「おたか……おたか……」
低く、よびかけたが、おたかの返事はない。おもいきって障子を開けると、おたかは部屋の中にいなかった。
（いない。何処かへ出て行ったのだろうか。ま、まさか……）
廊下を台所の前へ出て、居間のつぎの間へ入ると、おたかが居間で夜具を敷きのべている姿が見えた。
おたかは、振り向きもしなかった。
白根岩蔵は、つぎの間を出て、また廊下を縁側へもどり、居間へ入った。
夜具をのべているおたかは、あきらかに、岩蔵と視線を合わせるのを避けている。
これはいったい、どうしたわけなのであろう。

岩蔵は胸の内で、おろおろするばかりであった。
よびかけようとしたが、声にならぬ。
おたかの物腰には、岩蔵の声を寄せつけようともせぬ感じがあって、なればこそ、よびかけられないのだ。
夜具を敷きのべ、おたかは、つぎの間へ下ってから、
「おやすみなさいませ」
岩蔵の顔を見ずに、一礼して立ち去った。
（どういうつもりなのだ、おたかは……まさか、昨夜のことを忘れたわけではあるまい）
忘れるわけがないのだ。
昨夜はじめて、成熟しきった女の躰へふれ、無我夢中の時間がどれほどのものだったか、岩蔵はおぼえていない。長かったようでもあり、短かかったようでもあったが、おたかは繰り返し繰り返し、岩蔵をもとめてやまなかった。
おたかと抱き合っていたときの強烈な刺激は、いま尚、岩蔵の五体に疼いている。
もしも、おたかが此処へあらわれて、その手指が岩蔵の躰へさわったなら、そこから血がふき出しそうな気がするのだ。
岩蔵は夜具の中へもぐり込み、蒲団を頭からかぶって、
「おたか……おたか……」

狂おしげに何度も、女の名をよんだ。よばずにはいられなかった。
こうした岩蔵を、成子雪丸が見たら、なんとおもうであろう。
（おたかは、おれを、なぶっているのか。それとも……それとも……？）
わからなかった。
女の心が、女の挙動の奥底に潜む、その心がわからなかった。
まんじりともせずに夜を明かした岩蔵が、洗面に湯殿へ行き、もどって来ると、すでに夜具が片づけられている。居間の中に、おたかの匂いが淡くただよっていた。
おたかが朝餉の膳を運んで来て、岩蔵の顔を見て、
「おはようございます」
朝の挨拶をした。明るい声であった。
おたかは微笑している。
岩蔵は、へどもどしながら、これにこたえた。
弟の家にいる伊佐の使いが来たのは、そのときであった。
伊佐が、弟の弟子へ持たせてよこした手紙によると、弟・芳太郎の妻は、昨夜おそくなって、またも発作を起し、ついに死去したそうな。
使いの弟子は、すぐに帰って行った。
白根岩蔵は、ふたりの下男とおたかを居間へよび、このことを告げた。

「こうなっては、お伊佐さんも帰って来られません」
「気の毒なことで……」
などと、下男たちはいったが、おたかは黙って、俯いたままだ。
「今夜の通夜に私は行くが、帰りは明朝になるだろう。おそらくは明日は葬式となろうから、帰って着替えをしてから、またすぐに出かけることになる」
岩蔵がそういうと、下男の忠六は、
「それは大変でございます。着替えのお着物は、私が、おとどけいたします」
「いや、いったんは帰って来る。湯を浴びてから出直したい」
「あ、さようで……」
伊佐は、故水野鉄斎へ長年にわたり忠実に仕えてきた女中であるから、岩蔵としても疎略にはあつかえなかった。
また、白根岩蔵の、そうした態度を見るにつけ、下男たちの信頼は深くなるばかりであった。
岩蔵は道場へ出て、伊佐の弟の妻が亡くなったことを告げ、明日の稽古は門人たちでおこなうようにといった。
それから稽古に入り、夕刻、いつもより早く母屋へ引きあげ、入浴をすませ、居間で、おたかに髪をととのえてもらった。

二人とも、ほとんど言葉をかわさなかった。

伊佐は、弟が再婚をするか、または女中を見つけるかしないかぎり、弟の家へとどまらなくてはなるまい。

弟の芳太郎には十四歳の長男と十歳の長女がいる。それに三人の弟子がいるのだから、伊佐が家計を見てやらなくては、どうにもならぬ。

（当分の間……いや、お伊佐は此処へ帰っては来られまい）

となれば、夜の母屋には岩蔵とおたかの、二人きりの暮しがつづくことになる。

そのことを、

（おたかも、考えているだろうか……）

髪をととのえさせながらも、岩蔵の胸は熱くなるばかりだ。

おたかの手つきに乱れはなく、

「これで、よろしゅうございましょうか？」

手鏡を岩蔵へわたして問う声も落ちつきはらっている。

「うむ、これでよい」

「お召し替えをなさいますか？」

「そうしよう」

岩蔵は、立ちあがった。

この日の通夜から、翌日の葬式にかけて、白根岩蔵が伊佐の弟の家へ詰め切り、いろいろと世話をしたことは、伊佐や芳太郎を感動させた。

伊佐は泪ぐみ、

「先生に、このようにしていただきましたのに……それなのに、まことに勝手ながら……」

いいさして、後の言葉が出なくなってしまった。

「わかっている。当分は、この家にいなくてはなるまい」

「せ、先生……」

「なれど、時折は道場へ来て、何かと面倒を見てくれなくては、私が困る。よいか、よいな」

岩蔵にそういわれると、伊佐も悪い気はせぬ。

「もったいないことでございます」

「たのむぞ」

「は、はい」

伊佐も、こうなってみると、おたかがいることで、心が安まるらしかった。

「おたかさんが、しっかりしておりますから、先生に御不自由はおかけいたしませんと私はおもいます」

「だが、おたかは身性がわからぬ女だ」
おたかの記憶がもどれば、水野道場にいられなくなるやも知れぬ。
伊佐は、
「おたかさんは一度、子を産んでいるようにおもいます」
そういったことがある。
伊佐の目に狂いがないとすれば、おたかには子もあり、夫もいて、行方知れずとなったおたかを探しまわっているのやも知れなかった。
それを想うと、岩蔵は不安でたまらなくなってきた。
「弟も、まだ、後添いをもらえぬ齢ではございません。後あとのことを考えますと、よい女が見つかったなら、夫婦にしてやりたいと存じます」
「そうだな」
「そのときは先生、私、また道場へ、もどってよろしゅうございますか？」
いい出た伊佐の声音には真情がこもっている。
「むろんのことだ」
「ありがとう存じます。これは、きっと、御約束なすって下さいまし」
「よいとも」
岩蔵はこたえたが、内心、複雑なものがあった。

伊佐を拒むわけではない。

ないが、しかし、おたかがまた居間に寝ている岩蔵のもとへ忍んで来るようになるとしたら、伊佐がいては困る。

伊佐の弟は実直で無口な職人であるが、通夜のとき、岩蔵に、

「私は、もう、二度と女房を持たぬつもりでおります」

と、ささやいた。

その心が変わらぬかぎり、伊佐は道場へもどっては来られまい。

葬式の日の翌日に、伊佐と芳太郎の姉弟が水野道場へ来て、岩蔵に礼をのべた。

それから三日後に、伊佐が若い弟子に小さな荷車をひかせてあらわれ、自分の衣類や持ち物を弟の家へ運んで行った。

このとき、白根岩蔵は、伊佐がおもってもみなかったほどの多額の金を餞別としてあたえた。

いまの水野道場の経営は、ゆたかではなくなっている。

阿部又七郎・神保左門など、有力な門人たちの大半が道場をやめてしまったからだ。

ゆえに岩蔵は、水野鉄斎が遺した刀剣二振を売った金を、伊佐にあたえたのである。

このことに、岩蔵は少しの迷いもなかった。

（鉄斎先生ならば、必ず、このようになされたにちがいない）

と、信じていたからだ。

はじめ、伊佐は餞別の金を強く拒み、

「このような、お金をいただきましては、もう、こちらへもどれなくなります」

「もどるときが来れば、もどるがよい。これは私が亡き鉄斎先生になりかわってしたことだ。こころよく受けてもらわぬと、鉄斎先生がお怒りになろう」

「でも……」

「よいから受けてくれ。どうしても嫌なら、また道場へもどったとき、私に返せばよいではないか」

ここまで岩蔵にいわれては、伊佐も受けぬわけにはいかなかった。

伊佐は、泣き泣き、餞別の金包みを押しいただいた。伊佐が帰ってから、岩蔵は道場へもどり、稽古をつづけた。

稽古が終り、湯殿で汗をながしつつ、

（おたかは、今夜、来てくれるだろうか……）

そのことばかりを考えつづけていると、しきりに喉が乾いてきた。

夜になった。

岩蔵は、居間と納戸の間を行ったり来たりしながら、鉄斎の遺品の整理をはじめたが、何

をしても上の空である。
おたかが、夜具をのべにあらわれた。
おたかは、無表情であった。
岩蔵は納戸にいて、おたかの気配をうかがっていた。夜具を敷きのべるや、おたかはすぐに立ち去った。
岩蔵は気落ちして、その場へ坐り込んでしまった。
（おたかも、おれと同じことを考えている……）
つまり、自分に夫や子がいるのやも知れぬと、おたかが考えていたとしても、ふしぎではない。
いずれにせよ、おたかの記憶は、まだもどらぬ。おたかも、きっと、不安なのであろう。
夜具の中へ身を横たえてからも、あれこれと、おもい惑ううち、岩蔵は目が冴えて寝つかれなくなってしまった。
（このようなおもいを毎夜毎夜、繰り返していたのでは……）
道場の経営にも、さしつかえてくる。
（このおれが、女に迷うとは、どうかしている）
飛び起きて湯殿へ行き、水でもかぶりたくなったが、
（気が狂ったと、おたかにおもわれるにちがいない）

ようやくに、おもいとどまった。
それからしばらくして、岩蔵は、浅い眠りにさそい込まれた。
さそい込まれながら、
（よし。どうにか眠れそうな……）
おもったとき、はっと意識がもどった。
つぎの間へ、だれかが入って来たのだ。
（おたかだ。おたかのほかにだれがいよう）
このことである。
この前の夜と同じように、おたかが忍んで来た。
居間と、つぎの間をへだてている襖が音もなく、一寸、二寸と開き、やがて、寝間着姿のおたかが居間へ入ってきた。
岩蔵は、そちらへ背を向け両眼を閉じていたが、動悸が激しくなってきて、その音がおたかの耳へ入りはせぬかとおもうほどであった。
襖が閉まった。
湯あがりの、おたかの匂いが寄せてくる。
おたかは、岩蔵の背後へ坐って、しばらくはうごかぬ様子だ。
たまりかねて、

「おたか……」
低く呼びかけ、振り向いた白根岩蔵の胸へ、おたかの躰が倒れ込んできた。
「どうして……なぜ、いままで、来てくれなかったのだ」
「……」
おたかはこたえぬ。
岩蔵の顔を両手にはさみ、その唇へ自分の唇を押しつけてきた。
そのまま掛け蒲団を、はね退けるようにして、おたかが夜具の中へ入ってくる。
「おたか……」
おたかは返事をするかわりに、開けた岩蔵の寝間着を引きむしるようにして、男の胸肌へ唇を押しつけた。
尚も、おたかの唇は岩蔵の胸肌から喉のあたりを這いまわった。
この前の夜には、こうした仕草をしなかったおたかなのである。
この間にも、おたかの手指はうごいていて、いつの間にか、岩蔵の帯が解かれてしまっていた。
おたかも寝間着を脱ぎ、裸体となった。
岩蔵は、呻いた。
よろこびの呻きであった。

おたかは双腕を岩蔵のくびすじへ巻きしめ、男の躰へのしかかって、烈しい動作をしめした。

翌朝、白根岩蔵が目ざめたとき、すでに、おたかはいなかった。

岩蔵は、昨夜までの苛らだちと不安を忘れてしまい、みちたりたおもいで両腕両脚を伸ばした。

それにしても、昨夜のおたかの烈しさは、まるで別の女のようであった。

（あれが、おたかなのか……それとも、女という生きものは、みな、あのようになるものか……）

昨夜の岩蔵は、おたかに翻弄されつくしたといってよい。

起きあがって湯殿へ行くと、いつものように洗面の仕度がしてある。

洗面を終ったとき、

「おはようございます」

おたかが声を投げて、台所のほうへ去った。

その声の明るさに、岩蔵は眉をひらくおもいがした。

（そうだ。おたかを妻にしてもよいではないか）

おたかの記憶がもどらぬかぎり、二人がこうなったからには夫婦になっても、文句をいわ

れる筋合いはないはずだ。
しかし、おたかの記憶がもどらなくとも、おたかの過去を知っている者は、この江戸に何人もいるにちがいない。
何となれば、おたかは江戸で暮していたからである。
おたかが朝餉の膳を運んで来たとき、
「おたかさんは、いつまでも、此処にいてくれるな？」
岩蔵は一語一語におもいをこめて、そういった。
「いつまでも、置いていただけますか？」
うるんだ上眼で岩蔵を見ながら、おたかは、
「こうなりましては、私、此処に置いていただきませんことには、寄る辺もございません」
「いてくれ。いつまでも……」
「かたじけのう存じます」
この夜ふけに、おたかはまた、岩蔵の居間へ忍んで来た。
「今朝のことは、ほんとうでございますね？」
「むろんのことだ」
「そうしていただけますなら、私、いつまでも内へ閉じこもってはいられません」
「どうするというのだ？」

「ときには、買物に外へも出てみたいと存じます」
「大丈夫か？」
「はい。この近くだけでも、よく知っておきませんことには……ね、そうでございましょう」
と、おたかは甘えるようにいう。
「それは、そうだな」
承知をしたが、おたかが外出した姿を、もしも、おたかを知っている者が通りかかって見つけたりしたら、どうなる。
いまの岩蔵は、おたかの過去を知ることが怖かった。

その日。
おたかは早速に、近くの小間物屋と八百屋へ買物に出たらしい。
夕餉のときに、おたかは、
「あの、胸がどきどきして……忠六さんに、ついて来てもらったのですけれど、足もとがたよりなくて、こんなことではいけませぬ。ほんの近くのことだけは、私が、ひとりでやらなくては……」
「むりをせずともよい。急くな。ゆっくりとするがよい。わかったな」

「はい」
「おたかさんは、この道場の門前に、行き倒れていたのだ。してみれば、この近くで、何か異常の事が起ったのではないか」
われ知らず、岩蔵の声が切迫したものとなって、
「そのことを、よくよく、考えてみなくてはならぬ。もし、外へ出て……いや、外へ出るのはかまわぬが、そのために、おたかさんに、たとえば……たとえば害を加えた者に見つけられたりしたなら、これは取り返しのつかぬことになる。たのむから、じゅうぶんに気をつけてくれ」
「先生……」
「うむ？」
「それほどまでに、私のことを心配して下さいますのか」
「当然のことではないか」
「うれしい……」
そういって岩蔵を見つめた、おたかの眼の光りは、尋常のものではなかった。
「私は……私は……」
いいさして、岩蔵は口ごもった。
おたかを妻にしたいといいたかったのだが、もしも、この女に夫や子供がいるとわかった

ときに、
（かえって、おたかを苦しませることになる）
と、おもったからである。
口ごもり、ためらって箸を手にすることも忘れている白根岩蔵を、おたかは黙って見つめていた。
（おたかも、同じおもいなのであろう）
雨音がしてきはじめた。
どうやら、梅雨に入ったらしい。
この夜、おたかは居間へ忍んで来なかった。
つぎの夜も来なかった。
だが、三日目に忍んで来た。
岩蔵の心は、落ちついてきはじめている。
おたかと自分が、こうなったことを余人は気がついているのだろうか。
下男ふたりは相変わらず忠実にはたらいてくれているし、おたかに辛くあたったりすることもない。つまり以前と、まったく変わったところが見られないということだ。
門人たちが岩蔵を見る眼も同じく変わらぬ。もっとも、門人たちは、ほとんど、おたかの姿を見る機会がないといってよかった。

ただ、気にかかるのは、鳥飼松之助のことであった。

このごろ、鳥飼松之助は水野道場へ泊らなくなった。

泊らぬが、来ることは来る。牛堀道場の稽古を早めに切りあげて立ち寄り、門人たちへ稽古をつける岩蔵を見て、それから、しばらくの間、語り合ってから帰って行く。

それは、伊佐が実弟の家へもどってからのことだ。

「泊って行かぬか」

岩蔵が、さそってみても、

「いや、そのうちに……」

あいまいに言葉を濁して、帰ってしまうが、岩蔵への態度は以前と少しも変わらぬ。

（鳥飼は、気づいているのやも知れぬ）

気づかれても、

（おれは、かまわぬ）

岩蔵は、しだいに肚をきめていたし、いまは、おたかに夢中であったから、稽古とおたか以外のことに気をとられなかった。

けれども、おたかが夜ふけに忍んで来るようになり、以前のように日と刻によっては、人が変わったようになることもなく、いそいそと岩蔵に仕え、一所懸命に世話をしてくれるようになり、岩蔵にも、ようやく周囲のことへ眼を配る余裕が生じてきた。

そうなると、
（あ……喜乃さんは、どうしているだろうか？）
おもい返してみれば、このところ、ずっと喜乃は顔を見せていない。
それは、伊佐が弟の家へ駆けつけて行った少し前からである。
このようなことは、これまでになかったことだ。
（もしや、島田九兵衛殿の身に何か起ったのではないか？）
急に、岩蔵は気がかりになって、その日の朝、道場へ出る前に島田九兵衛と喜乃にあてて手紙を書いた。
さらに、下総・佐倉の笠井次郎右衛門と大坂の柳嘉右衛門へも、無沙汰を詫び、近況を知らせる手紙をしたためた。
島田屋敷への手紙は、下男の作造へたのんだ。
それから岩蔵は、朝餉の膳に向った。
給仕をするおたかの顔が、毎日見ている岩蔵の眼にも眩しいほどの色気をたたえてきている。
おもわず、岩蔵が眼を伏せると、おたかが、
「先生、どうなさいました？」
「う……いや、おたかさんが、あまり、きれいに見えたものだから……」

「まあ……」
顔を赤らめ、俯いたままでいる岩蔵を、おたかは凝っと見まもって、
「先生。私のことを、これからは、おたかと呼び捨てにして下さいまし。お願いでございます」
「だが、それは……」
「いえ。そうして下さいまし。さ、おたかと、よんで」

下男の作造は、白根岩蔵が午前の稽古をしている最中に帰って来た。
作造が、道場の片隅へあらわれたのを見たとき、岩蔵は、島田屋敷に何か異常の事態が起っていることを直感した。
岩蔵は、作造に近寄り、
「どうした？」
小声で尋ねた。
「それが、あの……」
作造は、道場の外へ岩蔵をいざなうかたちになり、渡り廊下のところまで来ると、
「先生。大変なことに……」
「島田九兵衛殿の身に、何かあったのだな？」

岩蔵がそういったのは、この前の異変を知っていたからであるが、作造はかぶりを振って、
「いえ、ちがいます。お喜乃さんが……」
「何……」
「し、死にそうだと申します」
「死ぬ……ばかなことを……」
「いえ、前から寝込んでいたらしいのでございますよ。道理で、ちかごろは、こちらへも見えないとおもっておりました」
「さ、さほどに悪いのか？」
「私は、見てきたわけではございませんが、島田様の番頭さんの、駒次郎さんというお人が、そのように……」
駒次郎なら、近くの千駄木の自宅から島田屋敷へ通勤をしている老番頭だ。
「で、どこが悪いというのだ？」
「番頭さんが申しますのは、躰のほうぼうがいけなくなっていたのを、お喜乃さんは我慢をして、気ぶりにも見せなかったのだそうで」
「ふうむ」
岩蔵は、全身の血が引いて行くようなおもいがした。
「ですから、倒れたときには、もう手遅れになっていたと申します」

「そ、そうか……」
「島田様でも、今日明日のうちに、先生のところへ知らせるおつもりだったそうでございますよ」
「ともあれ、私は、すぐに行く。おたかさんへ、このことをはなし、仕度をするようにいっておいてくれ」
「承知いたしました。先生、お急ぎならば、駕籠をたのんでおきましょうか？」
「そうしてくれ」
道場へ引き返した岩蔵は、自分の恩人ともいうべき人が重病にかかったので、何としても駆けつけて見舞わねばならぬことを告げ、
「あとの稽古は、みなが心を合わせて、つづけてもらいたい」
いい置いて母屋へ行き、湯殿の水を浴びているうちに、おたかが肌着やら下着を替えてくれた。
（ああ……何とか、その病が癒らぬものか……）
雨は降っていなかったが、空は灰色の厚い雲におおわれている。少し肌寒かった。
居間へ入った岩蔵の着替えを手つだいつつ、おたかが、
「とんだことになってしまいまして……」
「うむ……もしやすると、今夜は帰れぬことになるやも知れぬ。よいか、じゅうぶんに気を

つけてくれ」

「大丈夫でございます」

おたかの声は、しっかりとしている。

幼少のころに母を亡くしている白根岩蔵は、島田屋敷にいたときの、喜乃の親切なはからいや、こまごまと身のまわりの世話をしてくれたことを忘れるものではなかった。

（まるで、おれの母のような人だ）

おもったことも、度び度びであった。

町駕籠が来た。

「後をたのむぞ」

裏手の通用口へ見送りに出た忠六と作造、おたかへ声を投げて、岩蔵は駕籠へ乗った。

島田屋敷へ到着すると、番頭・駒次郎があらわれ、

「これはこれは先生、よう、おいで下さいました」

「さほどに、いけないのですか？」

「主人が諸方を駆けまわり、医薬の手をつくしましたが……」

いいさして、駒次郎はくびを振って見せた。

島田九兵衛ほどの人物が諸方を駆けまわって手をつくした、というのだから、金を惜しまずにあらゆることをしたのであろう。

九兵衛は用事で他行中であったが、喜乃の病状が急変したときは、すぐに知らせを出すように、行先をいちいち告げてあるそうな。

「さしせまって急に、ということはありますまいが……」

「喜乃さんは？」

「いまは、よく眠っているようでございますよ」

駒次郎は、岩蔵を奥へ案内した。

喜乃の病間は、島田九兵衛の寝間のとなりに、もうけられている。

夜半、喜乃に万一のことがあったときは、九兵衛みずからが飛び起きて、介抱にあたるつもりらしい。

医師も三人交替で島田屋敷に詰め切っているとかで、その中の一人は幕府の表御番医だそうな。

このことをもってしても、喜乃という女が、いかに、島田九兵衛の深い信頼を受けているかが知れようというものだ。

喜乃の病間には、坊主頭の、立派な風采の老医師が詰めていた。

喜乃は、昏々と眠っている。

「このお方が、大久保八郎先生でございます」

と、駒次郎が岩蔵を、その医師へ引き合わせた。

この医師は表御番医ではなく、島田九兵衛が懇意にしている山口真庵という町医者であったが、知る人ぞ知る名医だそうな。

山口真庵によると、喜乃の躰は、

「長年かかって痛めつけたものゆえ、手のほどこしようがなく、これまで、その症状を余人にさとられなかった、このひとの気力には、つくづく、おどろいております」

とのことである。

一刻（二時間）ほど、岩蔵が喜乃の枕頭に坐っているうちに、喜乃が、ふっと眼をひらいた。

「喜乃さん、私だ。わかりますか?」

岩蔵が蒲団の中へ手を差し入れ、喜乃の手を握りしめると、喜乃はわかったらしく、岩蔵をひたと見つめ、うなずいて見せた。

言葉はない。

はなしをする気力を、

（喜乃さんは、失っている）

と、岩蔵は看た。

喜乃は、岩蔵へ向って微笑をし、もう一度うなずいた。

岩蔵が握りしめている喜乃の手に、微かなちからが加わるのを、岩蔵は感じた。

喜乃の手にこもったちからが、すっと消えた。
喜乃は、また両眼を閉ざした。
岩蔵が、はっとして、山口真庵を見やると、
「いや、大丈夫。急に、どうということはありませぬよ」
「さようですか……」
灰色の、喜乃の顔は、かつて岩蔵が見たこともなかったものだ。
この島田屋敷にいたときも、喜乃の血色が悪いとおもったことは一度もない。血色がよいとはいえなかったけれども、当時の四十をこえた女としては、気にならなかったし、何よりも喜乃は骨身を惜しまずに立ちはたらいていたのだから、岩蔵のみか島田九兵衛ほどの人も、その躰の中に、これほどの病根が巣くっていようとは、おもってもみなかった。
「今日は、何事もござるまい」
山口真庵が受け合ってくれたので、白根岩蔵は、ひとまず引きあげることにした。
むろんのことに明日も明後日も此処へ来るつもりだが、それにはそれだけのことをしておかねばならぬ。
待たせておいた駕籠へ乗り、岩蔵は牛堀九万之助の道場へ向った。
すでに、夕闇がただよっている。
浅草・元鳥越町の牛堀道場へ駕籠がついたとき、夕闇は夜の闇に変わりつつあった。

牛堀道場の稽古は終っていた。
鳥飼松之助も稽古を終え、帰ってしまっている。
牛堀九万之助は、こころよく、岩蔵を迎え入れた。
牛堀九万之助は、岩蔵から事情を聞くや、すぐさま、鳥飼松之助を水野道場へ派遣すると共に、牛堀道場の高弟を交替で差し向けることを承知してくれた。
「おぬしは、こころゆくまで、看病をするがよい」
「牛堀先生。かたじけのうございます」
喜乃については、岩蔵の口から聞き知っている牛堀九万之助であった。
「ま、一つ飲って行くがよい」
九万之助にすすめられ、老僕の権兵衛が酒肴の膳を運んで来たとき、岩蔵は急に空腹をおぼえた。
むりもない。今日の朝餉をとってから、何も口へは入れていなかったのである。
いつものような、権兵衛の手料理で酒をのんだ後で、卵をかけまわした熱い粥が出た。
それを二杯食べてから、岩蔵は帰途についた。
駕籠は帰してしまってある。
岩蔵は、あたりの闇に気を配りながらも、道を急いだ。
こうなると、にわかに水野道場のことが気になり出した。

自分の留守中に、何か変事でも起ってはいないか。おたかの身にも異変があったのではないか……。

以前、島田屋敷へ行った帰途、岩蔵は不忍池のほとりで、得体の知れぬ曲者どもに襲われたことがある。彼らの正体は知れぬが、いずれにせよ、当日の岩蔵が島田屋敷へ出向いたことを知っていたのだ。知っていたからこそ、岩蔵の帰途を襲ったのである。それをおもうと、今日の岩蔵の行動が何処かで見張られているのやも知れなかった。

ゆえに、牛堀九万之助にすすめられた酒も少量にとどめておいたし、九万之助もまた、強いてすすめなかった。

それだけに、水野道場へ帰り着き、裏の通用口の門を叩いた岩蔵は、

「どなたでございますか？」

問いかけるおたかの声を耳にしたときは、

（何事もなかったらしい。よかった、よかった……）

ほっとして、

「私だ。いま帰った」

その声も弾んだ。

「あ、先生……」

おたかが門の潜り戸を開けると、中へ入った岩蔵が、いきなりおたかを抱きしめ、

「無事だったなあ」
「はい。何事もございませんでした」
「よかった。おたかさんのことが気にかかって……」
「私も、先生のことばかり、いままで案じておりました」
岩蔵が帰った気配に、下男たちが中庭へ出て来たらしい。
それと気づいて、二人は身を離した。

翌日。
白根岩蔵は早朝から道場へ出て、門人たちへ稽古をつけていると、鳥飼松之助が、
「牛堀先生からうかがいました」
駆けつけて来た。
つづいて、牛堀九万之助の高弟・野村恒蔵があらわれ、午後からの稽古を引き受けてくれることになった。
岩蔵は、二人に厚く礼をのべ、昼になると母屋へ引きあげ、昼餉をとり、着替えにかかった。
「今日も、病人しだいのことだが、帰るにしても遅くなろう」
という岩蔵の前へまわって来たおたかが背伸びをしたかとおもうと、岩蔵の唇を素早く吸

った。
「あ……」
「ごめんなさいまし」
「ばか」
今度は岩蔵が、おたかを引き寄せ、唇を押しつけた。
岩蔵は、筆舌につくせぬほどの幸福感を味わった。
（おれはどうかしている。喜乃さんの命が危いというのに……）
すぐに反省をしたが、それとこれとは別のものなのだから、どうしようもない。
そこへ鳥飼松之助がやって来て、
「当分、私は道場へ泊り込むつもりです。いや、御心配なく、先ごろまで、あなたがしていたように道場の見所（けんぞ）で寝ます」
「ありがたいが、それでは困る。此処へ寝てもらいたい」
「ともかくも、牛堀先生にも、そのように申しあげておきましたゆえ、心おきなく、看病をしてあげて下さい」
「ありがとう。すまぬな」
「いえ……」
たがいにかわす言葉は少なかったが、それも二人が深い信頼によってむすばれているから

であろう。

鳥飼が、たとえ母屋の、この部屋へ寝泊りをしたところで、おたかと鳥飼の間にどのような事態が生じるやも知れぬ、などという不安は岩蔵にいささかもなかった。

この日も岩蔵は町駕籠で島田屋敷へ向い、到着するや、駕籠を帰した。

帰りが夜になって、またも曲者どもに襲われても、

（かまわぬ）

と、岩蔵は決意している。

そのかわりに、この日から例の八角棒を携えることにした。

今日も、喜乃は深い眠りに落ちていたが、しばらくすると眼を開けて岩蔵がいることに気づいた。

すると、喜乃は、岩蔵に向って両手を合わせ、二度三度と、うなずいて見せる。そして昨日と同じように一語も発しなかった。

やがてまた、喜乃は眠りに落ちて行った。

そこへ、島田九兵衛があらわれ、岩蔵を目顔でまねいた。

島田九兵衛は、白根岩蔵を居間へいざなった。

無沙汰を詫びる岩蔵へ、

「何をいわれる。いまのあなたは何よりも、道場のことにちからをつくさねばならぬときじ

や。他のことにはおかまいなさるな」

九兵衛は、やや厳しい声でいった。

「喜乃も、そちらへは決して知らせぬようにと申した。それもやはり、いまのあなたにとって何が一番大事かを、わきまえていたからでありましょうよ」

岩蔵が、水野道場の主となってからは、九兵衛の岩蔵へ対する言葉づかいが、親しげに変わってきたようにおもわれる。

島田屋敷にいたころの岩蔵を「大久保どの」とよんでいた九兵衛が、ちかごろは「あなた」とよぶ。

「こうして、毎日、見舞いに来て下さることはうれしいが、それでは却って喜乃の心を無にすることになりましょう」

「なれど……」

「人の死は、めずらしいことでも何でもない」

「そのようにいわれましても、私の気がすみませぬ」

先刻、喜乃が岩蔵に向って両手を合わせて見せたのは、

「このようにたのみますゆえ、早く道場へ帰り、門人衆に稽古をつけてあげて下され」

との意味が、こめられていたのであろうか。

そこへ、若い女中が茶菓を運んで来た。

九兵衛は岩蔵へもすすめ、自分も茶をのみ、落雁をつまんだ。
しばらくの間、二人は沈黙したまま、茶をのんだ。
今日も雨にならず、曇り空が幾分、明るみをたたえている。
「ごらんのように……」
と、島田九兵衛の声が、おだやかになって、
「喜乃の余命も、あと、五日か六日か……あるいは、もっと早くなるやも知れぬ」
「これまで、少しも気づきませなんだ。われながら、それを……」
「いや、それは、私も同様のことじゃ。島田九兵衛ともあろうものが、気振りにもわからなんだ。不明のいたりでござった」
そういった九兵衛は銀煙管へ煙草をつめながら、
「あの、喜乃と申す女は、男もおよばぬところがあって……というても、私は喜乃の身性について、くわしいことは何も知りませぬ」
「はあ……」
意外にもおもえるが、この九兵衛という老人が自分にしてくれたことをおもえば、当然という気もする。
岩蔵とて九兵衛に、自分の生い立ちを語ったことがないし、九兵衛も尋ねようとはしなかった。

煙草のけむりを吐いた島田九兵衛が、
「私が喜乃を知ったのは、さよう、七、八年前のことになりましょうかな。そのとき喜乃は、木挽町にいまもある武蔵屋という料理屋の、座敷女中をしておりましてな」
「はあ……」
はじめて耳にする九兵衛と喜乃の関係であった。
岩蔵は茶碗を置き、身を乗り出した。
「その武蔵屋へ度び度び行くうち、喜乃のはたらきぶりが目にとまって、はなれなくなった。どこかにさびしげなところはあっても、目立たぬようにする気ばたらき、陰へまわっての骨身を惜しまぬふるまいに、このような女に身のまわりを世話してもらったなら、さぞ便利であろうと、こうおもい、ついに武蔵屋の主人にたのみ込み、手許へ引き取り、はたらいてもらうようになったのでござるよ」
「それで？」
「いや、それだけ。その後の喜乃については、当屋敷におられたこともあるあなたも、よく御存知のはずじゃ」
「はい」
「ただ一つ……」
いいさして、島田九兵衛が黙り込んでしまった。

「……？」

夏座敷に変わった居間の縁側の戸は開けはなたれ、そこから涼しい微風がながれ込んでくる。

「どうなさいました？」

「むうん……」

と、九兵衛は微かに唸ったが、

「このことは、だれにもいうまいとおもうていたのじゃが……」

「と申しますのは？」

「ま、あなたの耳へだけは入れておいてもかまわぬだろう。喜乃はあなたのことを、自分の息子のように考えていたらしいゆえ……」

「さ、さようでしたか……」

「四年ほど前の寒い冬の雪ふる夜であったが、この座敷で、喜乃が、私の夕餉の給仕をしていた折に、よほど、何かおもうことあって、たまりかね、胸の内に隠しておいたことを、私に洩らさずにはいられなくなってきたのであろうか……」

岩蔵は、生唾をのみ込んだ。

「そのとき私は、あの気丈な女が、目に熱いものをたたえたのを、はじめて見ました」

「……」

九兵衛は、煙管へ新につめた煙草に、火をつけるのも忘れたようである。
「いまも申したとおり、喜乃の身性については、くわしく知らぬが……喜乃は、一度、さる人と夫婦になり、子をな……男の子をひとり、産んだそうにござる」
「……」
「その相手と死別したのか、または離別したのか、私は知らぬし、喜乃も語ろうとはしなかったが、ただ……」
「ただ……？」
「産んだばかりの子を抱え、ひとりきりになった喜乃は、申すまでもなく、いまの喜乃ではない。二十余年も前の喜乃だとおもっていただきたい」
「はい」
「よほどに、苦しかったのであろう。ずいぶんと悩みもしたのであろう。私は、おそらく、二十余年前の喜乃には、この江戸に知る人もなく、また寄る辺もなかったのであろうとおもう」
まるで、ひとりごとのように語る島田九兵衛は、いつもより、むしろ饒舌であった。
それが、白根岩蔵にはもどかしく、
「で、その男の子は、どうなりましたので？」
「捨てたそうな」

「えっ……」
「よいか、大久保八郎殿。二十余年前の喜乃でござるぞ。まだ若かった喜乃じゃ。いまの喜乃ではない、おわかりじゃな」
「は、はい」
「女という生きものは、一生のうちに何度も変わる。何か事ある度びに変わって行き、ついには別人になってしまうことも少なくない。それは男の比ではない」
「……」
「喜乃は、そのとき、雪ふる夜に、胸の底をしめつけてくる悲しみに堪えかねたのであろう。生まれて間もない男の子を捨てたことを、だれかに打ちあけなくてはすまぬ心もちになってしまったのであろうよ」
「……」
「二十余年前の、わが子を捨てたときも、雪の夜であったそうな」
「いまだに、その子とは……？」
「会わぬ。知らぬ」
「何処へ捨てたので？」
「新宿の宿場からも程近い、青梅街道の成子坂であったそうな」
「げえっ……」

岩蔵は、愕然となった。
「どうなされた?」
「う……」
声が出ない。
そのただならぬ岩蔵の様子に、島田九兵衛もおどろいたらしい。
「これ……これ、どうなされた。しっかりなされ」
立ちあがって来て、顔面蒼白となった岩蔵の肩を抱きかかえるようにして、
「まさかに……まさかに、その捨てられた子とは、あなたではあるまいな?」
「いえ……ち、ちがいます」
この前に岩蔵が、自分の過去を島田九兵衛に打ちあけたとき、角筈の日影一念と、その道場については語ったが、成子雪丸についてはくわしく語らなかった。若い門人と二人で、
「一念先生に仕えておりました」
とのみ語り、秘伝書を盗んで逃げたときも、雪丸の名は出さなかった。これは別にわけあってのことではない。岩蔵は自分の恥多い告白を長々と語りのべる性格ではない。考えに考えたあげく、要点のみを島田九兵衛に打ちあけ、許しをこうたのである。
そして、水野道場へ移ってから、岩蔵は喜乃にたのみ、日影道場の成子雪丸へ手紙を届けてもらった。

これを、喜乃は何とおもったろう。

喜乃が訪ねたとき、雪丸は名主屋敷へ行っていたので、妻のさとがすぐさま、迎えに行こうとしたのを、喜乃は押しとどめ、

「この御手紙を、成子雪丸さまへお見せ下されば、すべて、おわかりになるようになっておりますそうで」

手紙をわたし、早々に立ち去ったという。

しかし喜乃は、岩蔵から、

「この手紙を、日影道場の成子雪丸どのへ……」

と、たのまれたとき、何かを感じたはずだ。

（喜乃さんほどの女が、はっとおもわぬはずはない）

二十年ほど前の、雪の日に、成子坂へ捨て子があったというのは、雪丸をおいてほかにない。

これを拾いあげ、育てあげた名主の本郷庄左衛門が、彼に、

〔成子雪丸〕

の名をあたえたのは、別に意図があったわけではない。

ないが、しかし、この名前を喜乃が耳にしたならば、

（きっと、むかしのことに、おもい当ったはずだ）

と、岩蔵はおもった。

（なれど、あの折、私から成子雪丸の名前を聞いたとき、喜乃さんの様子には、少しも変わったところが見えなかった……ように、おもう）

のである。

いま、あらためて、そのときのことを島田九兵衛にいうと、

「ははあ……」

九兵衛も、目をみはって、

「そのようなことがあったのか……」

「では、喜乃さんは何も？」

「いつものことじゃ。よけいなことは一言も申さぬ女で……」

「このことを、いかが、おもわれます？」

「ふうむ……」

「私は、間違いないと存じます」

「成子、雪丸どのとなあ……」

「はい」

「いや、おそらく、そのお人が喜乃の子であろう」

その後、成子雪丸は水野道場を訪れているし、そのことを伊佐の口から喜乃は聞いたろう。

「なれど、気振りにも見せなんだわえ」
茫然とつぶやく島田九兵衛へ、
「ですが、喜乃さんの身が、こうなっては、雪丸どのの耳へも……」
「むずかしい」
「え……？」
「生まれて間もなく捨てられた子が、二十余年も会わなんだ母を、母とおもえようか」
九兵衛の声には、沈痛のひびきがこもっている。
「喜乃さんは、何と、おもっているのでありましょうか？」
「わからぬ。わかるはずもない」
むかし、成子雪丸と共に日影道場にいたころ、岩蔵が、
「雪丸。産みの母や父に、会いたいとはおもわぬか。両親の消息を知りたくはないか？」
尋ねたことがある。
すると雪丸は、明快に、
「おもいません」
「ほんとうか？」
「私の両親は、名主様の本郷庄左衛門様をはじめ、この角筈村の人びと。たとえば岩蔵どの。あなたは私の兄のようなものです。いや、兄だ」

そういわれ、

「何やら、こそばゆいな」

いいつつも、うれしかった記憶が岩蔵にある。

「人の生い立ちには、いろいろとあるでしょうが、私は名主様のおかげで、のびのびと育てていただきました。私を捨てた両親をうらみもしませぬが、別に慕う心もありません」

成子雪丸には、そうした、一種ふしぎな性格がある。

自分の宿命に、決して逆らおうとはせぬ。それは、かの秘伝書をめぐる一件の折の、彼の言動ひとつをとってみても、よくわかろうというものだ。

「むずかしい。これは、むずかしいのう」

島田九兵衛と岩蔵は、喜乃の病間へ向った。

今日の医師は、これも町医ながら名の高い野田宗立であった。

喜乃は、よく眠っている。

呼吸は、いくぶん荒いようだが、窶れてはいても安らかな寝顔である。

九兵衛と岩蔵は、顔を見合わせた。

野田宗立がいうには、

「できうるかぎりの手をつくしましたなれど、あと三日か四日……もしやすると、明日にも……」

喜乃の命は絶えるであろうとのことだ。

「知らせるところあらば、いまのうちがよろしゅうござる」

と、宗立医師はいったが、喜乃の寝顔には、淡いながらも血の色が浮いていて、そのようには感じられなかった。

島田九兵衛と白根岩蔵は、ふたたび、九兵衛の居間へもどった。

「なれど……なれど、われらがそれと知ったからには、このまま、打ち捨ててよいものか、どうか……」

物事を決断するに、おもい迷ったことがない九兵衛が、岩蔵へ、

「のう、大久保どの。どうしたらよいか……」

「いま、考えたのですが……」

「おお、いってみなさい」

「それとなく、二人を会わせたなら、いかがでありましょうか」

「どうするのじゃ？」

「私が雪丸どのを迎えに行き、此処へ連れて来ます」

「だが、それも、とってつけたようで、妙なものではあるまいか」

「はあ……」

息を引いて考え沈んだ岩蔵へ、今度は島田九兵衛が、

「よし。私が、その雪丸どののことをあなたから聞き、ぜひとも会うてみたい。此処へお連れ願いたいと、こういってみては？」
「あ……それがよい。そうします」
「そして、うまく、喜乃の病間へ雪丸どのを入れる。それは、私が考えておこう」
「はい」
「なれど、あなたも私も、よけいなことは一言も口にのぼせてはならぬ」
「わかりました。では、これから行ってまいります」
「夜に入って、此処へ連れて来るのは妙なものじゃ。明日の朝、迎えに行って下され。なに、まだまだ五日や六日は、喜乃も大丈夫じゃ」
岩蔵も、そうおもった。
それから間もなく、岩蔵は島田屋敷を辞去した。
まだ、空は明るい。梅雨に入ったというのに、雨が降りそうで、なかなか降らぬ。
布に包んだ例の八角棒を小脇にして、岩蔵は水野道場へ急いだ。
上野から東神田まで岩蔵がもどって来たとき、初夏の夕闇も、ようやくに濃くなった。
三島町の商家の路地から、黒い蝙蝠が数匹、はたはたと飛んで出て道を横切り、向う側の路地の中へ消えた。
その蝙蝠の翼の音に、岩蔵は何か不吉な予感がして、おもわず足を停めた。

そのときである。
帰路を急ぐ人びとがあわただしく行き交う道を、岩蔵の背後へ駆け寄って来た男が、
「あっ、大久保先生……」
声をかけた。
見ると、島田屋敷の下男のひとりではないか。
「どうした？」
「先生がお帰りになって間もなく、お喜乃さんが……」
「何……」
「い、息を引きとってしまいました」

梅雨空

島田九兵衛の手によって、喜乃の葬儀は、しめやかに取りおこなわれた。

白根岩蔵は、伊佐を連れて葬儀に参列をしたが、いまさらに瞠目したのは、喜乃の死をいたむ人びとが多かったことである。

すでにのべたごとく、喜乃は、島田九兵衛にも身性を洩らさなかったほどであるから、あつまった身寄りの者は一人もいない。

けれども、たとえば喜乃が九兵衛の許へくるまえにはたらいていた木挽町の料理屋・武蔵屋の主人夫婦をはじめ、喜乃を知っている奉公人が駆けつけて来たし、島田屋敷の奉公人はむろんのことで、白根岩蔵が見たこともない老若男女が多勢あつまり、心から喜乃の急死をいたむありさまを、岩蔵は、はっきりと見た。

これは、武蔵屋から島田九兵衛邸へ移ってはたらくうち、喜乃を知った人びとといってよいが、そうした人びとは、生前の喜乃の人柄に深く胸をうたれていたにちがいない。

ともかくも、武蔵屋の古い客が、喜乃の死を聞いて、十人ほどもあつまったのには、さすがの島田九兵衛も泪ぐみ、

「いまさらに、喜乃を死なせたことが悔まれる。私としたことが、もっと早く気をつけていれば、このようなことにならなかったものを……」

岩蔵のみへ、めずらしく愚痴めいたことを哀しげに洩らしたものだ。

ほんらいならば、この葬儀の喪主として、成子雪丸の姿を見なくてはならない。

島田九兵衛は、通夜の夜ふけに、岩蔵へ向って、

「かくなったからには、喜乃と雪丸どののことについて、われら二人、胸の内にしまったままでおきましょうな」

そういった。

岩蔵は、黙って、うなずいた。

「二人を、母と子として会わせることができなかったのは、何やら、罪をおかしたようなおもいがします」

と、九兵衛。

「いや、私の口が足りませぬでした。一度でも、雪丸どのの素性を申しあげていたら……」

「世の中とは、得てして、こうしたものでござるなあ……」

「ですが、雪丸どのは知らずとも、喜乃さんは、私の手紙を届けに行ったとき、それと気づ

いていたとおもいます」
「その折、雪丸どののお内儀が、近くにいた雪丸どのを呼びに行こうとしたそうな」
「はい。それを喜乃さんは断わって、早々に帰った、と聞きました」
「ふうむ……」
島田九兵衛は、しばし瞑目していたが、ややあって、こういった。
「してみると、これは、やはり……やはり、母子の名乗りをあげなんだほうが、よかったのやも知れぬ」
喜乃の死は、白根岩蔵の胸の底に、重いものを残した。
喜乃の身性は、どのようにも推測できようが、自分などが、いかに想像をはたらかせてみても、
（むだなことだ。この世の中には、おれなどの知らぬ世界が、いくらもあるのだから……）
おもわざるを得ない。
成子雪丸は、岩蔵の身が落ちつき、道場も無事なのを知ってから、姿を見せぬ。
雪丸も、日影道場の主ゆえ、それは当然のことで、岩蔵も連日、たゆむことなく道場へ出て、門人たちへ稽古をつけたし、ときには牛堀道場へ出かけ、牛堀九万之助によって、自分の稽古を受けるのである。
鳥飼松之助は以前ほどではないが、時折、道場へ立ち寄り、様子を見に来てくれる。しか

し、鳥飼は決して泊ろうとはしなくなった。

（鳥飼は、おれとおたかのことに気づいているらしい）

そういえば、二人の下男も岩蔵とおたかの秘めごとを察しているかのようであった。

おもてには出さぬが、忠六や作造の、おたかへ対する言葉づかいや態度が、それとなく変わってきたからである。

つまり、二人の下男はおたかを重くみるようになったわけだが、おたかは少しも高ぶることなく、行き倒れていた自分を救ってくれた人たち、という心がまえをくずすことがない。

ゆえに忠六や作造は、悪い気持ちがせぬ。

したがって彼らは、何かにつけて、おたかをいたわり、岩蔵との間を好意の目で見まもっているようだ。

阿部又七郎や神保左門一味が蠢動している気配もなかった。

阿部と神保が、白根岩蔵へ試合をいどみ、二人ともに負けてしまったことは、しだいに、江戸の剣術界へひろまりつつあるようだ。

あれだけの門人たちの前でおこなわれた試合なのだから、うわさが伝播するのを、ふせぎようがない。

「ちかごろ、水野道場と、おぬしの評判がよろしいようだ」

と、牛堀九万之助が岩蔵にいったこともある。

喜乃が死去して半月もすると、岩蔵の生活は、すっかり落ちついた。
成子雪丸との文通は絶やさぬし、雪丸は以前から、時折、季節の野菜などを届けてよこす。その使いは若い門人であったり、妻のさとであったりする。
さとは、おたかとも打ちとけたようだ。
岩蔵は、島田九兵衛との約束をまもり、喜乃のことを雪丸夫婦には知らせていない。
はじめは心苦しかったが、いまでは、
（これでよいのだ）
と、おもうようになってきつつある。

来る日も来る日も、雨であった。
梅雨どきになると、床下から立ちのぼってくる瘴気には堪えがたいものがある。
家の中も、食物も、この長雨に腐りかけてくるようなおもいがする。
けれども、白根岩蔵は元気一杯に日々をすごしていた。
おたかは、三日か四日おきに、夜ふけの居間へ忍んで来る。来るが、そのまま居間で朝を迎えたことはない。
岩蔵が目ざめるとき、すでに、おたかは台所にいて、朝の仕度に立ちはたらいている。
正式の夫婦になったわけではないのだから、おたかが、このように、きちんとけじめをま

もった態度をくずさぬのは、岩蔵には物足りなかったが、下男たちには好感をもたれているに相違ない。

岩蔵としては、おたかに、

「自分の妻になってくれ」

と、何度も口に出かかったのを、懸命にこらえているのだ。

依然として、おたかの記憶はもどらぬが、ちかごろでは、近所での用事は、ほとんど一人ですませるようになった。

「梅雨どきですから傘をさして、顔が隠れますので、気が楽なのでございますよ」

おたかは、むしろ晴れ晴れとした笑顔になり、

「でも先生、だんだんと、外へ出ても怖くなくなりました」

「そうか。何にせよ、一日も早く、以前のことを思い出せるようにならなくては……」

半分は不安だが、半分は岩蔵の本心であった。

このままで、二人の関係がいつまでもつづくことに、いまの岩蔵は堪えられなくなってきつつある。

ひたむきな岩蔵の愛撫にこたえつつ、おたかは、

「先生は、ほんとうによいお方……」

あえぎの中で、

「よいお方、よいお方……」
と、口走るようになった。
そして、ときには狂ったようになり、岩蔵の躰へのしかかってくる。そうしたときの、おたかの情熱の烈しさは筆や口にはあらわせぬもので、このごろでは、道場へ出たときなど迂闊に肌ぬぎにもなれない。
いつであったか、道場で、稽古着をぬいで汗をぬぐっているとき、傍にいた門人のひとりが、
「先生。どうなされましたか？」
岩蔵の胸肌の、肩のつけ根に近いあたりを指さした。
そこには、おたかの歯形が残っていた。
それも、尋常のものではない。血がにじんでいた。
「いや、何でもない」
さあらぬ体で、岩蔵は稽古着を着たが、内心では冷汗をかいたものだ。
そのうちに、岩蔵は我慢ができなくなってきた。
ついに或夜、岩蔵は、
「おたか。私の妻になってくれぬか」
切り出したのである。

白根岩蔵の求婚をうけたとき、おたかは沈黙した。
（むりもない……）
と、岩蔵はおもった。
もしも、岩蔵の妻になった後で、おたかの過去がわかり、その夫や子供があらわれたとしたらどうであろう。
これは、大変なことになるにきまっている。
それがわからぬ岩蔵ではなかったが、ついに、こらえきれず、求婚をしてしまったのだ。
それだけに、押し黙って、うつむいているおたかを見ると岩蔵はたまらなくなり、
「いや、よいのだ」
「……」
「ともかくも、私の気持ちだけは、おたかの耳へ入れておきたかった」
このごろの岩蔵は、前に「おたかさん」とよんでいたのが、いつしか「おたか」とよぶようになっている。
それだけ、二人の仲は深くなってきたのであろうか。
「私の胸の内を、一度は……一度は、お前につたえておきたかった。それでないと、何やら、お前をもてあそんでいるような……」
「先生。そのようなことを……」

と、おたかが叫ぶように、
「そのようなことを二度と、おっしゃらないで下さいまし」
おたかの声も態度も、急に緊迫し、異常なものを岩蔵は感じたが、何故かわからぬ。
「先生、でも……うれしゅうございます。ほんとうに、私を、そのように？」
「おもっている。妻にしたい。このままでいたくはない」
「うれしい……」
おたかが、まるで気が狂ったように岩蔵へしがみつき、おそろしいほどのちからをこめて岩蔵の唇を吸った。吸いつづけた。
その翌日。
おたかは近所へ買物に出かけたが、いつになく、帰りが遅かった。
岩蔵は道場の稽古に熱中していて気づかなかったが、二人の下男は、
「遅いなあ、おたかさん……」
「何か、妙なことでもあったのじゃあないか」
「おれが見て来る」
「そうしてくれ」
そこで、作造が外へ出て、近辺を探しまわることになった。
家事に必要な買物なら、およそ、店は知れている。

帰って来た作造が忠六に語ったところによれば、たしかに、おたかは八百屋と小間物屋で買物をすませていたが、

「もう、ずっと前に、お帰りになりましたよ」

それぞれの店の者が、作造にいったそうである。

作造がもどったとき、おたかは、まだ帰っていなかった。

「どうも、おかしいな」

「こりゃあ、きっと何かあったのですよ」

「ともかくも、先生に申しあげておこうか？」

「それがいい。そうしましょう」

忠六と作造が、母屋の台所で語り合っていると、急に台所の戸が開いた。

「あれっ、帰って来た。忠六さん、おたかさんが帰って来ましたよ」

「すみません。遅くなってしまいました」

「そりゃあいいが、心配をしてしまったよ」

「いま、近くを見てまわってきたところだ」

「相すみません。迷子になってしまったのです」

「何だって？」

「このあたりの町の様子が、めずらしいものですから、ついつい足をのばして……そのうち

に、道に迷ってしまって……」
「なあんだい。それならよかった、ねえ忠六さん」
「うむ、うむ。なあ、作造どん。このことは先生に申しあげないでおこう。よけいな心配をおかけ申しちゃあなるまい」
「あ、そのほうがいい。私もそうおもいます」
「ありがとう存じます。それほどに、私のことを心配していただいて……」
「なあに、いまのおたかさんは、この道場に、なくてはならないお人だからね」
と、忠六がいうのへ、おたかは無言で深く頭を下げた。
この日も、終日、雨がふりけむっていた。
その翌々日、おたかは、またも買物に出たが、この日も、いつもよりは遅く帰って来た。
しかし、一昨日ほどではない。
忠六も作造も、ほかの用事にはたらいていて、おたかが遅く帰って来たのに気づかなかったようだ。また気づいたとしても、今度は気にとめなかったろう。
台所の戸を、そっと開け、あたりの気配をうかがってから、おたかは中へ入り、すぼめた傘を戸口へ立てかけた。
そして、買物の包みを投げ出すように板の間へ置き、そこへ腰をおろした。
台所は薄暗く、雨音がこもっている。

おたかは、空間の一点へ眼を据えて、しばらくの間は身じろぎもしなくなった。
その様子が、何か異常であった。
たとえば忠六が、このときのおたかを見たら、
（いつものおたかさんとはちがう）
きっと、そう感じたにちがいない。
おたかは唇をかみしめ、台所の竈のあたりを、にらむがごとく見つめたままだ。
しばらくして、おたかが、深い深いためいきを吐いた。
そして、ようやく腰をあげた。
のろのろと、別人のような鈍重さで、おたかは板の間へあがり、また、ためいきをついたのである。
この夜。
おたかは、岩蔵の居間へ忍んで来なかった。
しかし、夕餉の給仕をするとき、岩蔵は、おたかの蒼ざめた顔に気づいて、
「どうかしたのか？」
「いえ、別に……」
「隠すな、顔色がよくない」
「はあ……」

「どうした？」
「あの……」
いいさして、おたかが何やらいいかけたが、また押し黙った。
「躰のぐあいでも悪いのか？」
「……」
「遠慮するな。どうしたのだ？」
「は……少し、頭痛が……」
「それはいかぬな」
おたかが痛いというからには、よほどに痛いにちがいない。
岩蔵は、夕餉もそこそこにして、
「さ、早く、やすむがよい。そうしてくれ、たのむ」
岩蔵の夜具の仕度をしてから、おたかが自室へ引き取った後、岩蔵は納戸（なんど）へ行き、常備の薬はないかとおもってしらべたがない。
岩蔵は、おたかの部屋へ行ってみた。
おたかは夜具も敷かぬまま、坐（すわ）り込んでいる。
「何故、やすまぬのだ？」
「は、いま……」

「ここには、薬がない。明日、医者に来てもらおう」
「いえ、大丈夫でございます」
「どれ……」
と、岩蔵は、おたかを抱き寄せ、その額へ自分の唇を押しあててみて、
「熱はないようだ」
「はい。前から、ときどき頭が痛みます。けれど、しばらくすると癒りますから……」
「そうか」
「私のことは、おかまいなく、先生、おやすみになって下さいまし」
おたかの声は落ちついて、しっかりしているので、岩蔵は居間へもどった。
岩蔵は自分が眠る前に、おたかの部屋の前を通ると、灯が消えていて、おたかは眠ったようだ。
（どうやら、落ちついたらしい）
やや安心をして眠ることにした。
それから、どれほどの時間がすぎたろう。
道場に接している下男の部屋で、忠六が小用に目ざめた。
こんなことはめったにない忠六だが、夜に入ってから茶をのみすぎたらしい。
忠六は立ちあがって、有明行燈の、ほの暗い灯影に、となりの、作造の寝床が空になって

いるのに気づいた。
作造も小用かとおもい、しばらく待ってみたが、なかなかに、もどって来ないのである。
（はて……？）
どうもおかしい。
そこで忠六は、近くの便所へ行ってみた。この便所は門人たちや、下男たちが使用している。
（妙だな……）
かつて、なかったことである。
あたりを探しまわってみたが、作造はいなかった。母屋への渡り廊下の戸口は閉まっている。
してみると作造は、庭づたいに戸外へ出たのであろうか。
しらべてみると、作造がいつも履いている日和下駄（ひよりげた）がなかった。もう一度、部屋へもどって見たが、やはりいない。
夜半といっても、もう八ツ（午前二時）をまわっていたろう。酒もあまりのめない作造が、この時刻に、居酒屋へのみに行くはずもない。
四十をこえて分別もある忠六だけに、
（ははあ、作造どんに女ができたのか……）

そうおもった。
作造は三十になるが、まだ独身だ。
（それにしても、戸締りはどうしたのだろう？）
作造が無断で、内側から門の戸を開けて外へ出れば、その後の戸締りはしていないことになるではないか。
雨が、ふりけむっている。
忠六は、日和下駄を履き、傘をさがしたが、どこにもない。下男がつかう傘は、いま、一本きりしかおいてない。すると、やはり作造が、その一本の傘を手にして、外へ出たにちがいない。
（やっぱり、女か……でも、仕方がないな）
念のために表門をしらべてみると大きな門の戸締りはしてあるが、小さな潜り門の戸締りはしてない。この門の戸締りは道場の稽古が終ってから、忠六がしたのだから、よくおぼえている。
（物騒な。この時刻に外へ出るなら出ると、わしにいっておけばよいのに……）
忠六は、潜り門を開けて、外を見た。外は、漆黒の闇である。
そのとき、こちらへ近づいて来る提灯のあかりが見えた。
（あ、帰って来た……）

声をかけようとしたとき、男の声がした。
それにこたえる、別の男の声もした。
（あ、二人だ）
忠六は、潜り門の内へ入った。
二人の男は、門のところまで来て、小声に語りあっている。
一人は、まぎれもない作造の声だが、もう一人の男の声に、忠六はききおぼえがなかった。
忠六は戸締りをせず、急いで部屋へもどり、蒲団をかぶり、寝ているふりをした。
やがて、作造がもどって来て、忠六が眠っているものとおもいこみ、自分の寝床へもぐり込んだ。
翌朝、忠六が目ざめたのは、いつもより遅かった。
「ああ、昨夜は何だか、ぐっすりと眠ってしまい、すっかり寝坊をしてしまったよ」
忠六が作造に、はなしかけると、作造は、
「忠六さん。おれも、昨夜は何だかよく眠れて小便にも起きなかった」
と、いうではないか。
あきらかに作造は、嘘をついている。
（どうしたのだろう、作造どんは……）
忠六は、何となくいやな気がした。

（昨夜のことを、わしに隠していたいのか……なぜだろう？）

人間というものは、だれでも、隠しておきたいことの一つや二つはある。

だが作造は、これまでになかったようなことをした。そもそも、あの時刻に、そっとぬけ出して何処かへ行ったことからして、おかしい。帰って来るときは二人連れで、しかも相手は男であった。

それを隠し、作造は平然としている。

忠六は、その不審を、あえて作造には洩らさなかった。

素知らぬ顔で、内心は作造の様子に気をつけていると、この日の作造は妙に浮き浮きとして軽口をたたいたり、道場の稽古を終えて井戸端へ水浴びに出て来る門人たちをつかまえては冗談をいったりしている。

それが、何か不自然に感じられた。

（ま、他人のことだ。わしが気にしても仕方がない。作造どんが、わしの知らない顔を、別にもっていたところで、ふしぎはないのだものな。それにしても、自分が出て行った後の、門の戸締りを、わしにたのまなかったのは、どうしたわけなのか？）

用事やら、白根岩蔵の使いやらで、作造が外へ出て行くことは多い。

（やっぱり、女ができたのか……その女のことで、どこかの男と何かはなしあったとしても、おかしくはないものな）

昨夜のことを、忠六は忘れようとした。
二人きりの、夕餉のときになると、作造は、いつもの作造にもどっていた。
寝床へ入ってから忠六は、それとなく気をつけていたが、外へ出て行く様子はない。
夜半、忠六は浅い眠りからさめた。
となりの寝床で、作造の鼾がきこえている。
忠六は、ほっとして寝直した。
その翌日。
雨は熄み、青空がのぞいた。
この梅雨の晴れ間に、忠六は、いそがしくはたらいた。
そのため、買物に出たおたかの帰りが、この日も遅かったのに気がつかなかった。
作造は、白根岩蔵の使いで、ちょうど牛堀九万之助の許へ行っており、道場にはいなかった。
遅くなって帰って来て、おたかはすぐに台所へ入り、夕餉の仕度にかかった。
歯を食いしばっているかのように、かたく口もとを引きしめ、顔面を紅潮させ、何やら一種の昂奮のままに、立ちはたらいているように見える。
「あっ……」
庖丁をつかっていて、おたかが低く叫んだ。

左の人さし指を、庖丁で浅く切ってしまったのだ。
かつて、おたかになかったことである。
おたかは、てきぱきと傷の手当をしてから、また、台所仕事をつづけた。
夕餉の時刻になって、白根岩蔵は、おたかの指に包帯が巻かれているのを見て、
「その指、どうした？」
「台所で、庖丁をつかっていまして……」
「あぶないな。気をつけなさい」
「はい」
素直に、うなずいてから、おたかが顔をあげ、
「今夜、まいります」
と、いったのが、岩蔵には異様にきこえた。
夜、忍んで来るとき、おたかが、前もって告げることは一度もなかった所為でもあるが、
それよりも、おたかの声音が、
（いつもとは、ちがっている……）
岩蔵は、そう感じた。
だが、忍んで来てくれることは、うれしい。
このところ数日、おたかの肌身を抱いていなかったのだ。

「待っているぞ」
「はい」
おたかの顔には、血がのぼっている。
そればかりか、何か、突きつめたおもいをこらえているようだ。
（もしやすると、おれと夫婦になる決心が、ついたのやも知れぬ）
岩蔵の胸は躍った。
夕餉が終ってからも、岩蔵は夜更けになるのが待ち遠しかった。
（そうだ。それにちがいない）
しだいに、確信が胸に生じてきた。
このままでは、岩蔵も割り切れないが、おたかも苦しいにちがいない。
岩蔵と夫婦になれば、もう、だれに気がねをすることもないはずであった。
（これでよし。これでいいのだ）
おたかの過去がわかったとき、
（そのときは、そのときのことだ）
岩蔵も肚を決めている。
やがて、おたかが臥床を敷きのべにあらわれた。
岩蔵が、たまりかね、

「おたか……」
よびかけて、おたかの腕をつかむと、
「すぐに……すぐに、まいります」
ささやいて、しずかに岩蔵の手をふりほどき、おたかは居間を出て行った。
それから、おたかは湯殿へ入ったらしい。
喉が、しきりにかわき、岩蔵は枕もとの水差しの水を何度ものんだ。
湯殿から出て、おたかは自室へ入り、しばらくしてから、居間のつぎの間へ入って来た。
襖の向うで、
「先生、よろしゅうございましょうか？」
尋ねる声がした。これも、かつてないことだ。
「う……入りなさい」
「ごめん下さいまし」
どうも、いつものおたかとちがう。いちいち、あらたまっている。
「さ、早く……」
「はい」
襖が開き、おたかが居間へ入って来た。
いつもとちがう。

このごろのおたかは、寝る仕度をして、あらわれるようになってきているのに、いまは、きっちりと着物をつけ、帯をしめているではないか。

「おたか、どうしたのだ？」

問いかける岩蔵へ、軽く頭を下げてから、おたかは襖を閉め、向き直った。

「先生に、申しあげることがございます」

「何だ？」

「私は、悪い……悪い女でございます」

「……？」

「自分の手で、自分の命を絶てばよろしかったのですが、できませんでした。なかなか、自分の手では……むずかしいものでございます」

岩蔵は、軽く口を開けたまま、呆れて、おたかを見つめた。いったい、何をいい出すつもりなのであろう。

「先生の、お手にかかって、死にとうございます」

「わからぬな、どうも……」

「私は、先生に毒を盛って、殺めようとしていたのでございます」

「え……？」

とっさに、よくわからなかった。

「毒……？」
「たのまれました」
「だれかに、たのまれたのか。私に毒を盛れと……」
「はい」
「そのために、わざと、門の外で、行き倒れになって見せたというのか」
「そのとおりでございます」
「ふうむ……」
岩蔵は、自分の声が、
（われながら落ちついている……）
と、おもった。
大変なことで、おどろきはしたが、自分でも意外に冷静であった。
女に対しては純真な白根岩蔵だが、人の〔秘密〕というものについては、理解がある。
何となれば、自分も、大久保八郎の偽名をつかっているほどだし、以前には、島田九兵衛をはじめ、多くの人びとに、おのれの秘密を打ちあけなかった。
かつて岩蔵は、その秘密を抱く自分に苦しみつづけたものである。
ひたと岩蔵を見入っている、おたかの両眼に熱いものがふきこぼれてきた。
この重大な秘密を、われから、告白し、おたかは岩蔵の手にかかって死ぬ覚悟を決めてい

るらしい。
「いまの私は、到底、先生に毒を盛ることなど、できなくなりました」
「だれに、たのまれた？」
「それは、申しあげられませぬ」
「もと、この道場にいた阿部又七郎という者に、たのまれたのではないのか？」
おたかは、かぶりを振る。本当に知らぬらしい。
「では、神保左門か？」
「おさむらいではございませぬ」
「何……」
「ですが、私に、このようなことをいいつけました人が、また別のところからたのまれていたのやも知れませぬ。そこのところは、私にも、わかりかねます」
いよいよもって、わからなくなってきたのは、白根岩蔵のほうである。
「私は……私は、先生が、まったく御存知（ごぞんじ）のないようなところで、生きてきた、汚（けが）らわしい女なのでございます」
おたかは訴えるように、
「その女が、先生に抱いていただきましてからは、変わってしまいました。別の女になってしまったのでございます」

「……」
「先生。どのようにも私を、御成敗なすって下さいまし」
「お前に、この私を毒殺せよと、いいつけた者の名をいえ」
「それは……申しあげられませぬ」
「何故だ？」
「これまでの、義理がございます」
「義理……？」
「悪の世界にも、人の義理があるのでございます」
「……」
岩蔵には、何やらわからぬようでいて、わかるような気もする。
「私は、その人に、どうあっても先生に、毒なぞを盛れないことをつたえました。こうなれば、いずれ近いうちに、その人の手の者が私を殺害するにちがいありませぬ」
おたかの声に、乱れはなかった。
「黙って、此処を出て行こうかとも考えましたが、先生、これからも、気をつけて下さいまし。人が棲む世の中は恐ろしゅうございます。これを申しあげたくて、恥をしのび、こうやって、いま……」
絶句するや、おたかは、畳の上へ突伏してしまった。

その肩が、はげしくふるえている。
また、雨がふり出してきたらしい。
岩蔵は、長い沈黙の後に、
「いえぬことを、よく、いった」
と、いった。
はっと、顔をあげるおたかへ、
「なかなかに、いいきれぬことだ。よくいってくれた」
「先生……では、あの、おゆるし下さいますのか？」
「ゆるす」
「えっ……」
「実のところ、私には、ゆるす、ゆるさぬなどという資格はないのだ」
「……？」
「そもそも私の名は大久保八郎ではない。白根岩蔵という」
「しらね、いわぞうさま……」
「そうだ。このように私は、世を偽って生きている。他人を裁けるような男ではない」
今度は、おたかがおどろいたらしい。目をみはり、まじまじと岩蔵を見つめ、声もなかった。

「よし、この上は何も尋くまい」
岩蔵は苦笑を浮かべ、
「おたかの好きなようにするがよい。この家を出て行きたければそれもよし。いままでどおり、此処にいたければそれもよい」
「では、お咎めもなしに……」
「だから私には、他人を咎める資格がないと申している」
少しも怒りの色を見せぬ岩蔵であった。
ややあって、おたかは坐り直し、両手をつき、頭をたれた。
「では、先生。長い間、お世話になりまして……」
「出て行くか……」
「はい」
「出て行けば、殺害されると申したな」
「よけいなことを、口走ってしまいました」
「私には、よくわからぬが……これは、おたか。出て行かぬほうがよいとおもう」
「ま、まさか……」
「そうするがいい。此処にいるがよい」
「ほんとうに？」

「うむ。いるがよい、いてくれ」
「ま、そ、それは……」
岩蔵が腕をひろげると、そのふところへ、おたかは身を投げかけた。
あとは二人とも、声を絶した。
岩蔵は、おたかの帯を解き、おたかは岩蔵の寝間着をぬがせ、気が狂ったようにもとめ合った。
はげしい時間が過ぎて、岩蔵の厚い胸に顔を押しつけ、おたかが、
「先生。でも私、此処にはいられない……」
「何故だ？」
「先生の身が、危くなります」
すると岩蔵が、しずかな声で、
「いや、それは同じだ」
「何で、同じなのでございます」
「おたかが此処に、いるいないにかかわらず、私の身が危いのは同じではないか、ちがうか？」
たしかに、そのとおりである。
「どうしても出て行きたいというのなら、とめることはできぬ。なれど同じなのだ。私の命

をねらうものがいるなら、この上も、あきらめまい」
おたかは両眼を閉じ、岩蔵のいうことを凝っと聞いている。
翌日から、おたかは外の買物に出なくなった。
このことは、二人の下男へ、岩蔵が申しわたした。
「はい、ようございますとも。私どもが、いくらでも、おたかさんのかわりをいたします」
こういったのは作造であった。
その背後にいて、忠六は無言で作造の横顔を見つめていたが、作造が振り向くと、さりげなく眼を逸らした。
二日、三日と過ぎた。
作造は、おたかが書いた紙きれを持ち、ふたたび買物に出て行くようになった。
「忠六さん。おたかさんに何か、あったのだろうかね？」
作造が問いかけてきたが、
「さあ、わからない」
忠六は、くびを振って見せた。
この間、作造にも変わった様子は見えなかった。
（やっぱり、女だ。作造どんに女ができた……）
と、忠六はおもいこんでいる。

前に、作造と共に道場の門外まで来た男についても、
（あれも、女に関わり合いのある男らしい）
忠六は、そのように感じていた。
作造は外に出ているとき、何をしているのか、忠六にはわからない。
しかし、道場へもどって来ると、作造には一種の緊張感があり、それをまぎらわすためか、饒舌になってきた。
作造の眼は光りを帯び、動作は活発になっている。
（女のことで、もめごとを起さなけりゃあいいが……）
ときに作造は、暗い顔をして、むっつりと黙り込んでいることがある。
そうかとおもうと、しゃべり出す。
おたかが、あの告白を岩蔵にしてから七日目の朝に、
「先生に、お願いがございます」
作造が、渡り廊下へ来た白根岩蔵に近寄って来た。
渡り廊下の傍の庭を、忠六が掃いている。
「何だ？」
「急用ができまして、板橋の宿にいる妹のところへ行って来たいのでございます。一晩だけ、お暇をいただき、明日の朝には帰ってまいりますが……」

「よいとも」
一も二もなく、岩蔵は承知をして、
「忠六。よいな」
「はい」
「よし、作造、気をつけて行くがよい」
「ありがとう存じます」
道場へ入って行く岩蔵の後姿を見送ってから、作造が、
「忠六さん、たのみましたよ」
「ああ、気をつけてな」
この日は曇っていて、薄日がさしていた。
作造は外出の仕度をし、小さな風呂敷包みを手に、昼前に道場を出て行った。
作造の妹が板橋に住んでいるということは、白根岩蔵の耳へも入っていたし、忠六も知っていた。
だが、いまは、
(作造どんに妹なんか、いるのか、どうか知れたものじゃあない)
忠六は、そうおもうようになってきている。
作造を警戒するわけではないが、先夜以来、作造のいうことを、そのまま鵜呑みにできな

くなった忠六なのである。

この日の稽古は早めに終り、白根岩蔵は、いつもより早く母屋へもどった。

その後で、忠六は念入りに門の締りをした。

今日は薄曇りゆえ、夕暮れになっても、あたりが明るかった。

「お湯かげんは、いかがでございますか？」

湯殿の外から、おたかの声がする。

湯につかっていた岩蔵が、

「む。ちょうどよい」

「少し、蒸してまいりましたね」

「そのようだ。おたかも、早めに湯を浴びたがよい」

「はい」

あの夜以来、岩蔵のすすめにしたがい、おたかは岩蔵と共に食事をするようになった。

部屋も台所傍から、居間のつぎの間へ自分の荷物を移し、其処で寝起きするようになっている。

おたかは、すっかり覚悟を決めたものと見え、落ちつきはらっている。

「岩蔵を殺せ」

と、何者かにいいつけられ、あずかっていた毒薬は、すでに土中へ埋めてしまったと、お

たかはいった。

岩蔵は、自分を毒殺しようとしたのは、やはり阿部又七郎か、神保左門ではないかと推測した。

いくら考えても、そのほかに、

（おぼえはない）

のである。

大身旗本の阿部や神保が、直接に、おたかへ命ずるはずはない。

彼らは、自分の手を決して汚さぬ。

手づるをもとめ、二重三重の仕組みを経ているにちがいない。

あの島田九兵衛ですら、得体の知れぬ曲者どもの襲撃を受ける世の中なのだ。

島田九兵衛は、あのとき、岩蔵にこういった。

「私が、御老中の田沼様へ出入りしていることを憎む者は、いくらでもいる」

老中筆頭として、幕府政治の最高権力者である田沼意次の評判はよくない。後の世になっても、

「賄賂政治の張本人」

などといわれたほどだから、

「田沼を倒せ!!」

と叫ぶ反対勢力も、いろいろなかたちで蠢動しているらしい。
岩蔵が夕餉の膳についたとき、遠くで雷鳴がきこえた。
箸を手にしながら、岩蔵がいった。
「おたか。どうやら梅雨もあがったようだな」

炎

梅雨があがって、一度に夏が来た。
照りつける強烈な日ざしを人びとはよろこび、
「ああ、やっと今年の梅雨も終ったか」
「長い間、くさくさしていたのが、いっぺんにとれてしまった」
生き返ったように、町すじへあふれ出て来た。
作造が水野道場へもどって来たのは、八ツ半（午後三時）ごろであった。
「忠六さん。つまらないものだが、妹からだ。食べて下さい」
饅頭の包みを出して、すぐに作造は、いつものようにはたらきはじめた。
その様子に、別段、変わったところは見られなかった。
夕方になって道場から引きあげてきた白根岩蔵を、作造は渡り廊下で待ちかまえてい、挨拶をした。

「先方に、変わりはなかったか？」
「おかげさまで、丈夫にやっております」
作造は、頭を下げたまま、低い声でこたえた。
岩蔵は母屋へ行き、入浴をすませ、夕餉の膳に向った。
おたかは、阿部又七郎や神保左門から直接に岩蔵毒殺をたのまれたのではないが、岩蔵には、ほかに心あたりがなかった。
阿部にしろ神保にしろ、この水野道場がほしいから岩蔵を殺すのではあるまい。
多くの門人たちの目の前で、岩蔵との試合に負けたことを強く怨んでいるにちがいない。
そして、もっとも卑怯な方法で、その怨みをはらそうとしているのだ。
（だが、阿部や神保のしわざだときめてもならぬ。おぼえのない怨みを買うことがないものでもない）
ともかくも、江戸は恐ろしいところだと、岩蔵はおもった。
おたかのような女を入りこませて毒を盛らせるなどという、手のこんだ悪事をする者がいる。おたかは金三十両で、岩蔵毒殺を引き受けさせられた。その三十両を、おたかは依頼主へ返し、
「あのお方は殺せませぬ」
きっぱりと断わってきたという。

本当だろうか。
そんな女を依頼主は、ふたたび岩蔵の手許へ返すであろうか……。
おたかのいうことも、いま一つ、わからぬ。
白根岩蔵は、明朝、稽古をやすんで島田九兵衛を訪ね、すべてを打ちあけ、意見を聞くつもりであった。
ことによったら、一時、道場を閉鎖して、一年ほど様子を見ようとも考えている。
夕餉を終えたとき、何とおもったか、おたかが急に、
「私は、下野、宇都宮の浪人の娘に生まれまして、それから……それから……」
いいかけたが、また黙った。
「よい。むりをしていうな」
おたかは、声もなく泣きつづけた。
そして、異変は、この日の夜ふけに起った。
白根岩蔵とおたかが眠りについて、水野道場の人びとが、すべて寝しずまったかとおもわれた夜ふけに、ただひとり、眠らぬ男がいる。
下男の作造だ。
作造は、眠ったふりをしている。
そして、となりに寝ている忠六の様子をうかがっていた。

忠六は、よく眠っていた。
障子を少し開けてあるので、庭からながれ込んでくる夜気が涼しい。
と……。
作造が、むっくりと半身を起した。
そのまま、うごかない。
有明行燈の淡い灯影に浮きあがった忠六の寝顔を、凝っと見つめているのだ。
忠六の低い鼾が、部屋の中にこもっている。
そろりと、作造の躰がうごいた。
作造は起きあがり、中腰の姿勢となり、蒲団の下へ隠しておいた妙な物を引き出した。
それは、玄翁であった。
玄翁は、石工がつかっている大形の槌である。
玄翁の柄を両手につかみ、作造は背をのばした。
そしてまた、忠六の寝顔を見つめてから、うごき出した。
作造は、忠六の蒲団の裾へまわって行く。
そこで、またも忠六を注視する。
忠六は、これに、まったく気づかなかった。
ついに、作造は忠六の胸のあたりへ跨がるような姿勢となった。

重い夏の闇が、一瞬、はげしく揺れうごいた。
作造が、玄翁を忠六の脳天へ打ち込んだのだ。
忠六の叫びは、ほとんどなかったといってよい。
眠っているままに、脳天へ玄翁が叩き込まれ、即死してしまったからだが、作造は念を入れ、もう一度、脳天を強打し、ぱっと身を引いて廊下へ出た。
がたがたとふるえながらも、作造は、あたりの気配をうかがった。
中庭の木立の彼方に、白根岩蔵の居間の一部が見えるはずだが、すべてはいま、闇の中に呑まれていた。
作造は部屋へもどった。
死んだ忠六の鼻の穴から、おびただしい血がながれ出ている。
その鼻の穴へ手をあて、心ノ臓にも耳をあてて、忠六が息絶えたのをたしかめると、
「ご、ご、ごめんよ、忠六さん……」
作造はつぶやいて両手を合わせ、忠六の死体をおがむかたちをしてから、廊下へ出て、障子を閉めた。
しばらくして、提灯に火を入れた作造が、道場の傍へあらわれた。
作造は、小荷物を背負い、草鞋ばきとなっている。
道場の表門の傍の潜り門を開けた作造が、手の提灯を二度、三度と打ち振った。

すると……。
何処からともなくあらわれた黒い影が五ツ、音もなく潜り門へ近寄って来たではないか。
彼らと、うなずきかわした作造は、五人を門内へみちびき、潜り門の戸を閉ざした。
五人は、いずれも黒の覆面をし、身なりも黒か灰色の軽装で、そのうちの二人が何か細長い包みを小脇に抱えている。
五人とも長目の脇差を帯びていた。
五人をいざないつつ、作造は道場の傍をぬけ、奥へ入って行く。
このとき、白根岩蔵は居間で、おたかと共に熟睡していた。
右肩を下に、横向きに寝た岩蔵の背中へ、おたかはぴったりと身を寄せ、安らかな寝息をたてている。
どれほどの時間が過ぎて行ったろう。
はっと、岩蔵が目をひらいた。
そのまま、あたりの気配をうかがっていたが、
（気の所為か……）
また、眼を閉じた。
同じころ、作造と五人の覆面は散開して、それぞれに何やらうごいていたようだが、渡り廊下の下へ身を屈めていた作造のところへ、覆面の一人が近づいて来て、

「これでよし、よくやった」
「へ……」
闇の中で、作造はうなだれている。
「おい、作造」
「……？」
「忘れろ。さ、両手を出せ」
「へ……？」
「お前は、途中から、このたくらみに加わったのだ。さ、これを持って行け。その金で好きなところへ行け。行って、みんな忘れろ」
覆面が、重そうな金包みを作造の両手へつかませ、
「約束の金だ」
「へい」
「よいか、このことはすべて、忘れてしまえよ。それでないと、お前の身が危くなるのだ。よくおぼえておけ、よいな」
「わ、わかっております」
「よし、行け。後は、われらがやる」
作造は一礼し、金包みを胸に抱くようにして、庭づたいに表門の方へ消え去った。

そこへ、別の覆面があらわれ、
「そろそろ、やりますかな」
「仕度はよいか？」
「大丈夫です」
「よし、取りかかろう」
二人は、庭の闇へ消えた。
彼らは、こうしたことに慣れきっているらしい。音もたてず、まるで夜行性のけだもののように闇の中をうごいている。
しばらくして……。
居間の白根岩蔵が、ぱっと眼をひらいた。
岩蔵は飛び起きて、例の八角棒をつかみ、
「おたか」
叫んでおいて、脇差を寝間着の帯へ差し込んだ。
おたかが、目ざめて半身を起し、
「どうなされました？」
「様子がおかしい」
「えっ……」

「此処におれ、見て来る」
おたかが立ちあがったとき、夜半の闇が、にわかに明るくなった。
炎の色だ。
五人の曲者どもが、母屋のまわりに灯油をまいて、火を放ったのである。
「うぬ。卑怯な……」
居間を出かけた岩蔵がもどって来て、
「おたか、こちらへ……」
手をつかみ、となりの納戸へ入った。
万一のときにそなえ、岩蔵は納戸の一隅に隠し戸を設けておいた。
これを開けて外へ出ると、裏庭づたいに、となりの西光寺という寺の墓地へ行ける。
隠し戸を開けた岩蔵が、
「あっ……」
と、叫んだ。
此処にも、炎が這いまわっている。
「せ、先生……」
「おたか、私の帯へつかまっておれ」
早くも、台所の方から居間へ火がまわってきていた。

よほどに灯油をまいたものらしい。恐ろしいほどの火のまわりようであった。
こうなれば、居間へもどっては却って危いと、岩蔵は直感した。
屋内では、煙に巻かれてしまうからだ。
「さ、まいれ」
隠し戸から、岩蔵とおたかが外へ飛び出した。
燃えあがる母屋の炎が、二人の姿をはっきりと浮かびあがらせた。
左手におたかの腕をつかみ、右手に八角棒を持った白根岩蔵が、地を這う炎の中を、まっしぐらに西光寺の墓地へ逃げ込もうとした。
そのときである。
二人が目ざす西光寺・境内の木蔭から、二筋の矢が疾り出て、その一つは岩蔵の右肩の上をかすめて行ったが、一つは岩蔵の胸へ突き立った。
「あっ……」
これは、おもいもかけぬ奇襲といってよかった。
相手は闇の中に隠れ、炎上する母屋を背にした岩蔵を、弓矢で襲ったのだ。
おたかの悲鳴があがった。
三の矢が、おたかの左肩口へ突き刺さったのである。
四の矢は、本能的に身を沈めた岩蔵の頭上を飛びぬけて行った。

おたかは気丈に、肩口の矢を自分の手で引き抜きながら、
「先生、こちらへ……」
押し殺した声でいった。
「うむ……」
岩蔵は胸に突き立った矢をそのままにして、おたかと共に身を転じた。
このとき……。
炎の中から駆けあらわれた覆面が、物もいわずに岩蔵へ斬りつけてきた。
岩蔵は躱しもせずに、八角棒を突き出した。
曲者の刃が岩蔵へとどくより早く、八角棒が曲者の胸へ突きあたっている。
曲者が絶叫をあげて、転げ倒れた。
「二人とも逃がすな」
「とどめを……」
何処かで、曲者どもの声がした。
裏門の手前にも物置小屋が一つあって、その裏は、これまた西光寺の境内へつながっている。
おたかと岩蔵が、物置小屋の裏へまわろうとしたとき、横合いから走り寄って来た曲者が、いきなり、おたかの腹を突き刺した。

「あっ……」
振り向き、よろめくおたかを見た岩蔵が、
「おのれ!!」
飛び退いた曲者へ迫り、その頭へ八角棒を打ち込んだ。
「ぎゃあっ……」
曲者が凄い声をあげて倒れた。
「おたか、しっかりしろ」
岩蔵は、片膝を突いているおたかを左腕に抱き起し、物置小屋の裏へ入った。
一瞬の差で、二本の矢が物置小屋の戸へ突き立った。
胸の矢を引き抜こうともせず、岩蔵は右手の八角棒で、境いの垣根を叩きこわした。
背後に、曲者どもの声が近寄って来た。
それにかまわず、岩蔵はおたかを抱きかかえ、西光寺の境内へ踏み入った。
水野道場は、炎と煙に包まれている。
起き出した近辺の人びとの叫び声がきこえはじめた。
西光寺の木立を抜けたとき、
「どうなされた?」
「あっ、大久保先生ではありませぬか」

走り寄って来たのは、西光寺の僧たちであった。
白根岩蔵とおたかが、西光寺の庫裡の一室へ運び込まれたとき、おたかは、すでに息絶えていた。
それを見ていた岩蔵は、
「私も、この傷では、到底、生きてはいられまい」
と、つぶやき、
「おたか。すぐに、後から行くぞ」
声をかけた。
町医者が駆けつけて来て、岩蔵の胸の矢を、ちからまかせに引きぬいた。
このとき岩蔵は、呻いて気をうしなったようである。
医者は、血まみれとなり、岩蔵の手当にかかった。
この医者は、小川春歩という若い外科医で、てきぱきと傷の手当をほどこしながら、
「湯を……」
とか、
「布を……」
とか、西光寺の僧に命じるありさまが、いかにもたのもしかった。
「もしやすると、助かるやも知れぬ。胸の矢疵は急所を外れている」

と、小川春歩はつぶやいた。

水野道場は丸焼けとなってしまったが、西光寺の僧や近辺の人びと、それに町火消も出動して来て、朝を迎えるころ、火は消えた。

西光寺の墓地の外の物置小屋が焼け落ちたが、水野道場の両どなりが空地であったのと、何よりも風がなかったのがよかった。

もっとも、激しい炎は風を巻き起すが、灯油をまいて放火しただけに火のまわりが早く、

「それが却って、飛び火にならなかった」

という人もいた。

小川春歩は手当を終え、気つけの薬を岩蔵へのませた。

仰向けに寝た、おたかの顔には、すでに白い布がかけられている。

岩蔵は気づいて、あたりを見まわし、小川春歩へ、

「かたじけのうござる」

先ず、礼をのべてから、西光寺の僧へ、角筈村の日影道場にいる成子雪丸に、

「急ぎ、来てもらっていただきたい」

と、たのんだ。

僧たちは、すぐさま、手配をしたようである。

おたかの遺体を別室へ移そうとする僧へ、岩蔵が、

「そのまま……そのまま……」
と、いった。
小川春歩がうなずいて見せたので、僧たちは、おたかの遺体を移すのをやめた。
岩蔵の呼吸が、にわかに荒くなった。
顔面は、鉛色に変じている。
小川春歩が、くびをかしげたようだ。
西光寺の若い僧は〔駕籠松〕の町駕籠に乗り、角筈村の日影道場へ向った。
知らせを受けた成子雪丸とさとは、茫然となったが、
「すぐに、まいります」
さすがに血相が変わって、雪丸は、手早く身仕度にかかった。
「あの、駕籠に乗られて……」
「いや、自分で駆けて行ったほうが早いとおもいます」
雪丸は両刀を腰にして、
「さと。後をたのむ」
いうや、外へ飛び出した。
払暁の畑道を走り出した雪丸を見て、
「あっ……あれを見ろ」

「ま、まるで魔物のようだ」

二人の駕籠舁きと、西光寺の僧が瞠目した。

雪丸の後姿が、見る見る遠くなって、雑木林の向うへ消えた。

この三人が帰った後で、さとは、名主屋敷へこのことを知らせようかと考えたが、雪丸は何もいわなかったし、これまで、白根岩蔵が江戸の水野道場にいることは、名主の本郷庄左衛門には内密にしてある。

そこで、さとは、ともあれ雪丸が帰って来るまで、名主屋敷へ知らせぬことにした。

成子雪丸は二里弱の道を、現代の時間でいうと四十分ほどで走りぬき、神田の西光寺へ到着したが、さして息が切れている様子もなかった。

雪丸の到着が、あまりに速かったので、西光寺は、知らせを受ける前に雪丸がこのことを知り、駆けつけて来たとおもったほどである。

しかし、現代とはちがって当時はラジオもなければテレビもない。むろんのことに電話もない時代であるから、島田九兵衛も牛堀九万之助も、そして伊佐や鳥飼松之助も、まだ、この異変を知らなかった。

焼けあとから、下男の忠六の焼死体が発見されたが、いうまでもなく、もう一人の下男・作造の死体は見つかっていない。

西光寺の僧たちが、これを白根岩蔵に告げぬうちに、成子雪丸は駆けつけて来たのだ。

奉行所からも出張って来たが、何分、白根岩蔵が瀕死の状態なので、尋問はおこなわれていない。

雪丸が枕もとへ近寄り、顔を押しつけるようにして、

「岩蔵どの。雪丸がまいった」

声をかけると、

「おお……」

岩蔵が両眼をひらき、

「よく、来てくれた」

「これは、いったい……？」

岩蔵はうなずいてから、小川春歩へ、

「人ばらいを、お願い申す」

両手を合わせて、たのんだのである。

人ばらいをした西光寺・庫裡の一室の、おたかの遺体の前で、岩蔵と雪丸は何を語り合ったのであろうか……。

成子雪丸は、およそ半刻（一時間）ほど岩蔵と語り合ってから、小川春歩がいる部屋へ来て、

「先生。終りました」

と、告げた。
「何ぞ、御遺言のような？」
「先生も、やはり、助からぬとおもわれますか？」
「傷が急所を少し外れていたので、助かるやも知れぬとおもったが……」
「いろいろと、ありがとう存じました」
「あなたは？」
「大久保八郎の、弟のような者でございます」
「ほう。さようか」
小川春歩は、部屋を出て行った。
しばらくしてから、
「成子さま、早う、早う……」
西光寺の僧が、駆けつけて来て、
「御臨終にござります」
と、告げた。
雪丸が、岩蔵の寝ている部屋へ小走りに入って行くと、岩蔵は、もう意識不明となっていた。
雪丸は、岩蔵の右手をにぎりしめて、耳もとへ口を寄せ、

「岩蔵どの。岩蔵どの……」
呼びかけると、白根岩蔵は両眼を閉ざしたまま、二度三度とうなずいた。
それが、岩蔵の最後であった。
岩蔵が息を引き取った後に、先ず、鳥飼松之助が駆けつけて来、つづいて牛堀九万之助が来た。
これは、雪丸との対面がすんでから、この二人へ、
「お知らせ申して下さい」
と、岩蔵が西光寺の僧へたのんだのである。
島田九兵衛と伊佐へは、成子雪丸が知らせにおもむくことになっている。
「畜生、こんなことになってしまって……こ、これは、あの阿部又七郎と神保左門の仕わざに相違ない」
鳥飼松之助は、歯ぎしりをしてくやしがり、
「成子先生。何か、お聞きとりになられましたか？」
雪丸は、うつむいて、かぶりを振って見せた。
「なれど、成子先生は半刻も、大久保先生と語り合っていたそうではありませぬか」
「さよう……ですが、それは、別のはなしをしていたのです」
「ど、どのような？」

「われら二人の亡師・日影一念先生のことについてでござる」
「ふうむ……」
納得が行かぬような鳥飼と牛堀九万之助を残し、成子雪丸は、先ず、島田九兵衛の屋敷へ向った。

成子雪丸の口から、白根岩蔵の変死を聞いた島田九兵衛の心境は、どのようなものであったろう。
一瞬、九兵衛の両眼は、張り裂けんばかりに見ひらかれた。
「むう……」
呻きとも、唸り声ともつかぬ、何とも名状しがたい声が九兵衛の口から洩れた。
そのまま、身じろぎもせぬ九兵衛の額へ、ねっとりと汗がにじんでくるのを雪丸は見た。
しばらくして、九兵衛が、
「あなたが、成子雪丸どのであったか……」
何やら悲痛のおもいをこめた低声で、
「大久保八郎どのは、あなたのことを真の弟のようにおもうていたそうな……」
「私も、兄同様におもっておりました」
「ふうむ……」

九兵衛は、瞑目し、沈黙した。
雪丸も、黙っている。
亡師・日影一念の影響を受けた雪丸は寡黙であった。
夏の日ざしが庭にみちていたが、九兵衛の居間は軒が深く、風はよく通るが、日はさし込んでこないように設計されている。
「成子どの……」
「はい？」
「いつであったか、この家におりました喜乃と申すものが、大久保どの……あ、いや、あなたには白根岩蔵と申してもよろしかったのじゃな」
「は……」
「岩蔵どのの手紙を、角筈のあなたのもとへ、届けたことがあるそうな」
「さようでございます。その折、私は留守にしておりましたので、お目にかかれませぬでした。それが、どうかいたしましたか？」
「その女、死にましてのう」
「はあ……」
「岩蔵どのは、このことを、あなたにつたえてはおりませなんだか？」
「はい。別に……」

「のう、成子どの。その喜乃と申す女には、身寄りが一人もござらぬ。岩蔵どのの使いで、角筈におもむいたのも何かの縁じゃ。成子どの、その女の冥福を祈ってやってはくれませぬか」

と、島田九兵衛が立ちあがった。

「は。そうさせていただきます」

こたえはしたが、いまこのとき、何で、このようなことを九兵衛がいい出したのか、雪丸には見当もつかなかった。

「その女は、白根岩蔵どのを、わが子のように、おもっていたらしゅうござる」

仏間へ向いながら、九兵衛がそういった。

岩蔵の変死を知っても、島田九兵衛は、すぐに西光寺へ駆けつけようとはせぬ。

それよりも先に、成子雪丸を仏間へいざない、喜乃の位牌を拝ませようとしたのだ。

その胸中は、いまは亡き白根岩蔵にはわかるが、成子雪丸には解しかねた。

仏間には、大きくて立派な仏壇がもうけられてあった。

雪丸がおどろいたのは、その中に大小の位牌が二十ほどもならんでいたことだ。

金文字の立派な位牌があるかとおもえば、手づくりにしたらしい白木の古い小さな位牌もある。

（亡き岩蔵どのが、いたく世話になったという、この島田九兵衛というお人は、どのような

生き方をして来られたのか？）

九兵衛は、仏壇に燈明をあげ、香の用意をし、喜乃の位牌を雪丸の前へ置いた。

金文字で「俗名　喜乃の霊」としるした位牌であった。

「かたじけない」

位牌を拝み終えた成子雪丸の前へ坐り、島田九兵衛が両手をつき、

「かたじけのうござった」

深く深く、白髪頭をたれた。

「……？」

この九兵衛の、妙にあらたまった、丁重な物腰も異様といえば異様であった。

仏間を出るや、すぐに九兵衛は外出の仕度にかかった。

そこへ、千駄木から通って来る老番頭の駒次郎があらわれると、九兵衛は小声で何か言いつけたようだ。駒次郎は愕然としたようである。

雪丸は、

「これより、かつて水野道場におりました女の人へ、知らせにまいります」

「おお、お伊佐さんとかいう……」

「はい」

「成子どの。この一件が落ちついたなら、余人をまじえず二人きりで、いろいろと語り合い

とうござる。よろしいか？」
「いつにても……」
「私の方から、あなたの道場をお訪ねするが、かまいませぬか？」
「いささかも……」
「では、その折に、ゆるりと……駒次郎。成子どのをお送り申せ」
という九兵衛の言葉づかいは、その姿（町人）とはうらはらに、まぎれもなく武家のものであった。
島田屋敷を出た成子雪丸は、京橋北一丁目にある錫の細工師で、伊佐の弟・芳太郎の家へ駆けつけて行った。
伊佐のことは、雪丸も見知っている。
いまここに、岩蔵・おたかの変死と水野道場の焼失を聞かされた伊佐のおどろき、悲歎を書きのべるまでもあるまい。
白根岩蔵は息絶える前に、成子雪丸へ、
「おたかは、下野・宇都宮の、浪人の娘に生まれたと、ふと洩らしたことがある」
そして、また、
「以前、お伊佐が申していたことだが、おたかは、たしかに一度、子を産んでいる躰に見えたそうな」

と、いい遺したが、それだけでは、遺族を探す手がかりにはならぬ。

だが、島田九兵衛は西光寺でおこなわれた通夜の席で、

「私のほうで、宇都宮藩のほうを探ってみましょう。なれど、名前だけでは、どうも……せめて父御の姓名がわかっているとよいのだが……」

牛堀九万之助へ、そういった。

白根岩蔵こと大久保八郎と、おたかの墓は、西光寺の特別のはからいにより、その墓地にたてられた。

石は、成子雪丸が角筈村から運んで来た楕円形の小さなもので、そこへ、

俗名　大久保八郎　二十九歳

妻　たか　不詳

の文字が彫りつけられた。

江戸での白根岩蔵は、大久保八郎の名を通しぬいたのだから、

（この名でよい）

と、雪丸はおもった。

雪丸は、岩蔵が最後まで手につかんでいた八角棒を形見として、密かにもらいうけた。このことを知っていたのは、西光寺の二人の僧のみであった。

岩蔵が、この八角棒で突き倒し、なぐり倒した二人の曲者は仲間のものたちが担いで逃げ

たらしく、焼あとから見つかったのは下男・忠六の焼死体のみだ。
「もう一人の……ほれ、作造とやらいうた下男は、どうしたのであろうか？」
「そのことよ」
「おかしいのう」
「うかつなことをいうまいぞ。お上のお調べがきびしいゆえ、な」
西光寺の僧たちは、ひそひそと、ささやき合った。
ともかくも、岩蔵側の生存者は一人もいなかったことになる。
町奉行所でも寺社奉行所でも、火災は重くみるし、調査も探索もきびしかった。
水野道場の門人たちの中には、
（もしや、阿部又七郎か神保左門の仕わざでは……？）
おもった者もいたろうが、いかに岩蔵へ恨みを抱いたにせよ、大身旗本の子息のすることではない。
おたかの身性についても探索がおこなわれたけれど、これも肝心のことが何一つわからぬ。
「あるいは、火つけ盗賊の仕わざであるやも知れぬ」
という説も出たが、放火してまで盗賊たちが押し入るほど、水野道場には金もないし、金目の品物もなかった。
成子雪丸は、白根岩蔵とおたかの遺髪を分けてもらい、角筈村へ持ち帰った。

そして、西光寺と同じような石で墓をつくり、日影道場の裏庭の一隅に安置した。ただし、こちらの墓の文字は、雪丸が手ずから彫ったもので〔大久保八郎〕の名が〔白根岩蔵〕に変わっている。

この年の夏が終るころに、島田九兵衛が、日影道場へ雪丸を訪ねて来た。

九兵衛は、岩蔵・おたかの墓を拝んでから、

「ここがよい。この岩蔵殿の墓の前で語り合いましょう。おお、風がこころよい。このあたりは、ようござるなあ」

そこで雪丸は道場へもどり、茣蓙を運んで来て、その後から、さとが茶菓の仕度をしてあらわれた。

九兵衛の供をして来た若いほうの番頭は、駕籠の傍で待っていた。

この日、島田九兵衛と成子雪丸は、白根岩蔵の墓の前で、およそ一刻（二時間）も、はなし込んでいた。

もっとも、無口な雪丸は、九兵衛の言葉を黙って聞いているだけのようであった。

さとは、裏の台所口から、このときの二人をながめていて、

（お茶を、かえてさしあげないと……）

おもいつつ、ためらった。

それというのも、語り、聞き入る二人の様子が、
（何やら、ただごとではないような……）
緊迫感をただよわせているのが、遠目にも、よくわかったからだ。
ときには雪丸が、九兵衛を凝っと見つめ、二度三度とうなずいたり、一言二言をさしはさむ様子が見てとれる。
二人は、いったい何を語り合っていたのであろう。さとには、わからなかったが、岩蔵に関係のあることのようらしい。
それでなくては一刻もの長い間、岩蔵の墓の前で、
（はなし込んでいるはずがない）
と、さとはおもった。
やがて……。
島田九兵衛は帰って行った。
九兵衛はさとへ、
「来年は、おめでたとのこと。成子どのも、さぞたのしみのことでありましょう」
といった。
そして、この年も暮れた。
水野道場の焼失一件については、捜査も打ち切られたようであった。

新しい年が、あと数日でやって来るという或日に、島田九兵衛が、また日影道場へあらわれた。

このときも母屋の内へは入らず、九兵衛と雪丸は岩蔵の墓の前で、半刻（一時間）ほど語りあったのである。

その日は風も絶えて、まるで春のように暖かい日和であった。

流星

年が明けた。
すなわち、安永九年（西暦一七八〇）である。
成子雪丸は二十二歳。妻のさとは十八歳となった。
さとは、この年の二月のはじめに、はじめての子を産んだ。女子であった。
これを知った島田九兵衛から、かずかずの祝いの品が届けられた。
雪丸は、この子を、
「菊」
と、命名をした。
女子は、顔も体質も父親に似るという。
名主の本郷庄左衛門は、菊の顔を、つくづくとながめやって、
「おお……幼なかった雪丸どのが、この子によみがえったようじゃ」

と、いった。
雪の日の成子坂に、捨てられていた雪丸の顔を、庄左衛門は想い起したのであろう。
雪丸の日常に変わりはない。
日々、道場に出て、門人たちと共に稽古をつづけ、倦むことを知らぬ。
月に一度か、二月に一度、島田九兵衛の使いの者が日影道場へやって来る。
すると雪丸は、その日の稽古を終えてから、江戸の島田屋敷へ出かけて行く。
「どのような、おはなしがあったのですか？」
さとが尋ねると、雪丸は微笑して、
「世間ばなしをして来た」
とのみ、こたえる。
だが、さとは密かに、
（もっと、何やらこみ入ったおはなしがあったにちがいない）
直感をおぼえていた。
それが何かは、さとにもわからぬ。
わからぬままに、
（亡くなった白根岩蔵さまに関わることらしい）
そうおもっている。

（岩蔵さまと共に亡くなられた、あのおたかという女のひとの身許について何やらわかったのだろうか？）

さとも、雪丸同様に無口な性格で、いまは生まれたばかりの菊の世話に懸命となっているから、あまり長い時間を九兵衛と雪丸との談合への推測に割いてはいられなかった。

春が来た。

そして初夏。梅雨に入った。

この季節になれば、いやでも白根岩蔵のことを、おもい浮かべずにはいられない成子雪丸であったが、そうした感情のたゆたいを、雪丸はまったく面にあらわさなかった。

岩蔵・おたかの一周忌が近づくと、鳥飼松之助が日影道場へあらわれ、雪丸と共に、岩蔵の墓の前で長い間、何事か語り合っていた。

いまは名主の本郷庄左衛門も、白根岩蔵が死んだことをわきまえている。

岩蔵・おたかの一周忌は、西光寺において、ひっそりとおこなわれた。

一周忌の法要にあつまったのは、島田九兵衛、牛堀九万之助、鳥飼松之助、成子雪丸夫婦に、本郷庄左衛門も顔を見せた。

水野道場は焼け落ちてしまったが、旧門人たちの約半数二十五名があつまって来たのは、それだけ白根岩蔵の指導が深く胸に残っていたからであろう。

それに、もと女中の伊佐が弟の芳太郎と共に参列した。

門人たちは、いずれも、岩蔵の横死が阿部又七郎か神保左門のたくらみだとおもっているらしい。

門人の中でも、旗本・織田家の足軽をつとめている玉井与平治は、暇をみては、何か手がかりを得ようとして、諸方を探り歩いているそうな。

玉井は、かつて、阿部又七郎に取り入っていた御家人の坪内惣市と新し橋で出合ったとき、

「おい、大久保八郎につたえておけ。いつまでも、いまのままですごせるとおもうのは、大きな間違いだと、な」

そういった坪内惣市の言葉が、

「耳について、はなれません」

と、鳥飼松之助へささやいた。

「さようなことがあったのか……」

「はい」

「はじめて聞く。それを大久保先生につたえたのか？」

「つたえました」

「で？」

「大久保先生は私に礼をのべ、よくつたえてくれた、他に洩らすな、といわれました」

「ふうむ……」

鳥飼は鳥飼で、これまた諸方を探っていた。

「坪内、惣市か……」

「はい。それで私、坪内のことを、もっと探ってみたいのですが、なにぶん、奉公の身ゆえ、なかなか、おもうようにまいりません」

「よく、打ちあけてくれた」

二人の声は低かったし、だれの耳へも入っていない。

牛堀九万之助は、

「大身旗本の子息が、たとえ試合に負けた恨みを抱いたとしても、そのような無謀なふるまいをするとはおもわれぬ」

という、いかにも九万之助らしい意見であった。

「それが証拠に、奉行所の取り調べでも阿部や神保の名は浮かびあがって来なかったではないか」

「ですが先生。あの連中は、自分の手を汚すようなまねはしません。ならば牛堀先生は、あの放火、殺人の異変を何とおもわれます？」

鳥飼松之助が反問すると、

「われらの知らぬこと……つまり、大久保八郎こと白根岩蔵が、われらの前へあらわれる以前の事柄が原因なのではあるまいか。どうも、わしは、そのような気がしてならぬのだ」

そういわれてみると、鳥飼も沈黙するよりほかになかった。

大久保八郎の本名が、実は白根岩蔵とわかったときも、牛堀九万之助は、

「よくあることじゃ」

歯牙にもかけなかったし、鳥飼松之助をはじめ旧門人たちも、

「そうであったのか……」

と、いっただけで、おどろいた様子もなかった。

本名が気にいらぬとか、何か縁起がわるいとかで、偽名をつかうことは、当時めずらしくはなかった。

奉行所のほうの取り調べがすすめば、白根岩蔵の本名を隠しておくことはできぬ。

事実、角筈村の名主屋敷へも調べがおよんだし、本郷庄左衛門も成子雪丸も奉行所や火附盗賊改方まで、去年は何度か出頭している。

島田九兵衛も一度、町奉行所へよばれた。

だが、雪丸は、水野道場の内紛や、その後に岩蔵が不忍池のほとりで、何者とも知れぬ曲者の襲撃を受けたことなど、知ってはいても、口に出さなかった。

これは、島田九兵衛と成子雪丸が、あらかじめ相談の上、決めたことなのである。

牛堀九万之助は、旧門人たちが迂闊なことをいったり、行動に出たりすることについて、

「それぞれの家、家族、主家のことなどをよくよく考え、水野道場一件の始末は、上の調べ

にまかせるがよい」

その、お上の調べも探索も、一周忌が来たいま、どうなっているものやら見当がつかぬ。

法要の席で、島田九兵衛と成子雪丸は、ほとんど語り合わなかった。

これも、かねて二人が打ち合わせのとおりにしたのだ。

人びとの大半は、故岩蔵と九兵衛、雪丸の関係をわきまえていても、九兵衛と雪丸が、これまでに何度か語り合っている間柄だとはおもっていなかったようだ。

「これだけの人びとがあつまってくれて、岩蔵どのも、さぞ、うれしかろう」

名主の本郷庄左衛門は、雪丸夫婦と角筈村への帰り途に、

「それにしても、岩蔵どのの生涯は短かかったなあ」

「はい」

「あの、おたかという女は、いったい、どういう女なのだろう？」

「わかりませぬ」

「岩蔵どのと、夫婦になっていたのかのう？」

「そうでしょう。そのことをおもうと、短かかった生涯の最後に、岩蔵どのはしあわせだったとおもいます」

「ふむ、そうかのう」

赤子の菊は、名主屋敷へあずけてある。

「岩蔵どのは、あのまま、日影道場にいればよかったものを……雪丸どのは、岩蔵どのが息を引きとる前に会うたと聞いたが、あの折、どのようなことをいうていたのじゃ？」

「前にも名主様へおはなししたように、格別のはなしはいたしませぬ。何しろ岩蔵どのは傷に苦しんでいたことゆえ……」

白根岩蔵が、死にのぞんで、成子雪丸につたえた言葉の一つに、

「おれは、この、おたかと申す女と共に暮した短かい月日が、生涯のうちで、もっとも、しあわせな明け暮れであった……」

というのがある。

岩蔵は、水野道場の内紛や、阿部又七郎・神保左門については一言も口に出さず、

「この異変は、すべて、忘れてくれるよう、他の人びとにもつたえてもらいたい」

そして、また、

「おれという男が、この世に在ったことは、雪丸どのひとりがおぼえていてくれれば、それで満足だ」

と、いった。

つぎに岩蔵は、さりげなく、

「おれは幼ないころ、両親に死別れて、その顔もろくにおぼえてはおらぬが……雪丸どのは、まことの親、……母親に一目でも会いたいとおもったことはないか。その消息を、知りたい

とはおもわぬか？」

雪丸が、おもったことはないというや、岩蔵は苦痛の中にも微笑を浮かべ、

「そうか……」

二度、三度と、うなずいた。

そして、傍にあった例の八角棒と、腰に帯びていた脇差を、

「形見だ。受けてくれ」

雪丸は、一礼して受けた。

脇差は、亡き日影一念が、岩蔵と雪丸に形見の脇差をあたえたとき、岩蔵がもらった和泉守国貞の脇差だったのである。

「おぼえているか、その脇差を……」

「おぼえています」

「亡き恩師の声が、その脇差から、きこえてくるような気がする。いつもは、この脇差を腰にしていなかったのだが、昨日は、何となく、腰にしたくなってな」

「はあ……」

「何やら、ふしぎなおもいがする」

いま一つ、白根岩蔵が雪丸に言い遺したことがある。

それはやがて、わかるときがくるであろう。

そのうちに、岩蔵の呼吸があらくなってきた。
「人というものは、物事を、わきまえているようでいて、いささかも……いや、何一つ、わかってはいないのだなあ……」
これが、岩蔵の最後の言葉であった。
梅雨が明けてから、連日、夏らしい好晴がつづいた。
雪丸は、岩蔵形見の八角棒を毎日の稽古でつかいはじめた。
長さ五尺の樫の八角棒へ鉄条をはめこんであるだけに、かなり重い。
これを見て、門人たちが、
「成子先生は、棒術もなさるのですか？」
と、目をみはった。
はじめのうち、八角棒をつかう雪丸のうごきは、たどたどしかった。
門人たちにも、よく打ち込まれていたようである。
門人たちが帰り、夕餉をすませた後も、ときに雪丸は八角棒をつかみ、道場へ出て行って〔ひとり稽古〕をすることがある。
成子雪丸の日常が変わったというなら、八角棒に熱中しはじめたぐらいで、あとは少しも変わらなかった。
ただ、これは、妻のさとだけが気づいたことだが、白根岩蔵の一周忌がすんでからの雪丸

は、以前にも増して無口になったようだ。
　或日の夕餉どきであったが、黙々と食事をしている雪丸に、たまりかねて、これも無口なさとが、
「もし、だんなさま」
「うむ？」
「お笑い下さい」
「何……？」
「私も笑いまする」
「なぜ、笑う？」
　さとは、ふところに抱いている菊の顔を雪丸に見せ、
「子は、まだ物心つかぬうちの育て方が大事と申します」
「なるほど」
「その子の両親が、毎日毎日、このように押し黙っていては、この子が笑うことをおぼえなくなってしまいましょう。それとも、笑わぬ子、笑わぬ娘がようございますか？」
「……」
　雪丸は、あきれ顔で、目をまるくして妻の顔をながめた。
「さあ、お笑いなさいませ」

「さと。冗談はよさぬか」
「いえ、てんごうをいうているのではありませぬ。さ、お笑いなさいませ」
「う……」
「ならば、私から笑いますゆえ、だんなさまも、一緒に……」
「何をいうことか」
「では笑いまする。ようございますか……うふ、おほ、ほほ……」
その、妻のまじめ顔とはうらはらな笑い声に、雪丸は、ほんとうに笑いがこみあげてきて、
「あは、はは……」
嘘でない笑いを、笑ってしまった。
すると、さとも今度は、ほんものの笑い声をあげたのだ。
「は、はは……お前は、何という……」
「私の申したことが、おわかりでしたか？」
「よくわかった」
翌朝、食膳に向い合ったときも、昨夜のことをおもい出し、夫婦が顔を見合わせて笑い合った。
だからといって、雪丸の無口がなおったわけではない。
雪丸は、ほとんど木太刀をつかわなくなり、八角棒の稽古に熱中している。

そして雪丸は、八角棒を二寸ほど切りちぢめた。

岩蔵の一周忌から半月ほど過ぎた或日の夕刻に、江戸から鳥飼松之助が日影道場へあらわれた。

成子雪丸は、よろこんで迎え、母屋の居間へ招じ、さとの手料理でもてなした。

「江戸の、水野道場にいたころの岩蔵どののことを、あなたはよく御存知なのでしょう。どんなことでも語って聞かせて下さい」

「それよりも成子先生……」

「いや、その先生とよぶのは、やめて下さいませんか」

しかし、日影道場のあるじであり、亡き岩蔵から雪丸のことをくわしく聞かされている鳥飼は、年齢も自分より下の雪丸に対して敬意を抱いている。

鳥飼松之助は、水野道場の旧門人・坪内惣市の近況を告げにやって来たのであった。

すでにのべたごとく、坪内惣市は、阿部又七郎の、

「ふところ刀」

などと、門人たちが陰で、うわさをし合っていた中年の御家人である。

御家人というのは、将軍に目見得もしていない幕臣だが、身分は百石以下、坪内は五十俵二人扶持という、さらに下級の侍で、屋敷ともいえぬ居宅が本所にある。

奉公人といえば、下男一人に下女一人だけで、妻女と十七歳の一人息子がいた。
ところが、先頃、居宅を改築したり、下男、女中も新たに雇い入れたり、さらに妾を何処かに囲いはじめたという風評もながれているそうな。
「このことを、成子先生は、何とおもわれます？」
「さて……」
「私は、どうもくさいとおもいます」
「くさい……？」
「大久保先生の横死と、何やら関わり合いのあるような気がいたします」
「ほう」
そのことならば、島田九兵衛がすでに探知して、雪丸の耳へ告げてある。
けれども雪丸は黙っていた。
それも、九兵衛との約束によってだ。
鳥飼松之助は、
「大久保先生が、あのような死にようをなされたることが、何としても残念。くやしくて夜も眠れません」
で、鳥飼は、あの放火・殺人の異変の全貌を何としても探り出し、これを白日のもとにさらして、

「天下のさばきを願いたい」
そうおもっている。
「もはや、奉行所などにまかせてはおけませぬ。われらの手で悪人どものたくらみを、あばいてくれなくては、胸がおさまりませぬ」
と、いうわけだ。
鳥飼松之助は、血気さかんの年齢である。
だが、鳥飼よりも年下の成子雪丸のほうは、どこまでも冷静で、
「大久保八郎こと白根岩蔵どのは、あの異変を、すべて忘れるようにと、私に遺言をしました」
「では、このままでよいといわれますか？」
「よいもわるいもない。人の遺言は、まもらねばなりませぬ」
「これまでにも何度か、成子先生に、このことを申しあげましたが、御同意をいただけなかった……」
「私は、岩蔵どのの遺言を、まもっているだけです」
鳥飼は、うらめしげに、
「さようですか。ならば私も、この上、お邪魔いたしますまい」
「怒られたのか？」

「成子先生は幼少のころより、この道場において、大久保先生と苦楽を共にした間柄ではありませぬか」
「そのとおりです」
「それなのに、先生は……」
「何事も、遺言のままにしているだけなのです」
「なれど……」
「ま、お待ちなさい」
「え……？」
「あなたは、徳川将軍の御家来であり、父御も母御もおられると聞いています」
「それが、どうしました？」
「いまさら申すまでもなく、人というものは、ひとりで生きているのではありませぬ」
「……」
「ましてや鳥飼どのの家は、幕臣でござる。あなたが、もしも面倒な事を引き起したとなれば、父上も母上も、お困りになられよう。ちがいますか？」
鳥飼は、沈黙した。
「亡き岩蔵どのが、すべてを忘れてくれと遺言をしたのは、自分自身のことが原因になって起った異変に、他の人びとを巻き込みたくなかったにちがいありません。私は、そのように

おもっています」

憤然として、鳥飼松之助は席を立った。

雪丸のいうことに納得できたのか、どうか、それはわからぬ。

鳥飼のいうとおり、たしかに奉行所の捜査には、おかしいところがあった。ある時期まで捜査がすすんだとき、突然に打ち切られてしまったのである

阿部又七郎の父は、阿部平内といって、二千石の大身旗本で、かつては将軍の側近をつとめたこともあり、顔がひろい。神保左門の父・市太夫は千二百石の旗本だ。

阿部又七郎や神保左門が、岩蔵謀殺をたくらんでいたとすれば、彼らの父兄が証拠湮滅のために、諸方へ手をまわしているにちがいない……そのように、鳥飼松之助は推測をしているらしい。

ともかくも、これといった証拠が出てこない。

このことは、事実であった。

そのころ、ある場所で、ひとりの男の死体が発見された。

この男を前に見ている……たとえば鳥飼松之助が、これを知ったなら、いよいよ、あの事件への疑惑を深めたにちがいない。

けれども、この男は、

「名も知れず、身性もわからぬ他所者」

として、たった半日のうちに始末され、土地の無縁墓地の一隅へ埋めこまれてしまった。

男は、かつて、水野道場にいた下男の作造であった。

作造の死体は、江戸をはなれること十六里、武州・熊谷の宿外れをながれる荒川の八丁堤で発見された。

発見したのは、川辺りを舟で下っていた船頭である。

作造は八丁堤の下の、川辺りに近い草むらの中で死んでいた。

作造にしては、身につけている衣服も上等のもので、旅姿をしていた。

役人が出張って来て調べたが、ふところには胴巻も財布もなく、一文の銭もなかった。

「これは、物盗りじゃ」

というので、いろいろ調べてみたが、さっぱりわからぬ。

不審の点はあったが、土地の人でもない旅人の死因を、当時は、いつまでも調べているようなことはなかったのである。

こうして作造は、だれにも知られぬまま、短かい生涯を終えた。

作造は殺されたのである。

くびすじの急所をはね切られ、堤の上から草の中を、川辺りまで転げ落ちたのであろう。

その、あざやかな手口に、

「物盗りにしては、冴えた手口よ」
「恐ろしいのう」
役人たちは、ひそひそとささやき合った。
むろんのことに新聞やテレビもなかった時代ゆえ、作造の死が江戸までつたわって来るようなことはない。
いったい、だれが作造を殺したのであろう。
身につけていた衣類から推してみると、作造は、かなりの金を所持して旅に出ていたものか……所持金がなかったのは、死体から何者かが奪い取ったとみてよい。
作造は髪の手入れもきれいにしてあり、血色もよく、顔も躰も水野道場にいたときより、少し肥えていた。
板橋にいるという作造の妹も、兄の死を知らなかったに相違ない。
いや、もともと、作造の妹などはいなかったのやも知れぬ。
作造にしろ、彼に撲殺され、焼死体となって発見された忠六にしろ、いずれも孤独な身の上らしく、忠六なども、死後一年が過ぎて尚、たずねて来る人もない。
亡き水野鉄斎は二人の身性を知っていたのだろうが、それにしても、はかないものであった。

作造が殺害されてから、二十日ほど過ぎて、江戸には、そこはかとなく秋の気配がただよってきはじめた。

日中の日ざしは依然として強いが、何といっても夜に入るとちがってくる。

つい先ごろまでの、夜に入っても寝苦しかったのが嘘のように消え、人びとは、夜の眠りをむさぼりはじめている。

その夜。

御家人の坪内惣市は、深川に囲いはじめた妾のお金の家に泊っていた。

お金は、両国の船宿の女中をしていた女だが、坪内は、今年の春になって手をつけ、

「お前が気に入った」

と、深川の大島町の飛地へ家をもたせ、月のうち何度か通って来る。

五十俵二人扶持の坪内惣市は、何の役目にもついていないが、そのかわり、いくばくかの金を幕府へさし出すことになっている。この金のことを〔小普請金〕という。

つまり幕府で何か小さな工事――たとえば江戸城の垣根がこわれたとか、屋根の瓦がいたんだのを修理するときに、この金をつかうということだ。

何しろ、坪内惣市のような御家人は、

「掃いて捨てるほど……」

いるのだから、役目にもつかぬ者を、ただ遊ばしているわけにはまいらぬ。

そこで〔小普請金〕を差し出させるのだ。

あとは気楽に、ぶらぶらしていればよいのだが、こういう連中の中には暇をもてあまし、博奕は打つ、大酒はのむ、女に狂うなどはまだよいほうで、近年は恐喝や強請までするような御家人が増えたという。身分は低くとも徳川将軍の家来である身が、だ。

つまり坪内惣市も、そうした御家人のひとりであった。

年少のころから剣術が好き、喧嘩が好きだったので、諸方の道場をわたり歩いて来たらしい。

水野鉄斎の門人となってから、一年ほどの間に、坪内は阿部又七郎という門人にうまく取り入り、阿部のために、いろいろとはたらくようになったことは、すでにのべた。

阿部も何かと便利なので、坪内へ小づかいの金をあたえたりしている。

阿部の家は、知る人ぞ知る裕福の家柄である。

坪内惣市は、今年になってから、急に金づかいが荒くなった。

囲いものの女をつくるなどとは、以前の坪内には、ちょっと、できかねたことだ。

お金を囲ってある家は、土手道の北側の下にあった。

土手道の右側は、松平下総守の抱え屋敷で、その長い土塀が江戸湾の入海の際までつづいている。

お金を囲ってある家は、三間つづきの小さなものだが、庭もあって、家のつくりも凝って

いる。お金が住みつく前にも、大店の主人の囲いものが暮していたそうな。

坪内惣市は晩酌をすませると、すぐに、

「お金、こっちへこい」

奥の間の蒲団を敷きのべてある部屋へ、お金を連れこみ、いつものように若い女体を執拗にせめはじめた。

そして、一刻（二時間）もたったろうか……。

「もし……もし、もし……」

表の戸を叩く音と、よび声がした。

「なんだ、あれは？　近辺の者か……？」

「さあ……」

お金が起きあがり、

「どなたでございましょう？」

と、外の者へ声を投げておいて、寝所から出て行った。

「もし、あの、こちらに坪内の旦那がおいでではございませんか？」

「さあ、それは……」

男の、高い声が、

「あの、私は本所からまいりましたもので、坪内の旦那のところの為吉さんにたのまれ、駆

けつけてまいったのでございますが……」
　坪内惣市も寝所から出て来た。
　為吉というのは、坪内家ではたらいている下男だ。
　いまのところ、この妾宅を知っているのは、為吉だけである。
「為吉が、どうしたと？」
　坪内が尋くと、
「いま、御新造さんが、飛んだことに……」
　坪内の妻が急に倒れ、半身不随になったというのである。
「ほんとうか……」
　坪内が戸を引き開けた途端に、男の陰から、もう一人の男が飛び込んで来て、物もいわずに、坪内惣市へ脇差で切りつけた。
「あっ……」
　坪内も剣術をつかうだけに、とっさにくびを振ってかわしたが、左の肩先をざっくりと斬られ、泳ぐように奥の間へ逃げた。
　同時に、いま、声をかけていた男も飛び込んで来て、
「きやぁ……」
　悲鳴をあげ、腰をぬかしかけたお金の胸下へ、短刀を突き入れた。

お金の悲鳴が絶叫に変わった。
坪内は、庭に面した雨戸へ体当りして外し、外へ転げ出た。
「うぬ!!」
初太刀を仕損じた刺客が追って出て、坪内の背中を斬った。
これは脇差だけに、いま一つ刃先が伸びず、浅い傷であった。
坪内惣市は必死で庭を逃げまわったが、
(もう、駄目だ)
刺客に追いつめられ、絶望の目の色になった。
そのときであった。
庭の崖上で、
「人殺しだぁ!!」
「泥棒だぁ、泥棒だぞ!!」
少なくとも二人の男の叫び声がきこえ、何やら金盥のようなものを叩く音が響きわたった。
顔を黒い布で覆った刺客は、
「畜生」
歯がみをした。
「泥棒、泥棒!!」

「人殺し!!」
叫び声は高くなるばかりだ。
刺客は、庭の木蔭にいる坪内惣市へ、もう一度、斬りつけた。
坪内は身を投げるように、これをかわし、呻き声に近い声で、
「人殺し……」
それへ呼応するかのように、八丁堤の上から、
「人殺し!!」
「泥棒!!」
の叫び声が降ってくる。
刺客は舌打ちをし、もう一人の刺客へ、
「引け」
低く声をかけると、庭から家の中へ飛びあがり、姿を消した。
このとき、八丁堤から、一人の男が庭へ飛び降りて来て、
「さ、逃げましょう」
声をかけ、倒れかかっている坪内の躰をささえた。
「あ……」
坪内は、重傷であった。

男は、坪内の躰を背負った。すると、堤の上から、もう一人の男が手をのばし、二人の躰を堤の上へ引きあげた。

別の男の声が、

「泥棒!!」

「人殺し!!」

まだ、叫んでいる。

近辺の人びとは「人殺し」の声に怖れ、外へは出て来なかった。

八丁堤に、町駕籠が一つ。

瀕死の坪内惣市は、この駕籠の中へ運び込まれた。

「それっ」

坪内を助け出した二人の男が駕籠を担ぎあげた。

「急げ」

と、もう一人の男がいった。この男は尻をからげ、大小の刀を腰に帯びている。

町駕籠が走り出した。その後から浪人体の男も走り出す。

このとき刺客ふたりは、富岡八幡宮の参道を、何食わぬ顔をして、永代橋の方へ急ぎ足で向っている。

まだ、夜は更けていない。

暗闇の八丁堤とはちがい、このあたりの料理屋、茶屋などの灯も明るく、人通りも絶えていなかった。

坪内惣市は、駕籠の中で気をうしなっていた。

いや、その前に、何処かで駕籠がとまり、何者かが坪内の傷所へ血どめの手当をしてくれたことを、苦痛の中にもおぼえている。

また、駕籠が走り出した。

それから間もなく、坪内は気絶してしまったのである。

気がついたとき、医者らしい人が坪内の顔をのぞき込んでいた。

「あ……」

「気がつかれましたな」

「こ、此処は……？」

坪内は半身を起そうとしたが、手も足もうごかなかった。

傷所の痛みよりも、呼吸が苦しく、全身が大きな岩の下敷きになっているようなおもいがする。

医者は、

「そのまま、そのまま。しずかにやすんでござれ」

坪内惣市の耳もとへ口をつけて、そういった。

このとき、だれかが部屋へ入って来て、医者と何やらささやき合っていたが、医者と入れかわり、坪内に顔を寄せてきた。

おそらくは六十をこえていよう。坊主頭で細面の、血色がよい小柄な老人であった。

老人は、無言で坪内を見つめている。

朦朧とした意識の中で、坪内は、うつろな眼を老人に向け、

「此処は、何処で……？」

老人は指を口へ当てて、何もいうなというように、くびを振ってみせた。

坪内は、両眼を閉じた。

すると、たちまちに意識が消えた。

老人は、医者に、

「いかがでありましょう？」

「さよう。かなり、重い傷で……」

「助かりましょうか？」

「いまのところ、何とも申せませぬ」

「ふうむ」

唸った老人は、島田九兵衛であった。

してみると、九兵衛が手をまわし、坪内惣市の危急を救ったことになるではないか。

この部屋は、前に喜乃の病間だった部屋と小廊下をへだてた、八畳の間である。
坪内惣市は翌日の昼すぎに、また、意識を取りもどした。
医者のほかに、女中二人と下男一人がつきそい、看護は、いたれりつくせりといってよい。
意識がもどるのと同時に、傷所の激痛が坪内をおそった。
そして意識も昨夜より、はっきりとしてきた。
坪内は、苦痛の呻き声を発した。
医者の知らせで、間もなく、島田九兵衛があらわれた。
この日の島田九兵衛の姿は、がらりと変わっている。
いつもの町人姿とはちがい、衣服も侍のものに変わり、小刀をたばさみ、いつもの九兵衛を見なれている下男や女中たちが、
（まるで、別人のような……）
主人の威厳に目をみはった。
そうした九兵衛が坪内惣市の枕元へ坐ったとき、坪内は、これが昨夜の老人だとはおもわなかった。
昨夜の、坪内の視力は朦朧としていたし、何も彼も、よくおぼえていなかった。
「あの、此処は何処でござる？」
坪内は、九兵衛に尋ねた。

すると島田九兵衛は、かたちをあらため、
「此処は、御老中・田沼主殿頭様の御下屋敷でござる」
と、いったのである。
「えっ……た、田沼様の？」
「いかにも」
落ちつきはらっていう九兵衛の傍には、だれもいない。
九兵衛が入って来ると同時に、医者も女中も、部屋の外へ出て行ってしまっている。
あまりのおどろきに、一瞬、坪内は傷の痛みも忘れたかのようであった。
島田九兵衛を見て、坪内は、
（田沼様の御家来……）
と、感じた。
ま、そのようなものであるといってよかろう。
九兵衛は、田沼老中の財政顧問のような人物だからだ。
（そ、それにしても……）
坪内には、すべてが、のみこめなかった。
徳川幕府の最高権力者である老中・田沼意次が、何故、自分の危急を救ってくれたのか
……たしかに自分は、二人の刺客に襲われ、絶体絶命の窮地に陥っていたのを、堤の道にい

た人びとに助けられた。
その自分が、駕籠に乗せられ、
（此処へ……田沼様の御下屋敷へ運ばれたのか……？）
どうも、わからぬ。
身分からいえば、五十俵二人扶持の坪内は、田沼老中の傍へもよれぬ。
（そのおれを、なにゆえに、助けて下されたのか……それとも、別の事情があるのか？）
「坪内殿。そこもとは、なにゆえ田沼様が、このようになされたか、知ってはおられまいな」
「は……」
坪内惣市という自分の名前を知っての上で、
（やはり、助けられたらしい）
このことである。
（なぜなのだ、なぜ、おれを……？）
その坪内の疑問を見すかしたかのように、島田九兵衛が、
「御老中様におかれては、近ごろの、そこもとの所業のすべてを、御承知でござるぞ」
と、いった。
九兵衛の声は低かったが、きびしいものをふくんでいた。

「おわかりか、坪内殿」
「……」
近ごろの自分の所業といわれれば、いくらも、おもいあたることがある坪内惣市である。
「神田・紺屋町に、去年の夏まであった水野道場出火の一件について、そこもとは何ぞ知っておられような」
「……」
坪内は驚愕した。
さらに、島田九兵衛は、
「また、その折に横死をとげた大久保八郎の一件についても、よく、わきまえておられるはずじゃ」
「……」
「よろしいか、坪内殿。そこもとが何も彼も正直に、素直に自白をされるなれば、御老中様は、そこもとをお咎めなさるおつもりはないとおおせられた。そこもとには、ささやかながら御公儀の家人としての身分があり、家族もおられる。このことを、よくよく考えてごらんなさるがよい」
島田九兵衛は立ちあがり、
「いつにても、それがしをおよびなされい。それがしの名は白根岩蔵と申す」

しずかにいうや、九兵衛は部屋を出て行った。
坪内惣市は、痛みも忘れて茫然となっている。
（あのことを、御老中様が御存知なのか……いったい、これは、どうしたことなのだ？）
わからぬ。どうしても、わからなかった。
（もしやして……？）
大久保八郎は、老中・田沼意次と何かの関係があるのだろうか？
それだったら、
（これは、大変なことになる……）
と、いってよい。
昨夜、自分を襲った刺客たちが、何者の手によってうごかされているか、それも、およそ、わかるような気がする。
（うぬ!!　畜生め!!）
坪内は身うごきがならぬままに、怒りの呻きをあげた。
（あ、阿部又七郎め。よ、よくも……おれがしてやったことを忘れ、おれを、この世から消そうとした……）
阿部が大久保八郎との試合に負けた恨みをはらしてやるつもりで、阿部にうまくもちかけ、坪内は蠢動した。

阿部からは、大金が出て、坪内のふところもあたたかくなったが、今度は自分が襲われた。
（おれの仕様を、阿部に教えたのが、いけなかった……）
おのれの手を血で汚さずに、目ざす相手を暗殺する方法を、阿部又七郎へ告げたのが、まずかった。
（阿部は、おれを殺し、おれの口を封じるつもりだったのだ）
そこへ、医者が入って来て、
「さ、おのみなされ」
あたたかい薬湯を、坪内惣市へのませた。
すると間もなく、坪内の激しい興奮がおさまり、眠くなってきた。
島田九兵衛が、音もなく部屋へ入って来て、医者を目顔でまねき、先に出て行った。
すぐに、医者が出て行く。
この医者は、亡き喜乃の病間にいた野田宗立である。
廊下に待っていた九兵衛は野田宗立を、居間へいざなった。
「宗立先生は、あの者の容態を何とごらんなさる？」
「さよう……傷が重うござる」
「やはり、な」
「うまく行けば、癒りましょうが、先ず、むずかしいかとおもわれます」

「ふうむ……」
島田九兵衛は、沈黙した。
野田宗立は居間を出て、坪内惣市のところへもどった。
坪内は、眠りに落ちている。
そして、翌日。
朝に目ざめた坪内の顔には、わずかに生色がよみがえったかのようにおもわれた。
坪内は卵を落した粥を一椀、口にしてから、天井を見あげたまま、何やら考え込んでいたが、昼近くなると、
「おそれいるが、白根様を、よんでいただきたい」
と、女中にいった。
野田宗立は、部屋にいなかった。
女中が出て行き、しばらくしてから、島田九兵衛があらわれた。女中は部屋へ入って来ない。
九兵衛は今日も、侍姿である。
「坪内殿」
「は……」
「こころが、決まりましたか？」

「は、はい」
「よろし」
「な、なれど、白根様。それがしに、お咎めは……？」
「いっさいを申したてるならば、お咎めはござらぬ」
「家の者たちへも？」
「申すまでもない」
固唾をのんだ坪内が、尚も、ためらっていると、
「何を、躊躇いたしておるか」
島田九兵衛が、叱りつけた。
「は……そ、その前に、うかがいたきことがござる」
「何じゃ？」
「それがしは、このまま、死んでしまうのではありますまいか？」
「それは、そこもとしだいじゃ。死ぬるとおもえば死ぬであろうし、生きたいとおもえば生きられよう。なれど、もしも、そこもとが、すべてを申したてぬときは、五十俵二人扶持の家は取りつぶされること、これだけはたしかなことじゃ」
「なれど、御老中様が、何故、それがしのことを……」
坪内は、うったえるような眼の色になっていた。

その坪内惣市を、凝っと見つめていた島田九兵衛が、
「まだ、わからぬか」
「え……？」
「そこもとのたくらみによって横死をした大久保八郎殿は、御老中様の御縁類である」
「えっ……」
坪内は、自分の予感が適中したとおもったろう。
しかし、これは、島田九兵衛ひとりの存念であった。
九兵衛は、坪内が身うごきもできないのを見て、自邸を田沼家・下屋敷（別邸）に仕立てた。
さらに、白根岩蔵と名乗り、田沼老中の名を借りた。
これらは、すべて、坪内に自白をうながすためにしたことだ。
むろんのことに、大久保八郎が田沼老中の縁類であるわけはないのだが、何も知らぬ坪内は、九兵衛の言葉をうたがってみるだけの余裕を失っている。
「いささかも、存じませぬことにて……」
「相わかりましたな？」
「は、はい」
「では、申したてるように」

「も、申しあげます」
ここにいたって、ついに坪内惣市は決意せざるを得なかった。
およそ一刻（二時間）後に、坪内は、またも薬湯をのまされ、眠りに落ちた。
島田九兵衛は、番頭の駒次郎をよび、
「角筈村の成子雪丸どのに、すぐ、こちらへ来てもらうよう」
「承知いたしました」
駒次郎は、すぐに島田屋敷を出て行った。
九兵衛は仏間へ入り、長い間、仏壇へ祈りをささげた。
成子雪丸が駒次郎と共に島田邸へ到着したのは、夕暮れ近くなってからだ。
この日は駒次郎が、町駕籠を二挺用意して行ったので、雪丸も駕籠に乗ってあらわれた。
島田九兵衛は、簡素な夕餉の膳を居間に運ばせ、
「先ず、腹ごしらえをしておきましょう」
と、雪丸にいった。
雪丸は、いつもとちがう九兵衛の侍姿に、少しおどろいたようだ。
九兵衛は苦笑して、
「三十何年も前の自分の姿にもどってみましたが、どうも、窮屈になってまいった」
袴をぬぎ、小刀を外した。

「いかがなされましたか？」
「いやなに、少しばかり、役者のまねごとをいたしましてな」
「はあ……」
「さ、箸をおとり下され」
二人は、沈黙のまま、ゆっくりと夕餉をすませた。
膳が引かれ、茶が運ばれると、島田九兵衛が女中に、
「これよりは、だれも通してはならぬ」
人ばらいを命じた。
女中が下って行った。
「さて、成子どの」
「はい？」
「実は、な……」
と、九兵衛が坪内惣市の危急を救ったいきさつを、成子雪丸に語った。
雪丸の面が、緊張に引きしまってきて、
「では、坪内が、この御屋敷に？」
「さよう。以前より、たびたび、あなたにおはなし申しあげたように、いまの将軍家おひざもとの大江戸には、無頼の男たちがはびこるばかりにて、金しだいで人を殺めることなど平

気の連中が、いくらもおります。御老中様も、このことは、いつも心にかけられているようなれど、なかなかに、むずかしい」

「はあ……」

「ことに、無頼の浪人たちが多くなる一方なのでござる」

徳川幕府が成って以来、日本には戦争が絶え、大小の刀を腰に帯した侍たちは、ひとくちにいうならば、

「用がなくなった……」

と、いってよい。

将軍や大名の家来になっている者は官僚化してしまい、そうでない侍たちは、巷へながれ、江戸という大都市へあつまって来る。

大都市でなくては、暮しが立たぬし、悪事もはたらけぬ。

これらの浪人群を、田沼老中は、遠い北の国（北海道）へ送って、開墾に従事させたなら、

「どうであろうか？」

と、島田九兵衛に洩らしたことがあるそうな。

「ま、わしが坪内惣市を助け出したときに、はたらいてもらった浪人や男たちも、そのような連中といってよいが……なれど、その中にも、いくらか増な者もありましてな」

九兵衛は、そうした男（中には女もいる）たちをつかい、白根岩蔵が横死してから今日ま

で、さまざまな方面へ手をのばし、独自の探索をつづけていたのである。
それは、かねてから雪丸も知っていたが、
「このことは、二人の胸の内のみへ、しまっておきましょう」
という九兵衛の言葉をまもり、雪丸は妻のさとにも打ちあけていない。
九兵衛と雪丸は、何故、二人だけで、このようなことをすすめてきたのであろうか……。
すすめつつ、九兵衛は、奉行所の捜査にも目をはなさなかった。
捜査が突然に打ち切られたとき、九兵衛の探索は一段と、強化された。
その島田九兵衛の探索によって、浮かびあがったのが、坪内惣市であった。
鳥飼松之助の言葉を借りるまでもなく、阿部又七郎と坪内の関係は、だれも知るところである。
（二千石の大身の息子ともある身が、まさか？）
九兵衛はそうおもったが、手がかりはこれ一つしかなかったので、手の者に探らせたところ、坪内は阿部又七郎を手紙によってさそい出し、前々から浅草・並木町の料理屋〔浅田屋源三〕方で、しばしば、密会をしていることがわかった。
白根岩蔵が死んだ当座は三ケ月ほど、二人は会っていない。
それが去年の秋ごろから、また〔浅田屋〕で密会をするようになった。
「岩蔵殿の横死一件について、神保左門は関わり合いがないとおもわれる」

と、島田九兵衛が成子雪丸に告げたのは、去年の暮れであった。
それまでは、神保左門のほうへも、九兵衛は探りの手をまわしていたにちがいない。
ところで……。
今年に入ると、にわかに、坪内惣市の金まわりがよくなり、金づかいが荒くなった。
「もはや、ほとぼりがさめた、と、おもったのでありましょうな」
と、九兵衛がいった。
同時に九兵衛は、
（白根岩蔵横死について、坪内惣市は、かならず何かを知っている）
おもいきわめ、焦点を坪内ひとりにしぼった。
坪内の一日一日を、決して見逃さぬようにした。
坪内は、このところ、しきりに阿部又七郎へ手紙をとどけている。自分で阿部屋敷を訪れることは決してしない。
そうしておいて、坪内は浅田屋へ行き、阿部があらわれるのを待っているわけだが、どうしたものか、阿部又七郎は何度手紙をもらっても浅田屋へ来なくなった。
（これは、坪内が、うるさくなってきたにちがいない）
九兵衛は、
「坪内から、目をはなすな」

と、配下の者へ命じ、そのときの状況によっては、万一の事態にそなえ、町駕籠の用意までさせたのである。

そうして、先夜の、坪内惣市が襲われるという異変が起ったのであった。

「大久保八郎を、人知れず殺害してしまいましょう。水野道場は、あなたのものです」

と、阿部又七郎をそそのかしたのは、まさに、坪内惣市であった。

もっと、いろいろにうまいことをいって、そそのかしたにちがいない。

「このことは私におまかせなさい。決して、だれにもわからぬように、大久保を、この世から消してしまいます。たとえ万一、わかったとしても、阿部又七郎という名には、いささかも傷がつかぬ方法があるのです。ま、お聞き下さい」

剣士としてはすぐれていても、阿部又七郎は世事に疎い。

簡単にいうならば「大家のお坊ちゃん」なのである。

正々堂々の試合に負けたばかりではなく、自分が跡をつぐものとばかりおもっていた、水野道場の後継者・大久保八郎を阿部又七郎が恨むのも、この生いたちと性格によるものであったろう。

幼少のころから何一つ不自由なく育ち、傍へ寄って来るものは、阿部に追従する者ばかりである。

たまたま、剣の筋がよいところから、水野道場で頭角をあらわし、父兄は、

「なにともして、又七郎を一流の剣客にしてやりたい」
富裕の家柄もあって、援助を惜しまなかった。
こうした父兄ゆえ、阿部又七郎が白根岩蔵との試合に負けたときの興奮は、ひととおりのものではなかった。
阿部も、父や兄には、
「大久保八郎の、言葉にはつくせぬ卑怯な立ち合いに破れました」
くやしげに告げた。
何が卑怯なのか。何処が卑怯なのか……。
しかし、この「卑怯」の一言のみで、阿部の父兄は、激怒した。
「おのれ、ただではすまさぬ」
と、父の阿部平内は、いきまいたそうである。
阿部の父兄が、岩蔵謀殺の計画を知っていたかどうか。
「そこまではわからぬが、百七十両の大金を、又七郎へわたしたことだけは、たしかなことじゃ」
島田九兵衛は、そういった。
その百七十両が、白根岩蔵謀殺のために、つかわれたのだ。
その一部は、水野道場の下男・作造を買収するためにつかわれ、ほかならぬおたかも、そ

の金をもらって、岩蔵毒殺を引き受けたが、岩蔵への愛をおぼえ、金を返した。
これでは、おたかを野ばなしにしておいては、こちらがあぶないというので、急ぎ作造を買収し、計画を練り直し、一気に白根岩蔵を殪したのである。
それにしても、坪内惣市は何処のだれに、岩蔵謀殺を依頼したのであろうか。
外神田の佐久間町に〔備前屋六兵衛〕という人宿、つまり口入屋がある。
口入屋は、奉公口の周旋、仲介をする業者のことだ。
備前屋は、町家へ向けての下男・下女を周旋するばかりではなく、武家屋敷へも中間などを周旋する。
また、幕府が何か工事をおこなうときも、備前屋は人足を出している。
江戸に数多い大小の口入屋の中でも、備前屋は、
「顔がきく、顔がひろい」
ということだ。
坪内惣市は自分が直接に、この備前屋へ殺人を依頼しに行ったのではない。
中に、もう一人の男がいる。
こやつは、坪内と同じ御家人で、居宅も同じ本所だ。
名前を、井村寅次郎という。
この井村を介して、備前屋六兵衛が白根岩蔵の謀殺に乗り出した。

そして、備前屋が、
「この女なら大丈夫。仕損じることはない」
断定して、えらばれたのがおたかであったのだ。
この一事をみてもわかるように、備前屋六兵衛は、金で人を殺すことなど、わけもなくやってのける男らしい。
その方面にも、多くの配下がいて、おたかも、その内の一人ということになる。
おたかは、岩蔵を毒殺すると、すぐに備前屋へ逃げ込む手筈になっていた。
むかしは現代とちがい、奉行所の捜査にも限度がある。
おたかが捕まらぬかぎり、犯行は有耶無耶になってしまう。
その、おたかが裏切ったので、備前屋はあわてた。
そこで、すぐ、下男の作造を買収し、事を急いだのだ。
金に目がくらんだ作造は、いわれるとおりに事を運び、江戸から逃げたが、この男はもともと備前屋の配下ではない。
いずれは、備前屋の手によって消される運命だったのであるが、作造の暗殺については、さすがの島田九兵衛も知ってはいなかった。
一方、坪内惣市は金づかいが荒くなり、遊びの金に詰まってきたので、阿部又七郎へねだるようになった。

阿部も、しだいに坪内がうるさくなってきた。
阿部が金をよこさなくなったので、坪内は、ねだりから恐喝に変わった。
（こやつ、いよいよ、捨ててはおけぬ）
阿部は、坪内を殺してしまうことに決めた。
今度も、自分の手は汚さぬつもりだが、手配だけは自分がおこなった。
すでに、のべておいたが、阿部又七郎には水野道場にいたころから、多くの剣士が追従し、取り巻いていた。
坪内惣市は、その最たるものだったが、もう一人、これも御家人で和田小平次という者がいた。
和田は、かねてから坪内が阿部に取り入るのを、こころよくおもっていなかったし、仲もよくない。
そこをねらって、阿部が、はなしをもちかけると、
「よろしゅうござる。まかせて下さい」
「たのむ。自分は近く、道場をひらくつもりでいる。そのときは、おぬしにもちからになってもらいたい」
「ほんとうですか。水野道場の焼けあとへ建てるのですか？」
「いや、別のところだ」

「それにしても阿部先生。坪内は何か悪いことでもいたしたのですか？」
およそのことは勘づいている和田小平次が、そ知らぬ顔で尋くと、阿部又七郎は、
「坪内は、天がゆるさぬほどの悪事をはたらいたゆえ、成敗してくれるのだ」
と、いった。
和田は肚の中で、せせら笑っていたろう。
阿部は、またしても和田に金をわたした。
和田は、この金で、本所・深川あたりに巣くう無頼者の中から二人をえらび、深川の妾宅へあらわれた坪内惣市を襲わしめたのだ。
もっとも、ここまでは島田九兵衛も知らぬ。
坪内も、和田小平次が暗躍していたとは知らなかったろうが、いずれにせよ、阿部が謀った襲撃だとおもいこんでいる。
だが、島田九兵衛にとって、それはどうでもよいことであった。
白根岩蔵謀殺の真犯人さえ突きとめれば、九兵衛も成子雪丸も、
（それでよい）
のである。
九兵衛と雪丸は、亡き岩蔵の、
「敵を討つ!!」

決意を、もっている。
この決意を、九兵衛は雪丸に打ちあけたところ、
「岩蔵どのは、自分のことは忘れてくれと申しましたが、今度ばかりは、いうことをきけませぬ」
「さようか……」
二人は、何度も意見をのべ合った。
島田九兵衛は、岩蔵について、
「わが子が殺されたように、おもわれてなりませぬ」
と、いった。
敵討ちの方法について、二人は語り合ったが、九兵衛は雪丸独自の方法にまかせることにした。
そしていま、ついに真犯人を突きとめた。
島田九兵衛は、みずから剣をとって阿部又七郎を討とうというのではなかった。
むかしは侍であったにせよ、いまの九兵衛は、
「剣には無縁の人」
なのである。
ゆえに、阿部又七郎が自分の手を汚さず、白根岩蔵を謀殺したのと同じようにして、岩蔵

の敵を討つ決意をした。

九兵衛の意のまま、阿部を討つほどの浪人剣客ならば、

「いくらもおります」

九兵衛は雪丸に、そう洩らしたことがあった。

そのとき雪丸は、はじめて自分が敵を討つ決心をかためていることを、九兵衛に打ちあけたのだ。

雪丸の敵討ちの方法を聞き、島田九兵衛は、

「なるほど。ようわかりました」

即座に同意をして、

「なれど、阿部又七郎が真の敵か、どうか……あるいは神保左門であるやも知れぬし、または両人が相謀ってのことやも知れぬ。わしは、この二人のどちらかが敵とおもうが、ちがうやも知れぬ。われらのおもいおよばぬ敵がいたのやも知れませぬ。そこのところを、はっきりさせるのは、この九兵衛の役目じゃ」

といった。

島田九兵衛は、よほどに、白根岩蔵の人柄に感じ入り、好意をよせていたにちがいない。

「剣術こそ、まなばなかったわしだが、岩蔵どのは、若き日の九兵衛そのものでござった」

これも去年、岩蔵の墓の前で、九兵衛が雪丸に語った言葉である。

「よろしいか、雪丸どの。急いてはなりませぬぞ」
と、九兵衛が、角筈へ帰る成子雪丸を門の外まで送って出て、
「手筈は、すべて、この九兵衛におまかせ下され」
「はい」
雪丸は深く頭をたれ、
「何から何まで、かたじけのう存じました。亡き岩蔵どのも、きっと……きっと、よろこんでおりましょう」
「さて、それはどうかのう。あの人のことじゃ。よけいなことをすると、苦が笑いをしていよう」
間もなく夏も終ろうとしている夜空に、このとき、星が尾を引いて流れ飛んだ。
坂を下って行く雪丸の提灯が見えなくなるまで、島田九兵衛は門の外へ立ちつくしていた。
ところで……。
坪内惣市が手当の甲斐もなく、息絶えたのは、翌々日の明け方であった。

初雪の夜

坪内惣市の死後、五十俵二人扶持の家督は、無事に十七歳の一人息子が跡目をつぐことができたそうな。

島田九兵衛が、どのようにして、坪内の死体を妻子のもとへ届けたか、それは成子雪丸もくわしくは知っていない。

しかし九兵衛は、坪内に約束したことをまもったのである。

おそらく、九兵衛の口ぞえがあって、老中・田沼意次から特別な手配がおこなわれたのであろうか……。

夏が去って、秋が深まりゆく日々、成子雪丸の日常に変わりはなかった。

或日、雪丸とは二度と会わぬといっていた鳥飼松之助が角筈の日影道場へあらわれ、

「成子先生の、お耳に達しましたか、どうか……」

「何のことでしょう?」

「阿部又七郎が、道場をかまえるということです」
「ほう。前の水野道場の跡にですか？」
「いえ、麻布の三ノ橋の近くと、聞きおよびました」
「なるほど」
鳥飼の無念は、いまだに消えぬが、どうにもできない。
師の牛堀九万之助からは、
「軽挙のふるまいは、ゆるさぬ」
きびしく、いわれているし、あの一件については、何の証拠も鳥飼はつかんでいない。
島田九兵衛は、坪内惣市を救って、その自白を得たことを、雪丸のほかには、だれにも告げていない。
けれども、坪内が死んだということは隠しようもない。鳥飼松之助の耳にもきこえていた。
「坪内の死を、成子先生は、何とおもわれますか？」
「さて……」
「どうも、おかしい。妙な気がします。坪内は、どのような死方をしたのでしょうか？」
「さあ……」
雪丸は、まったく関心がない様子なので、鳥飼は、
（成子先生は、亡き大久保先生が、よく自分に語って聞かせてくれたような人ではないらし

い。むしろ、冷ややかな人だ）

そう、おもった。

鳥飼松之助は、雪丸が反応をしめさぬものだから、早々に帰って行った。

その後で、

「どうかなさったのでしょうか、鳥飼さまは……」

妻のさとが、雪丸へ、

「ふきげんの御様子に、見うけましたけれど……」

「案じるな。何でもない」

「はい」

「夕方になると、冷えてくる」

「冬の足音が、もう、そこまで……」

「うむ……」

阿部又七郎が、麻布の三ノ橋に自分の道場を建てていることは事実であった。

すでに、その建築は、かなり進行している。

或日の午後、成子雪丸は、

「用事ができて、外出（そとで）をせねばならぬ。後をたのむ」

門人たちへ言い置き、塗笠（ぬりがさ）をかぶり、道場を出て行った。

このとき雪丸は、腰に短刀すら帯びていなかった。

さとは、雪丸の外出を知らなかった。

何となれば、さとが夕餉の仕度を終えたころに、雪丸は道場へもどり、三、四名の門人たちの稽古を見て、その後で母屋へ引きあげて来たからである。

雪丸は、麻布・三ノ橋へ行き、阿部又七郎の道場を見てきたのだ。

その道場は、新堀川に架かる三ノ橋の西詰近くの空地へ建築中であった。

道場と別棟の母屋をふくめて、相当に大きなものだ。

阿部の父は、よほどに、三男の又七郎が可愛いと見え、援助を惜しまぬようだ。

場所もよい。このあたりから三ノ橋の東面にかけて、大名や旗本の屋敷が多い。

阿部又七郎の剣名が評判となれば、門人が増えることはうたがいない。

阿部道場の、道場開きは来年の一月十日と決まった。

水野道場のころから、阿部を取り巻いていた門人たちは、すべて入門することになっている。

成子雪丸は、建築中の阿部道場を、それとなく見に出かけたことを、だれにも洩らさなかった。

島田九兵衛にも告げなかった。

見たといっても、他の通行人にまじり、通りすぎただけである。

笠を深くかぶっていたし、雪丸に気づいた者は一人もいない。
島田九兵衛も、あれからずっと、雪丸へは音沙汰もない。
ないが、九兵衛は九兵衛で、ひそかに活動をつづけているにちがいなかった。
いまの雪丸は、九兵衛の指示を待つのみであった。
成子雪丸が、八角棒をつかっての稽古は、いよいよ激しくなってきて、
「お師匠さまの、あの棒は、おそろしいな」
「おれは、殺気をおぼえた。打ち殺されるか、と、おもった……」
ある門人は蒼ざめて、そういった。
木々の葉は散りつくし、赤子の菊を背負ったさとは、大根を沢庵漬にするのでいそがしがっている。
道場の裏庭の山茶花が、白い寂しい花をつけた。
初時雨が降り、初霜が降りた。
冬が来たのだ。
そして、或日の昼すぎに、島田九兵衛の番頭・駒次郎が、主人・九兵衛の手紙をもって日影道場へやって来た。
成子雪丸は、何とおもったか、島田九兵衛の手紙を道場の前庭で読んだ。
番頭の駒次郎は、町駕籠を外へ待たせておき、雪丸が主人の手紙を読み終えるまで、雪丸

の背後に立っていた。
　門人のひとりが駒次郎の来訪を告げるや、
「よし、わかった」
　雪丸は、稽古を中断し、外へ出て来たのだ。
　いつもなら、駒次郎を母屋へ招じておいてから、手紙を読むはずの雪丸なのである。
　読み終えた雪丸は、
「相わかりました、と、島田様へおつたえ下さい」
「承知いたしました。では、これにて……」
「あ、お待ち下さい」
「何ぞ？」
　雪丸は、道場へ入って行き、灰色の布に包んだ細長い物を抱え、外へもどって来た。
「これを島田様の御屋敷まで、お運びねがいたい」
「かしこまりました」
　駒次郎が受け取ろうとするのへ、
「私が駕籠まで……」
　といい、雪丸は門の外に待っていた駕籠舁きへ、
「これを、たのみます」

「へい」
二人の駕籠舁きは、軽い物とおもい込んでいた細長い荷物の重さが、意外のようであった。
細長い荷物と駒次郎を乗せた駕籠が、彼方の木立の蔭へ消えたとき、庭の奥から、さとがあらわれ、まだ門の外に立ちつくしていた雪丸へ、
「だんなさま……」
「おお」
「いま、島田様の？」
「さよう」
「お茶もさしあげずに……」
「急いでおられた」
「まあ」
「さと……」
「はい？」
「何やら知らぬが、島田九兵衛様からのおまねきがあった」
「何でございましょう？」
「わからぬが、ともかくも仕度をしてもらいたい」
「はい」

さとが母屋の方へ消えるのを見送ってから、雪丸は庭の一隅へ屈み込んだ。
何をしているかというと、島田九兵衛の手紙を引き裂き、これを、土中に埋めたのである。
それから道場へもどり、古参の門人・伊藤三造をよび、
「急用あって出かける。後をたのむ」
「わかりました」
雪丸は小さな湯殿へ行き、何杯も水を浴び、入念に躰を清めた。
躰を清めた、といっても、それは、めずらしいことではない。外出の折には必ず稽古中の汗をながし、下着を替えて出て行く。これは雪丸のみではない。亡き白根岩蔵もそのようにしていた。
母屋へもどると、さとが外出の仕度をして雪丸を待っていた。
「さと。今夜は遅くなるやも知れぬが、案じるな」
「はい」
さとは、むだな問いかけを決してしない女だ。小娘のころからそうであった。
下着を替え、外出のときの小袖、袴を身につけた成子雪丸は、岩蔵が形見によこした和泉守国貞の脇差をえらび、腰に帯したが、大刀は帯びなかった。
脇差一つを腰に、雪丸は、亡師の日影一念が愛用していた古い塗笠をかぶり、
「では、行ってまいる」

「お早う、お帰りを」
「うむ」
微笑して、うなずき、道場を出て行った雪丸に、さとは少しも異常を感じなかった。つまり、それほどに、雪丸の言動は、いつものように静かで、おだやかなものであったのだろう。
先刻、稽古をしていた門人のうちの何人かは、師の成子雪丸が細長い布包みを持ち出したのを見たが、気にもとめなかった。
雪丸が、島田九兵衛邸へ到着したのは八ツ半（午後三時）すぎであった。
この日は、朝から冷え込みが強く、それでも朝のうちは薄日も洩れていたが、午後になると、空は灰色の雲におおわれて、尚も寒気が増してきた。
島田九兵衛は、居間の炬燵に入っていた。
「おお、まいられたか雪丸どの。まだ早い。炬燵へ入って、ゆるりとなされ」
「はい」
雪丸は九兵衛と向い合って、炬燵に入った。
「雪丸どの。いよいよでござる」
「はい」
「よろしいかな？」

「いつにても……」
「先刻、駒次郎が、こちらへ運んでまいった品は、しかと、おあずかりしてござる。此処へ持って来させましょうかな？」
「いえ、時刻が来てからで……」
「さようか。ときに、腹ごしらえは、どのようにしたらよいものか、お指図が願いたい」
「では、お言葉に甘えまして、半刻ほど後に、白粥を……」
「承知いたした」
九兵衛は、居間を出て行った。
炬燵に入ったまま、成子雪丸は凝っと瞑目している。
あたたかい白粥に卵を落したものを、成子雪丸は軽く二椀、腹におさめた。
島田九兵衛も、雪丸の相伴をして二椀食べた。
食後、ゆっくりと茶をのむうち、
「御仕度が、ととのいましてございます」
番頭・駒次郎が入って来て告げた。
「さようか。万端にぬかりはないな？」
「はい。大丈夫でございます」
「うむ」

大きくうなずいた九兵衛が、雪丸へ、
「よろしいかな？」
「はい。いつにても……」
「では……」
九兵衛が炬燵から出た。
町駕籠が二梃、邸内に待機をしている。
そして、雪丸が角筈の道場から運んでおいた細長い荷物が、一梃の駕籠の上に括りつけられてあった。
駒次郎が、九兵衛へ擦り寄って来て、
「お供は、よろしいのでございますな？」
「よろしい」
「はい。では、お気をつけられまして」
「おお」
九兵衛と雪丸を乗せた駕籠が、屋敷を出た。
二梃の駕籠は、やがて、上野の山から浅草の広小路へ出て、八間町へあらわれた。
この八間町に、近藤八兵衛という弓師が住んでいる。
弓師の家は、京橋の弓町に多く、浅草では近藤八兵衛のみだ。

二人を乗せた駕籠は、この弓師の家の裏手につけられた。
駕籠からおりた島田九兵衛は、
「さ、こちらへ」
細長い荷物を持った雪丸をうながし、まるで我家へ入るような足取りで、裏口から弓師の家へ入った。
二梃の駕籠は、二人をおろすと、すぐさま、何処(どこ)かへ立ち去って行った。
ときに、暮六ツ（午後六時）(くれ)を少しまわっていたろう。
「これはこれは、よくこそ」
と、二人を出迎えた老人が弓師の近藤八兵衛で、
「さ、二階へ」
と、いう。
天井の低い二階には、小部屋が一つきりしかない。部屋の行燈(あんどん)にはあかりが入っていた。
「何ぞ、お申しつけ下されますよう」
五十を二つ三つ越えたかとおもわれる近藤八兵衛が、慇懃(いんぎん)に九兵衛へ、
「まだ、大分(だいぶん)に間(ま)がございますぞ」
「うむ。では、熱い茶をもらおうか」
「はい」

そのとき、成子雪丸が八兵衛に向って、こういった。
「私には、白湯をたのみます」
弓師の八兵衛が出て行くと、島田九兵衛が、小さな炬燵へ入り、
「さ、これへ」
「はい」
雪丸は炬燵へ入る前に、件の細長い荷物をほどいた。
灰色の布をひらくと、さらに白い布に巻かれた、あの八角棒があらわれた。
布をたたみ、その上に八角棒を置いてから、雪丸は炬燵へ入った。
「雪丸どの」
「は……？」
「敵、阿部又七郎は、この近くの料理屋に来ているはずでござる。その料理屋は浅田屋と申してな、又七郎が水野道場にいたころからの、なじみの店じゃ」
「はい」
「それで、な……」
島田九兵衛は、ふところから、折りたたんだ一枚の紙を出し、雪丸の前へひろげて見せた。
こくめいに描かれた、絵図である。

「ほれ、此処が、いま、われらのおる家でござる。よろしいか」
「はい」
「そして、ここが並木町の料理屋・浅田屋じゃ」
「なるほど、近くでございます」
「ここは、駒形堂と申す御堂で、馬頭観世音を、おまつりしてある……いや、これは、よけいなことを……」
九兵衛は、低い声で笑った。
雪丸も微笑している。
弓師・八兵衛が入って来て、九兵衛に何やらささやき、また出て行った。
この家には、八兵衛のほかに、弟子も家族も、
（いないらしい）
と、おもわれるほどに、しずまり返っていた。
「いま、手の者から知らせがござった。たしかに、阿部又七郎は浅田屋に来て、酒をのんでいるとのことでござる」
雪丸が、うなずいた。いつもの雪丸と少しも変わりがない。
「供が三人。いずれも、阿部に取り入っている剣客らしいとのことじゃ」
「はい」

「わしも雪丸どのと共にまいるが、助太刀はできぬ。それで、よろしゅうござるか？」
「はい」
「雪丸どのが一人にて、亡き岩蔵どのの敵を討ちたいと申されたので、そのように、はかろうたのでござる」
「ありがとう存じます。ところで島田様。私はいま、申しあげたいことがあります」
「ほう……何でござる？」
「私は、敵を殺しませぬ」
「討たぬ、と？」
「見ていて下され、島田様。私は、岩蔵どのの心にかなった、敵討ちをいたすつもりでおります」
　このとき八兵衛が、茶と白湯を運んで来た。
　島田九兵衛は、かねてより、阿部又七郎が料理屋の浅田屋へよく来ることを探知し、浅田屋の女中から情報を得ていたとみえる。
　今夜、阿部が浅田屋へ来ることも、その女中からの知らせで、昨日のうちにわかっていたのだ。
　そこで、九兵衛は、もろもろの準備を手ぬかりなくおこなうと共に、成子雪丸へ知らせたのである。

いま、浅田屋には、九兵衛の手の者が二人、客として入ってい、そのうちの一人が、阿部又七郎と三人の剣客があらわれたことを、弓師の家へ知らせに来たのであった。

八兵衛が運んで来た茶をのみつつ、島田九兵衛は沈黙し、白湯をゆっくりとのむ雪丸を見まもっている。

亡き白根岩蔵の心にかなった敵討ちとは、

（どのような？）

ものなのか……。

成子雪丸が、かの八角棒を持って阿部又七郎に立ち向うつもりであることは、はっきりしている。

何となれば、雪丸は八角棒のほかに脇差一つを帯びているのみだからだ。

（大丈夫かな……？）

さすがに、九兵衛の胸の内が、おだやかではなくなってきた。

（あの棒で、阿部をふくめて四人の手練者を、殪すことができるのであろうか？）

島田九兵衛は、助太刀をしたくとも、まったく腕に自信はない。

しかし、最後まで雪丸につきそい、事の始終を、

（見とどける……）

決意に変わりはない。

場合によっては、阿部一派に自分が斬られることになるやも知れぬが、
（それもよい）
九兵衛は、腕におぼえがなくとも、死を怖れぬ老人である。
一対四の勝負を前にして、成子雪丸が、あまりにも落ちつきはらっているのに九兵衛は内心、瞠目していた。
（このような若者を、わしは見たことがない。これは、雪丸どのの天性なのか……）
雪丸は、白湯をのみつつ、九兵衛が出した絵図面にながめ入っている。
二人とも、もはや言葉がなかった。
打ち合わせるべきことは、すべて終えてある。
敵討ちのときは、雪丸と九兵衛の二人のみという約束であった。
しばらくして、雪丸と九兵衛が交互に、小用に立った。
九兵衛が、雪丸に、
「そろそろ、お仕度を……」
「はい」
雪丸は革紐を懐中から出し、襷にまわした。
そのとき、また、浅田屋から知らせが入った。
この日、阿部又七郎は、例の和田小平次ほか二名の門人を引きつれ、夕刻から浅田屋へ来

て酒をのみはじめていた。
阿部は、和田小平次の手配により、坪内惣市の暗殺をはかったが、重傷の坪内は堤の上の叫び声に助けられ、何処かへ逃げてしまった。
和田も阿部も、それが気にかかっていたけれども、数日後に、坪内惣市の遺体が何処からか本所の居宅へ届けられて、葬式もおこなわれ、五十俵二人扶持の家督は一人息子が継いだと聞いた阿部又七郎が、
「和田。それに間違いはないな?」
「この目で、葬式を見てまいったのですから、大丈夫です」
その後、何も起らない。
深川の妾宅では、お金が殺害されたので、土地の御用聞きや、町奉行所が探索をした。
したが、これまた証拠がない。
「人殺し」
その叫び声を聞いた者は何人もいたが、怖がって外へ出なかったという。
この事件も、迷宮入りとなってしまったのだ。
ここにいたって、阿部又七郎は、
(もう、大丈夫だ)
と、おもった。

そこで、道場新築の工事を急がせたのである。
父の阿部平内の顔によって、よい土地を借り受けることができたし、父も兄も、
「しっかりやれ」
惜しみなく、援助をしてくれる。
水野道場の焼失と、大久保八郎の横死は、いつの間にやら、
「盗賊どもの仕わざ」
ということに、なってしまったらしい。
いまは、江戸の剣術界においても、うわさにものぼらぬようだ。
いよいよ、新春が来れば、
〔奥山念流・阿部又七郎〕
の、道場開きとなる。
「いやぁ、阿部先生。何とも、おめでたいことでござる」
と、和田小平次や二人の門人が、阿部を取り巻いて盃をあげる。
阿部又七郎は、上きげんであった。
「さて、そろそろ帰ろうか」
阿部が、そういったのは、五ツ半（午後九時）ごろであったろう。
花川戸の駕籠屋へたのんだ町駕籠が一梃。これに阿部が乗り、門人三名は阿部を屋敷まで

送る。これが、いつものならわしだ。

阿部の父・阿部平内の屋敷は、浅草の猿屋町にある。

二千石の大身旗本ゆえ、屋敷も千坪余もあり、堂々たる長屋門をかまえている。

間もなく、麻布の道場の新築が成れば、阿部又七郎は父の屋敷を出て、自分の道場へ移ることになるのだ。

浅田屋の主人夫婦や女中たちに見送られて、阿部又七郎一行が外へ出た。

「とうとう、落ちてまいりました」

と、浅田屋の女房がいった。

「おう、初雪だな」

そういったのは、和田小平次だ。

阿部又七郎は無言で、駕籠へ乗った。

並木町の浅田屋から、猿屋町の阿部邸までは、さして遠い道のりではない。

黒い空から、はらはらと冷めたい雪片が、しずかに落ちて来る。

浅田屋の前の大通りは、蔵前通りという。

この通りを南へ行けば、左側に、大川（隅田川）を背にした幕府の宏大な御米蔵を見ることができる。

さらにすすめば、江戸城・外郭の浅草御門へ突き当る。

阿部屋敷は、御米蔵の前をすぎて、右へ折れたあたりだ。
日中の蔵前通りは、人通りが絶え間もなく、大小の商店が軒をつらねているが、夜ともなれば、ほとんど人影は見えぬ。
夏ならば、灯が洩れている商家もあるけれども、冬の夜は暗闇の世界であった。
阿部又七郎を乗せた町駕籠の前に和田小平次。両側に二人の門人がつきそっている。彼らは、いずれも提灯を提げていた。
浅田屋を出て間もなく、一行は、駒形堂の手前の広場へさしかかった。
そのときだ。
先頭を歩んでいた和田小平次が、
「何者だ？」
誰何の声をあげた。
暗夜の闇の底に沈んでいた人影が一つ。和田の提灯のあかりに浮かんだのだ。
その人影は、すっと立ちあがった。
成子雪丸である。
「きさま、何だ？」
和田小平次が提灯を差しつけようとした、その瞬間に、
「あっ……」

呻いて、提灯をほうり出し、胸を押え、崩れるように倒れ伏した。
「曲者!!」
「油断するな!!」
門人ふたりが提灯を捨て、大刀を抜きはらった。
こうしたとき、駕籠舁きは、すぐに逃げるものと相場がきまっている。
「うわぁ……」
駕籠を置いて、二人の駕籠舁きは、闇の中を泳ぐように並木町の方へ逃げて行く。
心得のない門人たちが捨てた提灯は、めらめらと燃えあがった。
そのとき、門人ふたりは、雪丸に何処をどうされたものか、声もなく打ち倒れていた。
阿部又七郎は、駕籠から飛び出すのと同時に、羽織をぬぎ捨てている。
さすがであった。
「曲者、名乗れ!!」
と、阿部が叫んだ。
「そこもとの手によって横死をとげた大久保八郎の……」
「な、何……」
「大久保八郎の弟、白根岩蔵と申す」
「う……」

「兄の恨みをはらしたい。尋常に立ち合われよ」
しずかにいいながら、成子雪丸は右へ躰を移した。
「ぬ!!」
阿部又七郎が、大剣をぬきはらった。
提灯の火が消えたので、暗夜の闇となったが、駒形堂前の常夜燈のあかりは、微かに対峙する二人の影を浮きあがらせている。
大剣を正眼にかまえた阿部の目には、白根岩蔵と名乗った相手が、武器をもっていないかのように見えた。
いや、何か持っている。
右手が、何か棒のようなものをつかんでいるようだが、それが、どのような武器なのか、長さはどれほどなのか、まったくわからぬ。
つまり、成子雪丸は例の八角棒の先端一尺ほどのところをつかみ、それを前に出し、残る約三尺を後方に引いているので、闇夜のことだし、それが阿部の目に入らないのだ。
阿部は、戸惑った。
相手は若い男らしいが、躰のかまえは、地から根が生えたように見事なものであった。
(こやつ、ただ者ではない)
と、感じたが、相手は剣を持っていないのである。

雪が激しくなってきた。
阿部又七郎が一歩、二歩と退り、正眼の剣を脇構えに移した。
そのときであった。
静止していた成子雪丸の躰が、急に、うごき出した。
雪丸は正面から、阿部又七郎へ向って、つかつかとすすんできたのである。
すすみながら、雪丸の右手から八角棒が二尺、三尺とのびて出た。
阿部又七郎は、間合をつかみかね、またしても後退した。
雪丸は、尚もせまる。
このように書いてゆくと、かなりの時間がたったようにおもえようが、実際は一分にみたなかったろう。
ついに、たまりかねた阿部又七郎が大剣をまわして、
「たあっ!!」
せまってくる雪丸の頭上へ打ち込んだ。
雪丸は逃げなかったが、ぱっと足をとめた。
同時に、雪丸の右脇から八角棒がすべり出て、前方へ突き出された。
口中から内臓が飛び出したかとおもわれるような唸り声を発して、阿部又七郎の躰がぐらりとゆれた。

阿部の大刀が雪丸の脳天へ打ち込まれようとする一瞬前に、雪丸が電光のごとく突き出した八角棒は阿部の胸もとを撃ったのである。

成子雪丸は、

「鋭!!」

はじめて気合声をあげ、左へまわり込み、よろめいて立ち直ろうとする阿部の右肩を、八角棒で打ち据えた。

右肩の骨が砕けた阿部は、大刀を落して悲鳴をあげた。

がっくりと左の片膝をついた阿部は、それでも必死に脇差を抜こうとしたが、どうにもならぬ。

阿部の右腕は、用をなさなくなっていた。

さらに雪丸は、阿部が立てている右の片膝を強打した。

阿部の、凄まじい叫び声が起った。

右膝の骨も、打ち砕かれたのだ。

薄く積もりはじめた雪の道へ倒れた阿部又七郎は、苦痛に転げまわっている。

成子雪丸は、もう、そこにはいなかった。

「ようやって下された、雪丸どの……」

闇の道を雪丸と共に走りつつ、島田九兵衛が、

「すべて、見とどけましたぞ。いや、実に、お見事であった」
二人は、先刻の弓師の家へ駆けもどった。
と……。
弓師の家の裏手に、二梃の町駕籠が待機していたではないか。
弓師の八兵衛が、二人を待っていて、
「さ、お早く」
「む。厄介をかけたのう、八兵衛」
雪丸と島田九兵衛が、するりと駕籠の中へ入った。
二梃の町駕籠は、雪降る闇の中を、音もなく立ち去って行った。

成子雪丸が、角筈の日影道場へ帰って来たのは、翌朝である。
雪は、昨日の夜半に熄んでいた。
「雪になったので、島田さまに引きとめられてしまった」
何事もなかったような、雪丸の言葉と声であった。
八角棒は、島田屋敷へ置いたままだ。
「そのようなことだろうと、おもうていました」
さとが、雪丸の着替えを手つだってから、朝餉の仕度にかかった。

朝餉をすませた雪丸は、昨日の朝と同じように道場へ出て行った。
この日も雪丸は、日が暮れるまで、門人たちと稽古にはげんだ。

良夜

また、新しい年安永十年（西暦一七八一）が明けた。

成子雪丸は二十三歳となり、妻のさとは十九歳に、そして、むすめの菊は二歳となったわけである。

麻布・三ノ橋に、ほとんど完成していた阿部又七郎の道場は、ついに道場開きの日を迎えることがなかった。

阿部は、父の屋敷で、重傷の身を横たえている。

右の肩と膝の骨を打ち砕かれてしまったのでは、剣客としての再起は不可能であった。

阿部は心身に強烈な打撃を受け、病床に呻吟している。

あの夜、阿部と共に浅田屋で酒をのんでいた和田小平次と二名の門人は、奉行所の調べを受けたが、

「突然、あらわれた曲者ゆえ、何者か、よくわかりませぬ」

と、こたえた。

成子雪丸が、阿部又七郎へ、

「大久保八郎の弟・白根岩蔵」

名乗りをかけたとき、和田と門人ふたりは、雪丸の八角棒をくらい、気絶して路上に倒れ伏していた。

闇夜のことで、三人は、雪丸の面体もわからなかった。

阿部又七郎も、医者の手当が終ったところで、尋問を受けたが、雪丸が名乗ったことは口に出さず、三人の門人と同じようにこたえたのである。

年が明けてからも、成子雪丸や島田九兵衛の日常に変わりはなかった。

二人は、去年の初雪の夜以来、まだ一度も会っていない。

そのうちに……ということは、新年の一月二十二日のことであったが、御家人の和田小平次が、幕府の評定所に呼び出された。

そして、そのまま、数日がすぎても帰宅をゆるされなかった。

評定所というのは、江戸幕府の最高裁判所のようなもので、老中・三奉行・大目付が中心となり、幕府・大名・旗本にかかわる事件を処理する。

これを聞いて顔色が変わったのは、阿部又七郎の父や兄である。

「又七郎の耳へは入れるな」

父の阿部平内友行は、長男の平十郎へこういって、何やら運動を開始した。
賄賂の金を要所へ配り、又七郎や二千石の家柄に、
（傷がつかぬように……）
と、おもってのことなのであろう。
しかし、和田小平次は、春が来ても評定所から帰されなかった。
よほどに、きびしい取り調べを受けているものとみえる。
阿部又七郎は、桜花が咲くころ、どうやら床の上に半身を起せるようになった。

ちょうど、そのころであった。
阿部平内・平十郎の父子が、これまた幕府の評定所へ召喚された。
さすがに、その日は帰邸をゆるされたが、つぎの日、父の平内友行のみが呼び出された。
「兄上。これは、どうしたことです？」
たまりかねて、阿部又七郎が兄の平十郎に病間へ来てもらい、問いかけると、
「知らぬ」
「なれど……」
「だまれ!!」
平十郎は弟をにらみつけ、

「何も彼も、おのれの不始末からだ」
「兄上……」
「うるさい」
足音も荒く、平十郎は出て行ってしまった。
その平十郎が三日後に、またも評定所へ呼び出された。
前夜、平十郎は父の平内と共に綿密な打ち合わせをおこなったようである。
夜に入って帰邸した平十郎は、蒼ざめた顔で父の居間へ入ると、
「父上。もはや、これまでです」
「な、何……」
「いかに弁明いたそうともむだかと存じます」
二人は、長い間、密談をしていたようだ。
「父上が、又七郎めを、あまやかせすぎたのです」
激昂した平十郎の声が廊下まできこえた。
阿部邸内は、異常な緊張に包まれた。
つぎの日。阿部父子がそろって評定所へ出頭し、夜になって平十郎のみは帰邸したが、父の平内は、
「とどめおく」

とのことで、帰してもらえなかった。

かくて、阿部平内は、三日間にわたって評定所にとどめおかれ、取り調べを受けたらしい。

裁決が下ったのは、十日後である。

和田小平次が、知っていることのすべてを白状におよび、評定所は、その裏づけを一つ一つ、丹念にしておいてから、阿部父子を呼び出したのだ。

阿部平内・平十郎の父子が、

「大久保八郎を殺せ」

そういって、直接にいまは亡き坪内惣市に大金をわたしたのではないが、つまりは、そのための金を三男の阿部又七郎へ手わたしたのは事実である。

そして、あの事件を、もみ消すため、金品をつかって諸方へ運動した事実は、もはや隠しようがないところまで、洗いあげられていた。

このほうを、むしろ評定所は重くみたようだ。

阿部平内友行は、二千石の俸禄を没収された。

幕府は、阿部家を取り潰したが、辛うじて阿部平内は切腹をまぬがれたのである。

これは、かつて平内友行が、将軍の側近く仕え、信任を得ていたこともあったので、そのことを幕府も勘考したのであろう。

むろんのことに、浅草・猿屋町の屋敷も幕府が没収してしまった。

奉公人も散り散りとなり、阿部一家は、
「どこへ行ったものか、行方も知れぬ」
という人もあり、
「なんでも、府中（静岡）の縁類をたよって行ったそうな」
そのような声もきこえた。
麻布・三ノ橋に、ほとんど完成していた阿部又七郎の道場は、幕府の手によって打ち壊された。
阿部又七郎が半身不随の身で、頭をまるめ、仏門へ入ったという噂が風に乗って、成子雪丸の耳へ入ったのは、七、八年も後のことであったろうか。
雪丸は、
（阿部又七郎が僧侶として生きる道を得た。これは、何よりもうれしい）
白根岩蔵の墓の前で、
（岩蔵どの。これで、よろしかったか、どうか……あなたの遺言にそむき、あなたの恨みをはらさずにはいられなかったが、いま、阿部が出家をしたと風のたよりにきいて、ようやく、この胸も落ちつきました）
胸の内で、語りかけた。
そのとき、島田九兵衛も、角筈村の名主・本郷庄左衛門も、すでに世を去っていた。

はなしをもどしたい。

阿部父子が処罰された、この年の夏になり、白根岩蔵の命日がめぐってきたとき、下総佐倉に道場をかまえる剣客・笠井次郎右衛門が、わざわざ江戸へ来て岩蔵の回忌の席へあらわれ、冥福を祈ってくれた。

また、大坂の剣客・柳嘉右衛門からも、懇切な手紙と共に、供花の金子がとどけられた。

これは、島田九兵衛が、はじめて両剣客へ、白根岩蔵死去の件を知らせたからだ。

だが、岩蔵の死の真相だけは打ちあけなかったようである。

成子雪丸へ、九兵衛はこういった。

「あの方々へは、岩蔵どのに心ノ臓の発作が起り、急死したと告げておきました。雪丸どのも、そのつもりでいて下され」

ところで……。

口入屋の備前屋六兵衛は、どうなったろう。

さすがの島田九兵衛も、備前屋には手がつけられなかったようである。

亡き坪内惣市は、備前屋についても、九兵衛へ告げていたはずだ。

けれども、坪内の自白だけではどうにもならなかった。

しかも坪内は、自白をした数日後に世を去っている。

これでは、いわゆる、

「生き証人」にならぬわけだ。

「いろいろと、備前屋のほうも探ってみましたが……」

島田九兵衛が成子雪丸に、

「なかなか、したたかなやつどもにて、わずかな証拠も残してはおらぬ。それに、うかつに手をつけると、罪咎もなき人まで巻き込むおそれがありましてな」

そう洩らしたことがあった。

おたかだけでも生き残っていたならば、手のつけようもあったろうが、いまさら、それをいってみたところではじまらぬ。

備前屋六兵衛は、十年ほどして死んだ。

なんでも、亀戸天神の門前にある料理茶屋で酒食をしていて、厠へ行き、そのまま座敷へ帰って来ないので、女中が見に行ったところ、厠の中で、何者かにくびすじの急所を鋭い刃物ではね切られ、即死していたとのことだ。

島田九兵衛は、その数年前に病死していたから、備前屋六兵衛の怪死について、意見を聞くことはできなかった。

それはさておき……。

角筈村の日影道場における、成子雪丸の生活は以前と少しも変わりがなかった。

その中にも、白根岩蔵の回忌の折に知り合った笠井次郎右衛門との親交が生まれ、回忌の後に、いったん佐倉へ帰った笠井が、

「成子殿と、ゆるりと語り合いたくなって、出てまいった」

夏も終ろうとする或日に、突然、日影道場へあらわれた。

笠井次郎右衛門は、七日ほど日影道場へ泊り、雪丸と門人たちの稽古ぶりを見たり、近辺を見物したりして、帰って行った。

笠井は、帰るときに、

「成子殿の道場は、この世に、ただ一つの、特別なものをそなえているようにおもわれる。このような道場を見たのは、はじめてでござる」

と、雪丸にいったそうな。

そのようにいわれても、雪丸には、どこが特別なのか、よくわからなかった。

日影道場の門人たちの大半は、角筈村か、近辺の村々の、農家の若者たちである。

彼らは何年かを道場での稽古にはげみ、その若い肉体を鍛えぬいてから、一村民となって暮す。

中には一家の主となり、妻や子ができてからも、寸暇を得ると日影道場へ駆けつけて来て、

「成子先生。稽古を、お願いいたします」

わずかの間だが、木太刀をとって稽古をする者もいる。

日影一念が在世のころに、若者だった門人には、子ができ、孫も生まれていた。
そうした門人たちは、わが子を、成子雪丸の代となった日影道場へ通わせる。
雪丸の剣術は、亡師・日影一念から教えられたことを、
「そのままに、門人たちへつたえているだけなのです」
と、雪丸が笠井次郎右衛門へ語ったことがある。
つまるところ、剣の修行をすることによって、
「自分の躰の仕組みをわきまえ、そのはたらきを知る。これが、はっきりと呑み込めてくるならば、自ずと、心のはたらきに狂いを生じなくなるものだ」
このことであった。
日影道場の門人たちの中には、
「自分の剣名をあげ、世に知られるほどの剣士になろう」
と、希望する者は、一人もいない。
また、いたとしても、そうした門人たちならば日影道場をやめ、江戸の、しかるべき道場をえらぶにちがいない。
それはそれでよい。
そもそも、道場主の成子雪丸に、そのような欲と希望がないのだ。
笠井次郎右衛門が、

「世に稀な……」

道場だといったのは、このことであろうか。

雪丸は、どこまでも、

（この道場は、恩師・一念先生から自分があずかっているにすぎぬ）

その姿勢を、くずさなかった。

自分が死んだ後の、道場の後継者についても、考えたことがない。

変転する時代のながれの中で、

「絶えるものは自然に絶え、残るものは残る」

のである。

これは、生前の日影一念が雪丸や白根岩蔵に洩らした言葉だ。

成子雪丸は年少のころから、自分の宿命に逆らわなかったが、これまでに二度だけ、自分の願いを実現させた。その一は、名主の本郷庄左衛門にたのみ、日影一念の門人となったことで、その二は、白根岩蔵の恨みを、はらしたことであった。

もっとも、白根岩蔵は、

「自分と、おたかの横死については、すべて、忘れてくれるように」

と、雪丸へ言い遺した。

してみれば、死にのぞんだときの岩蔵は、だれに対しても恨みを抱いていなかったことに

なる。

だから、成子雪丸と島田九兵衛が、岩蔵を謀殺した真犯人が阿部又七郎であることを探り出し、これに制裁をあたえたのは、むしろ、やむにやまれぬ自分たちの執念から出たものといってよい。

両親の名も顔も知らぬまま、捨て子にされた成子雪丸にとって、日影一念と本郷庄左衛門は〔親〕であり、白根岩蔵は、

（まさに兄……）

そのものであったのだ。

その兄が、

「忘れるように……」

と言い遺しても、雪丸の胸の内の怒りは、月日を経てもしずまらなかったのである。

これは、島田九兵衛も同様であったのだろう。

九兵衛は雪丸に、

「岩蔵どのは、若いころの自分そのものじゃ」

洩らしたことがあった。

島田九兵衛は、その前身をだれにも告げぬまま、世を去ったが、白根岩蔵に対しては、よほどに愛情を抱いていたのであろう。

その〔愛〕のかたちは、父性のものといってよかった。
九兵衛と岩蔵との好誼は、ごく短かかったが、島田九兵衛の老軀に燃えさかった怒りの炎は激しく、強烈なものであった。
「老いた自分に、このような怒りがわき起ろうとは、おもうてもみなかったことでござる」
九兵衛は、雪丸に、しみじみといったものである。
九兵衛は、焼死した下男の忠六や、おたかの身もとについて、尚も調査をつづけた。
「なれど、なかなかに、手がかりがつかめませぬ。この世には、わしと同じような人びとが、いくらもいるようじゃ」
仲秋に入った或日に、日影道場を訪ずれた島田九兵衛が、成子雪丸にそういった。
九兵衛は供の者もつれず、ひとりで町駕籠へ乗り、予告もなしにあらわれたのだ。
「雪丸どの。早いものじゃ。今年も、間もなく暮れてしまいますな」
「はい」
「この九兵衛の寿命も、さして長くはござるまい。あと二年か、三年か……」
「……？」
この日の島田九兵衛は、妙に寂しげであった。
そして、九兵衛にしてはめずらしく、夜に入っても帰ろうとはせず、二歳になった菊をあやしたり、雪丸と世間ばなしに興じたりした。

さとは、夕餉の仕度にかかった。

「なにもございませぬが、めしあがって下さいませ」

さとがすすめると、九兵衛は大いによろこび、

「ありがたく、馳走にあずかりましょう」

と、こたえた。

これは、かつてなかったことだ。

さとは先ず、笊の上へ茹でた衣被（皮をむかぬ里芋の子）を出した。

衣被で酒をのむうち、芋茎の汁が出た。

「うまい。これは、うまい」

九兵衛は、舌つづみを打って、汁のおかわりをした。

そのうちに、月がのぼった。

日中の日ざしは強いが、夜気は、さすがに冷え冷えとしている。

居間の障子を開けはなち、縁先に近いところへ膳を運び、雪丸夫婦は九兵衛を接待した。

「雪丸どのも、御夫婦で、わしが屋敷へまいられよ。日暮里の岡は月の名所、虫の名所でござる」

九兵衛は、そういったが、

「いやいや、この家の庭も、月の光と虫の声に事は欠かぬ」

しきりにうなずいていたが、ふと、おもい出したように、
「のう雪丸どの……」
「はい？」
「亡き白根岩蔵どのが、この道場を出奔いたしたのは、日影一念先生の秘伝書が原因でござったな」
「さようです」
「その秘伝書は、いま……？」
「亡師の遺言どおりに、墓の中へ埋めてあります」
「秘伝書の中身を、ごらんになったか？」
「いいえ」
「ほう……」
しばらくの間、凝っと雪丸の顔を見まもっていた九兵衛は、やがて話題を転じた。
秘伝書の中を、もしも雪丸が見ていたなら、
（どのようなことが書かれてあったのか？）
後学のために知りたい、と、島田九兵衛はおもったのやも知れぬ。
白根岩蔵の運命を変えてしまった一巻の秘伝書だけに、なおさら、九兵衛は関心を抱いていたのであろう。

成子雪丸は、秘伝書の中をあらためぬままに、これを亡師の墓へ埋めたわけだが、その秘伝書がどのようなものであったかは、わきまえている。

それは、ほかならぬ白根岩蔵から聞いたのであった。

水野道場が焼け落ちた、あの夜……。

自分の命脈が間もなく絶えることをさとった白根岩蔵は、西光寺の若い僧にたのみ、角筈村の成子雪丸のみへ、急を知らせた。

そして、すでに息絶えたおたかの遺体の前で、岩蔵は雪丸と二人きりで半刻（一時間）ほどをすごしたのである。

そのときの、岩蔵の遺言と、語り合ったことがらの一部は、すでに書きのべておいた。

だが、書き忘れていたことが一つだけあった。

それは、かの秘伝書一巻の内容についてだ。

岩蔵は、秘伝書を雪丸に返したとき、

「内容を見ぬのか？」

と、尋ね、雪丸は「別に見たいとはおもいませぬ」と、こたえている。

そのとき、岩蔵は茫然となって雪丸を見つめた。

岩蔵は死にのぞんだとき、秘伝書の内容を、雪丸に告げたのである。

「いまさら、ここに、おぬしへ告げなくともよいとおもうが、これは、のちのち、おぬしに

とっても、聞いておいて悪いことではないので、いっておこう」
苦しげな息づかいをしながら、白根岩蔵は、こういった。
「秘伝書は、白紙であった……」
「な、何と……」
これには、雪丸もおどろいた。
「白紙……何も、一字も書いてなかった。紙は古びていて、虫喰いの跡もあったが、つまるところ、ただの白紙が、巻物になっていただけだ」
「ふうむ……」
「おどろいたか、雪丸どの」
「はい」
「私も、おどろいた。あのようなものを、何故、恩師は御自分の遺体と共に土中へ埋めよ、と、いわれたのか……考えぬいてみたが、どうしてもわからぬ。おぬしに、わかるか？」
「わかりませぬ」
「ついには……巻物の表具の下に、何か書いたものが隠されているのではないか、などと、あさましい思案に取りつかれ、小柄をもって表具を剝がそうとしかけたこともあった。われながら……われながら、はずかしいことだ」
「……」

「なれど、よくよく、おもいみれば、亡師・日影一念先生が、そのようなことをするはずもない。おぬしは、何とおもう？」

「さて、わからぬ……」

「私も、いまだに、一念先生の胸の内がわからぬ。だが……だが、先生は、あの巻物をたいせつにしておられ、墓に埋めよと申された……」

白根岩蔵は、夜も眠れぬほどに、白紙の秘伝書の意味を考え、悩み、ついにわからぬまま、あの世へ旅立ってしまった。

岩蔵の最後の言葉によって、このことを知った成子雪丸は、依然、墓の下から秘伝書を取り出し、あらためてみるようなことはしなかった。

何となれば、岩蔵が「白紙であった」というならば、それにちがいはないからである。

古びて、虫喰いの跡もあるという白紙の秘伝書一巻は、おそらく、故日影一念にとって、おもい出が深く、たいせつなものであったのだろう。

岩蔵も雪丸も、だれもが、日影一念の過去を知らぬ。

若いころの一念が、何処で、どのようにして剣の修行を積んだものか、まったく、わからない。

成子雪丸にとって、そうしたことは、どうでもよいことであった。

純一無垢な、白い巻物が語るものは、雪丸にとって、無限のものだ。

一念が死の床についたとき、岩蔵と雪丸を交互に見やりつつ、
「岩蔵は岩蔵、雪丸は雪丸……」
つぶやいた亡師の声が、成子雪丸の脳裡によみがえってきた。
岩蔵の死後、自分の眼にはたしかめていないが、白紙の秘伝書が折にふれて雪丸の脳裡に浮かぶ。
雪丸は、この秘伝書の由来を知ろうとはおもわぬ。
ただ、その白い紙の底から、
「人の心は、いつまでも、白紙のごとくあれ」
という、亡師の声がきこえてくるような気がしてならない。
その夜、島田九兵衛が、待たせてあった町駕籠に乗り、帰って行ったあとも、雪丸は縁側へ出てうごかなかった。
食膳の後始末をしてから、さとが新たに酒の仕度をして、傍へ来た。
「いま少し、おあがりになっては……」
「そうだな」
このごろは、雪丸も酒が好きになったようだ。といっても、毎日のむわけではない。
たとえば今夜のように、親しい人があらわれたときなど、たのしげに酒盃を手にするようになったのである。

「よい月夜になりました」
「さと。お前も、少しのむがよい」
「はい」
さとは、素直に盃を受けた。
月の光は庭にみちあふれ、それが室内にまでながれ入ってきていた。
さとは、行燈のあかりを吹き消し、
「このほうが、お月見にはよろしゅうございましょう」
と、微笑んだ。
「うむ。このほうがよい。さと、酌をしてくれぬか」
「はい」
酌をしながら、うれしげに、さとがいった。
「だんなさま。このような良い夜は、めったにございませぬな」

解　説

影山　勲

新聞連載小説を書くには、作家によって適不適があるように思える。一回の原稿量は四百字詰め三枚である。それには、人間が息を吸って吐くような、呼吸のタイミングの妙がある。このタイミングは、恐らく天性の部分が多いであろう。その点で、池波さんは、天性として新聞連載に適している人であった。

かつて作家たちにとって三枚のうちにヤマをどう作るかはその腕の見せ所であった。が、私が新聞連載を担当するようになって二十余年の間に大きく様変わりしたという実感を持つようになった。無論、ヤマができればいうことはないが、ヤマがなくても、ある程度読み進み、いったん読者と作家の間に信頼感が生まれると、容易に読者は離れていかなくなったようだ。

この点で、池波さんは、読者に対して一回一回ヤマをつくり、頑なに伝統的な手法を守り続けて来た人である。息を吸って吐くような呼吸が、ぴたりと合った原稿であった。天性、新聞連載に適した体質だったのであろう。この『秘伝の声』でも、

「わしの吐く息、吸う息に気をつけておくがよい。それが稽古なのじゃ」

と、老剣客日影一念にいわせている。連載小説にも、これと同じことがいえる。

池波さんの生涯のうち、産経新聞には二回連載していただいた。最初は『旅路』であり、二回目は『秘伝の声』（昭和六十年八月十九日から六十一年四月三十日まで）であった。『秘伝の声』は六十一年十月、上下巻本として、新潮社から刊行された。これが池波さんの最後の新聞連載小説になった。

連載開始前の「作者のことば」で、次のように書いている。

「ころは江戸時代、江戸の郊外に、ささやかな道場をかまえる老剣客と三人の弟子。この三人の弟子が今度の小説の主人公だが、あるいは二人になるかも知れない（結局、作品では二人になった）。いつものことで、私の小説は書きはじめてみないことにはわからないのだ。トップ・シーンだけは、いま、私の頭の中に、はっきりと浮きあがってきたけれども、後のことはさっぱりわからぬ。読者と共に、書きすすめて行きたいとおもっている」

物語のしょっぱなから、名主の本郷庄左衛門の屋敷に押し込み強盗が入る。まず読者の度肝を抜いてから物語が始まるので、さて、これからどんな展開になるのか、読者に期待を持たせる。

この小説が始まる直前の七月十三日、ご自宅でインタビューして、作品の構想をきいた。

「新聞の連載というのは、第一回目で読者を引っ張り込まなくちゃいけませんからね。特に

時代小説は、昔のように書いてたんじゃ読んでくれませんよ」

というわけで、池波さん独特の演出によったのであろう。

老剣客日影一念は当時の剣客の常として、全国各地で修行をしたあと、武蔵国角筈村に住み着き、もう二十五年になる。名主の本郷庄左衛門の全面的な庇護もあって、日影道場を開いている。上野国吾妻郡の出身らしい。

「○○流」とかいう流儀を名乗ってはいないが、剣は滅法強い。村人に親しまれ、付近の若者達に剣術を教えるとともに、無頼の徒から村を守る〝用心棒〟の役目も果たしている。

弟子に、一念と同郷の白根岩蔵と、雪の日に成子坂で捨子として拾われた成子雪丸がいた。そのころは、七歳年上の岩蔵の方が剣の腕が上であったが、二人は兄弟愛のようなもので結ばれていた。二人のことを作者は次のように形容している。

「白根岩蔵は、躰もがっしりとしており、顔だちもととのっていて、色白で両眼が黒ぐろと大きい。

名前は、いかにも武骨に感じられるが、声もやさしげだし、美貌である。

それに引きかえ、成子雪丸は、優美な名前が、そのまま容貌をあらわしているとはいいがたい。

さすがに筋骨はきたえられているけれども、細い躰つきだし、それに小柄なのだ。色も黒く、

『このように、猿のような面体をしていて、雪丸とは笑わせる』

などと、白根岩蔵は、雪丸にもいった」

すでに命尽きて臨終の床にあった一念は、一巻の巻物を二人に示し、「わしの遺体と共に、土中へ埋めてくれよ」と言い残して逝ったが、道場の後継者をどちらにするかは言い遺さなかった。ところが、遺体のそばから巻物が消え、岩蔵が失踪した。本郷庄左衛門も、岩蔵を探したが、その行方は杳としてわからない。日影道場は、当然、岩蔵が継ぐものと信じていた雪丸だが、こうなれば、やむなく後継者にならざるを得ない。後継者を決めかねた一念の、こうした結果を予想した上での〝仕掛け〟であったのかもしれない。

岩蔵は秘伝の巻物を持って出奔し、「大久保八郎」なる変名を使って、世を忍んでいた。以後、岩蔵は、師を裏切ったことへの後ろめたさを背負いながら生きることになる。これが翳りとなって、生涯つきまとうが、逆に、なぜかこの翳りがその人物像の大きな魅力になっているところが興味深い。

一方の雪丸は、幼なじみのさとを娶って、幸せに暮らしている。岩蔵が出奔した時から、彼を少しも恨んでいない。それより、早く帰ってきてもらって、兄弟子として日影道場の経営を一緒にやっていきたい、と考えている。岩蔵との連絡はやがて取れ、巻物も返ってきた。

新聞連載中、読者から、「あの巻物には、何が書いてあるのでしょうか」という問い合わせの手紙や電話を何度かいただいた。だが、その時点で、担当者である私には、巻物の内容

は、無論、わからない。知っているのは作者と、これを読んでしまった岩蔵だけである。雪丸は、といえば、それにまるで関心がないばかりか、返ってきた巻物に目を通すこともなく、師の墓にそのまま埋めてしまったのだ。その意外な内容は、思いがけず拾った幸運を恨む一味に襲われた岩蔵が、雪丸と二人だけの場面で告白する臨終直前までわからない。読者の関心を最後までつないでいく池波さんのテクニックはさすがである。

岩蔵亡きあと、雪丸と、岩蔵を食客に迎えて彼に惚れ込んだ金貸し島田九兵衛の、それぞれ兄弟愛と父性愛から発する新たな挑戦が始まる。「男シリーズ」を書き、〝美しい男の生き方〟を追究してきた池波さんの真骨頂が、締めくくりの部分で発揮される。

記者が行うインタビューというのは、格別の面白さがある。その大義名分ゆえに、普段の会話では聞けないことが聞けるからだ。池波さんにインタビューしたのは、『旅路』の産経新聞連載が始まる直前（昭和五十三年五月）、『黒白』がベストセラーになった時（同五十八年四月）、そして、この『秘伝の声』の連載開始の直前の三回である。そのたびに新しい発見があり、氏の人となりが分かってくる。『秘伝の声』の時は、氏が歯の治療をしたばかりで、少し聞き取りにくかったが――。

「初めっから全部作っちゃうと、それに沿って書かなくちゃなんないから、読者に先を読まれちゃうのね。ぼくの場合は、明日のこともわからずに書いてんだから、読者にも、先がわ

かるはずはないんだよ。昔っから全部そうなんですよ。過去の経験に照らして、これまでも失敗しなかった。新聞の場合は、半月から一カ月、週刊誌は五回くらいまでスーッといくと、大丈夫だ、っていう気になりますね。新聞は一回三枚でしょう。その次がスーッといけば、しめたもんなんだけど、なかなかそうはいかなくて、何通りも書いて、いろいろやってみる。今度の場合、舞台になる場所は決まっている。角筈といえば、今の淀橋あたりで、昔は村だったところですね。場所一つでも、うまくいかないことがある。本所にするか、日本橋にするか、で違ってきちゃう。人の名前も変えたりして、うまくいきそうだ、という感覚がつかめるまで書き直すわけです。全部作りもんだから、本当らしく見せなきゃなんない。『旅路』なんか一回目から、うまくいきましたね」

「剣客たりとも食わなきゃなんないから、パトロンのつく人と、つかない人は、違うわけです。大きな大名なんかのパトロンがついて、その家来がみんな通ってくることになれば、道場も大きくなるし、いい着物は着られるし、お金も入ってくる。運の悪い人は、本当に小さい道場で、場末にいて、生活から全部違ってきます」

この物語の日影一念は、名主本郷庄左衛門の全面的な庇護を受け、知る人ぞ知る剣客であったとはいえ、陽の当たらない田舎剣客の生活に甘んじていたのだ。

「ぼくの剣道？　兵隊に行く時に、これじゃ体がまいっちゃうと思ってね、十六歳から十八歳まで三年間やって初段。遅いでしょ。遊びながらやってるんだから。勤めていた株式取引

所の最上階に柔剣道の道場があったんですよ。おかしいでしょ、株式取引所に道場があるなんて。今はないでしょうけど、昔、立派な道場があったんです。ぼくは海軍に行きましたが、やっていてよかった、と思いましたよ。田舎のいい体をしたのが一杯いて、相撲とか、他の教練やったらまいっちゃうんですけど、銃剣術だったら、負けないんですね。剣道と大体同じですから」

インタビューの少し前、気管支が悪くて、検査のため、東京・秋葉原の三井記念病院に五日間ほど入院した。生まれて初めての入院だったので、よほどショックだったらしい。

「新聞とか週刊誌の連載は、これが最後ですよ。ああいうこと（入院）が、いつあるか、わかんないですよ。体力的にできる自信がつけば、やりますけどね。二、三年はやらないですよ。週刊誌はやるかもしれないけど、新聞はね」

という表現に表れている通り、体力の衰えを自ら感じていたようである。『旅路』の連載が始まる折の話では、

「（書く時間は）外に出ない時は、昼夜なしですよ。夕飯までに新聞二回分書いて、ご飯食べてちょっと休んでから、十一時ごろまでに週刊誌半分と、夜中から朝までに『鬼平』なら『鬼平』を書き、週刊誌十枚書くこともあるしね。外に出る時は、週刊誌半分でやめちゃうこともある」

ところが、『秘伝の声』のころになると、

「以前は、夜十一時ごろから仕事をして朝までやってたんです。最近は十一時か十二時で終わっちゃいます。朝早く起きるのはダメ。早く起きると、うち（池波家）の連中が困っちゃうんですね。肉もダメ、たばこもダメ、酒は五勺で一合に足りないんですよ。何もかもダメで、楽しみは、絵を描くことぐらい。退院して、生活が変わっちゃったんですね」

晩年の池波さんの眼差しは、白根岩蔵のような過去を背負っている者に対しても優しかった。悪玉のまま通していい人物まで善玉に変えてしまった。弟弟子の雪丸は、岩蔵を恨むことをしなかったばかりか、彼の敵討ちのために全精力を注ぐことになる。氏の人生哲学を、締めくくったような作品である。作品の上でも起承転結をつけて完結した生涯であったようだ。

（平成二年十一月、産経新聞文化部担当部長）

この作品は昭和六十一年十月新潮社より刊行された。

文字づかいについて

新潮文庫の日本文学の文字表記については、原文を尊重するという見地に立ち、次のように方針を定めた。

一、口語文の作品は、旧仮名づかいで書かれているものは新仮名づかいに改める。

二、文語文の作品は旧仮名づかいのままとする。

三、常用漢字表、人名用漢字別表に掲げられている漢字は、原則として新字体を使用する。

四、年少の読者をも考慮し、難読と思われる漢字や固有名詞・専門語等にはなるべく振仮名をつける。

池波正太郎著

真田太平記(一)
―天魔の夏―

天下分け目の決戦を、父・弟と兄とが豊臣方と徳川方とに別れて戦った信州・真田家の波瀾にとんだ歴史をたどる大河小説。全12巻。

池波正太郎著

まんぞくまんぞく

十六歳の時、浪人者に犯されそうになり家来を殺されて、敵討ちを誓った女剣士の心の成長の様を、絶妙の筋立てで描く長編時代小説。

池波正太郎著

散歩のとき何か食べたくなって

映画の試写を観終えて銀座の〔資生堂〕に寄り、はじめて洋食を口にした四十年前を憶い出す。今、失われつつある店の味を克明に書留める。

池波正太郎著

食卓の情景

鮨をにぎるあるじの眼の輝き、どんどん焼屋に弟子入りしようとした少年時代の想い出など、食べ物に託して人生感を語るエッセイ。

池波正太郎著

男の作法

これだけ知っていれば、どこに出ても恥ずかしくない！　てんぷらの食べ方からネクタイの選び方まで、〝男をみがく〟ための常識百科。

池波正太郎著

むかしの味

人生の折々に出会った〔忘れられない味〕。それを今も伝える店を改めて全国に訪ね、初めて食べた時の感動を語り、心づかいを讃える。

池波正太郎著

味と映画の歳時記

半生を彩り育んださまざまな〝味と映画〟の思い出にのせて、現代生活から失われてしまった四季の風趣と楽しみを存分に綴る。

池波正太郎著

男の系譜

戦国・江戸・幕末維新を代表する十六人の武士をとりあげ、現代日本人と対比させながらその生き方を際立たせた語り下ろしの雄編。

池波正太郎著

日曜日の万年筆

時代小説の名作を生み続ける著者が、さりげない話題の中に自己を語り、人の世を語る。手練の切れ味をみせる〝とっておきの51話〟。

池波正太郎著

映画を見ると得をする

なぜ映画を見ると人間が灰汁(あく)ぬけてくるのか……。シネマディクト(映画狂)の著者が、映画の選び方から楽しみ方、効用を縦横に語る。

池波正太郎著

フランス映画旅行

50年間映画で見つづけてきた地を初めて訪れた感動を、名優ジャン・ギャバンの思い出とからめ、自筆の絵・写真とともに語り下ろす。

池波正太郎著

ドンレミイの雨

パリの古き良き居酒屋「B・O・F」の老主人ジャンとの心のかよい合いを描いた短編「ドンレミイの雨」に、三つの海外紀行を収録する。

新潮文庫最新刊

椎名誠著

銀座のカラス（上・下）

23歳の新米編集者が突然編集長に。ええい、こうなったら酒でもケンカでも女でも仕事でも何でもこい！なのだ。自伝的青春小説。

宮尾登美子著

菊亭八百善の人びと

戦後まもなく江戸料理の老舗に嫁いだ汀子。店の再興を賭けて、消えゆく江戸の味を守ろうと奮闘する下町育ちの女性の心意気を描く。

瀬戸内寂聴著

手毬

寝ても覚めても良寛さまのことばかり……。雪深い越後の山里に師弟の契りを結んだ最晩年の良寛と若き貞心尼の魂の交歓を描く長編。

宮本輝著

螢川・泥の河

芥川賞・太宰治賞受賞

幼年期と思春期のふたつの視線で、人の世の哀歓を大阪と富山の二筋の川面に映し、生死を超えた命の輝きを刻む初期の代表作二編。

船戸与一著

砂のクロニクル

山本賞・日本冒険小説協会大賞受賞（上・下）

クルド民族の悲願、独立国家の樹立。その命運は謎の日本人が握っていた。銃は無事マハバードに届くのか。著者渾身の壮大なる叙事詩。

小林信彦著

イエスタデイ・ワンス・モア Part 2

ミート・ザ・ビートルズ

30年前の東京に迷いこんだ現代の青年が、ビートルズ来日の1966年に再びタイムトリップした!? 熱気と興奮のあの夏の冒険物語。

新潮文庫最新刊

吉本ばなな他著

中吊り小説

JR東日本電車の中吊りに連載されて話題となった《中吊り小説》が遂に一冊に！　吉本ばななから伊集院静まで、楽しさ溢れる19編。

宮部みゆき著

返事はいらない

失恋から犯罪の片棒を担ぐにいたる微妙な女性心理を描く表題作など6編。日々の生活と幻想が交錯する東京の街と人を描く短編集。

野田知佑著

ゆらゆらとユーコン

著者が初めて語る切ない日々――ナバホ居留地でのことを始め、亀山湖での暮らし、大河ユーコンの川旅などを描いたエッセイ集。

近藤唯之著

戦後プロ野球50年
―川上、ON、そしてイチローへ―

柳川事件、黒い霧事件など節目となった事件はもとより、個性的な選手・監督たちのエピソードも満載した、近藤版戦後プロ野球史。

縄田一男著

江戸市井図絵
―時代小説の楽しみ⑤―

威勢のいい女房と酒好き亭主が大喧嘩。子供は路地を駆け回り、食い詰め浪人は傘を貼る。すべてが優しかったあの時代へ誘う18の名品。

松本洋二著

アイルトン・セナ 日本伝説

神の御許へと疾走していった男――。日本人初のF1担当新聞記者となった著者が、20世紀最後の英雄を追いつづけた日々を振り返る。

新潮文庫最新刊

C・カッスラー
中山善之訳

インカの黄金を追え（上・下）

16世紀、インカの帝王が密かに移送のうえ保管させた財宝の行方は――？　美術品窃盗団とゲリラを相手に、ピットの死闘が始まった。

A・J・クィネル
大熊栄訳

燃える男

誘拐・惨殺された少女の復讐に燃え、たったひとり敵地に乗りこむ元外人部隊兵士クリーシィ！　クィネルのデビュー作、待望の登場。

A・リプリー
森瑤子訳

スカーレット（一～四）

スカーレットはレットの愛を、ふたりの心がひとつになる明日をとりもどせるのか……。永遠の愛の物語「風と共に去りぬ」の続編。

サガン
河野万里子訳

愛は束縛

美貌の妻ローランスと売れない作曲家ヴァンサン。闇の中に漂う濃く甘い香水と音楽の調べにのせて描かれる、苦く官能的な愛の現実。

J・ハンフリーズ
雨沢泰訳

愛にあふれて

家族を愛しつつも家を出た母、必死に捜す父、愛を確信できぬまま子を宿す姉、そして懸命に家族を支える17歳のわたしの愛の行方は？

C・ストラウド
二宮磬訳

狙撃警官キーオウ

同僚警官の殺害容疑をかけられ追い詰められるNY市警の狙撃手キーオウ。手に馴染んだレミントンを唯一の頼りに起死回生はなるか。

秘伝の声（下）

新潮文庫　い－16－58



平成二年十二月二十日　発行
平成六年十二月五日　十四刷

著者　池波正太郎
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社

郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　営業部（〇三）三二六六－五一一一
　　編集部（〇三）三二六六－五四四〇
振替　東京四－八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社　製本・加藤製本株式会社
© Toyoko Ikenami　1986　Printed in Japan

ISBN4-10-115658-1　C0193





定価400円（本体388円）

道場を出奔し、名を変えて諸国を巡っていた白根岩蔵は、江戸に戻って金貸しの食客となる。折しも、老中・田沼意次邸で催された剣術試合に勝った岩蔵は、見込まれて水野道場の後継者となる。それを機に、岩蔵は秘伝書を成子雪丸に返すのだが、雪丸は岩蔵を恨まず、また秘伝書を見ようとしなかった。二人の青年剣士の対照的な運命を描きつつ、著者の最後の人生観を伝えようとした長編。

ISBN4-10-115658-1

C0193 P400E